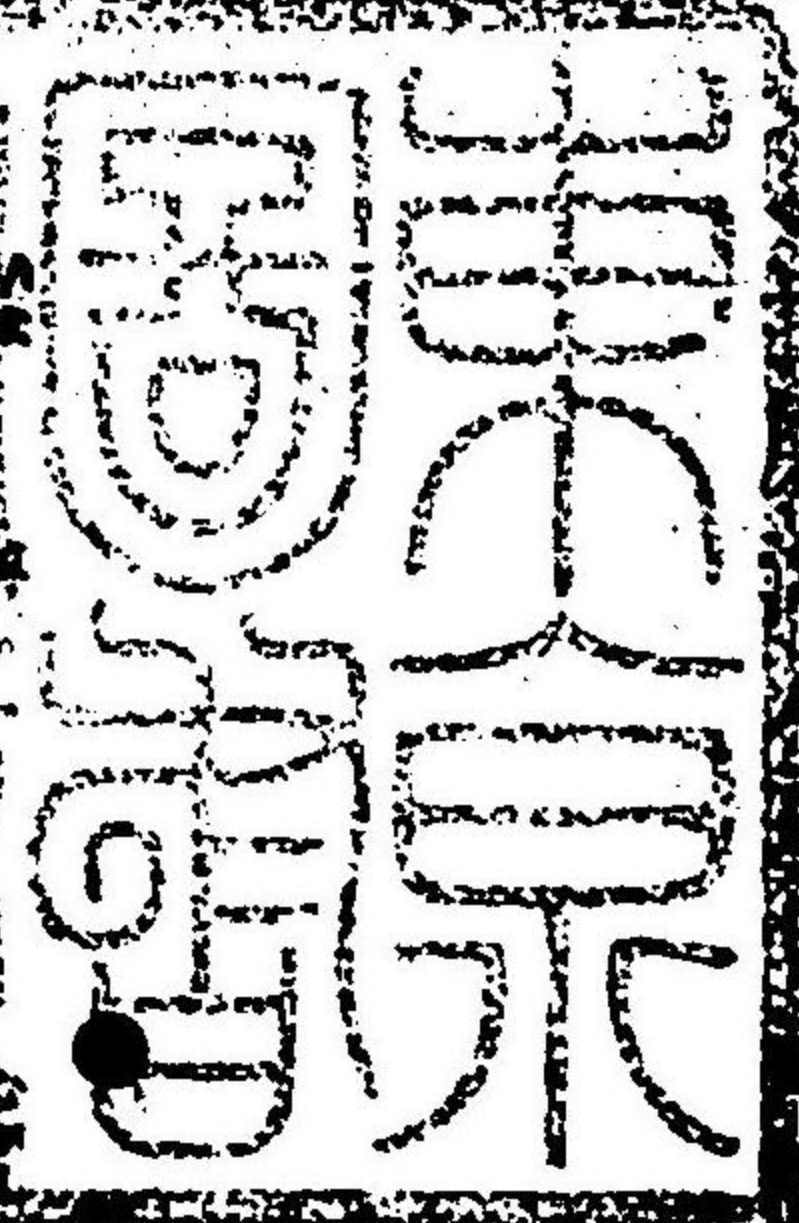


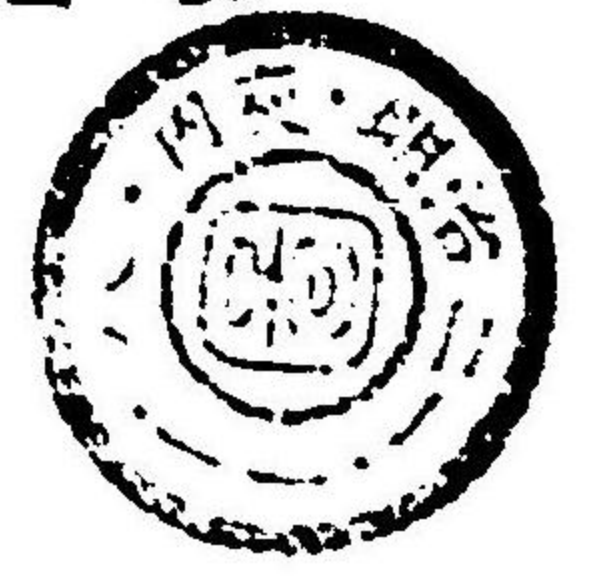
時辰 659 W213012



藩府為八重の朝略

第 壹 回

佐伯 半 鼻 校
旭 亭 芳 峯 書



今より早や十九年の昔明治元年の事なりけるが去年の十月徳川將軍職を朝廷に返上
あが 朝廷御親政の世となり同じ十二月尾張大納言越前宰相に詔して大坂城に來り
徳川内大臣を諭し京都に上り議定の職に列せしめんとせられしに會津桑名其外家臣諸
將等内大臣を説き勸め朝廷の御趣意に背き大兵を引卒して上京せんとせしより終に
是歳正月三日鳥羽伏見にて官軍と戦起り此時徳川の兵は三万と稱し官軍は僅かに六
千五百の小勢なれども薩長勇猛の兵にして日月の御旗を頭に戴き其勢目ざましく必
死となつて戦ふものから徳川勢も亦流石に敵多きことなれば追つ返しつ挑争ふにぞ
互に撃合ふ砲聲に百千の雷の一時に鳴はためく如く兎角する中伏見に火の手上り黒烟

滔々として天に漲り最も凄まじき有様となりければ近き邊りの百姓町人が驚は一方ならぬ老若男女我先に逃惑ひ各々所縁を求めて家財を運び身を避るなご其況難儀ふるに物なかりしが翌四日より五日に涉りては左しもに大軍と聞ぬし徳川勢も鋭き官軍の鋒先に當り難くて淀に橋本に引退ぞき死人怪我人夥しく全く敗色を現したれば今にも官軍攻下らんかさて大阪の町々も兼て薩州屋敷の焼けたる以來に冷せる胆を一段冷して人々俄かに騒立ち不斷の無沙汰を詫つゝも近在の農家を頼んで逃て行き然る手寄なき者共は常には臭しと厭へる小便取又迄取絶り我勝に逃支度に暇なきは亦無理もなき次第なり然れば國々より來て居る奉公人の親兄弟が争ふて迎に來るやら見舞ふやら沸返つたる大騒動の眞ツ最中六日と云ふ夜に中の島湊橋より飾磨通ひの船一艘戰争を避て逃る人商 止て歸る人種々の乗人の多ければ船頭水主の元氣好く八つ時頃には解き天保山の沖迄下げしに追手の風の十分なれば直ちに白帆捲上げて浜路迄に西を指して走行けば初の星明に遠く見ぬし淡路島も追々近くなり兎角する中和田の岬も後に見ぬ朝日はのぐとさし昇る頃明石の瀬戸を乗切つて播磨灘にさし掛んとする折しる

一天俄かに掻曇り暴風西より吹起つて船は笑をりて徹る如く雲さへ崩しう降來り苦吹取られ帆柱折れ水主共が立働ぐことも自由ならぬ浪を被ること度々にして今にも覆へらん有様なれば乗合の老若男女は胆魂も身に添はき大聲上て泣喊ひ念佛唱へ題目あげ金毘羅大権現と祈るもあれど斯なりては神も佛も力に叶はきや一際手強く吹く風にて山の碎ける如く浪に捲かれアハヤ乗人は悉く底の薄屑となり果んと見ぬたりける斯る折しも胴の間に十二三歳の男の子と十七八歳にて容貌美しき女とを引連れたる五十近い婦人あり未だ如何なるものぞ知れざれど定めて親子なるべく思はれて最前より互に手を取り抱合ひ必死を極めし様子なりしが哀れなるかな今しも捲かれし大浪にて乗人が思はせろつと立てたる聲のみを後に殘し船の कोरोと打覆へり暫時は船板杯に取付る男女も彼は見ぬたりしに是も何處へか吹流されて只白波の怒を増し吹來る風の狂ふのみ人船ともに影も形も無くなりぬ

● 第二回

土地は明石と云ひながら今朝より確はす雪天にて日暮も早き大藏谷の旅館屋間に一際

目立つ本陣を今宵の泊と定められしは是なん世間に松ヶ枝家と稱する播州某の城主なりと聞いて管番の人々は主君を守護して此に宿り非番の隣の淡路屋徳兵衛方に泊込み先一願に浴湯も濟めば頓て下婢共が勝手の方より持出して来る木具の膳菓子椀焼物猪口のもの相も變らぬ宿屋流の突込料理も飢ゑたる腹には百味の飲食敵に後へ見すると飯櫃に宛は脱ぬと云ふ下戸あれば膳の上にてツイ一盃と思へると今一つくが重なりて到底管迄巻出す上戸あり此に飯連欲連派を分ては彼處には又十人許り老人は敬して遠くするに如かきとて一室に脚を指合も氣兼ね入らぬ若い同士床取る下婢と利談かふて腹這ながらに烟草のみ蒲團の上に高胡坐思ひくの出たらめ話し長懸々しく見ゆるが折しも障子の外を誰やらが此頃流行る童謡「西の天より黄太蝶々が飛で来て葵の葉を食て」と謠さし俄かに其後吞込んで廊下を向ふへ駆行くを二人の男が耳に入れ枕仕ながら隣の男の顔を見て「オイ今の謠の如何だモ一斯ういふ時勢では叶はぬせ」爾うサ未だしも慶喜公が早う引上げられたから好うだがアレで大坂へ籠城でもする事になつて見ナ夫こそ大坂中は黒土になつたであらうと云ふを横巻ならで後の方に寝て居

る男がオ、夫りや兎も角もだが若し大阪で戦でもある時は一も二もなく賊軍と言はれる處であつたらうと先々其事のなかつたはお家のために此上もない愛たい仕合だと言はせる果老壹人が被れる蒲團跳あけ起直つて米陣に力入れ言葉さへ改めてコレく今のお話は何で御坐るお手前達は何ぞと云ふと賊軍とか賊徒とか云ふ事を恐れられるが二百年來徳川氏の恩徳をと固くなり議論厭しく拈出さんとする處へ次の室より袂細目に引明け且那さま按摩の御用はと恥しさうに言ながら顔出す女髪も亂れ衣服も遺塗れて見苦しけれと其而貌の須磨の浦曲の月より清く人丸山の櫻にも羞ぬばかりにて年は未だ二八に一つ二つを加へし位と見れば人々是はと思ひながら「イヤ按摩は入らぬから断つて呉れるが好いがお前は澤山此に用があるチヨツと此迄女イエ妾の按摩で御座り升が入らぬと仰しやればヘイ左様なら大きにお邪魔を申しました 大勢イヤコレく悪い聞き様をしたものだナニお前なら誰も彼も挑せたいテ實の肩がメリくして脚が棒だサアツ、ツツと這入つて呉れア、ユ余が一番に遣つて貰ふのだイヤ余が先に口を掛たを彼方此方へ引張り合へば女按摩は因果で逃出さんとする機に誰が押した

か押倒されて
 一個の男の膝
 元へ倒れ掛れ
 ば愈々驚き御
 免下さりませ
 ど面赤らめ起
 んとするを後
 ろより大勢が
 腰を抱くやら
 袖引くやら裾
 さへ取つて引
 まくらんとお
 しければ女は



キヤツと腰立
 て一生命



舞はる者等を跳退け突退け辛く此處を措脱けしを此方は何れも絶つて追掛くるにぞ女は

逃途失なひ廊下の側なる一室の中へ障子クハラリと引明て駈込拍子に思はき茶盆蹴
したれば是けと驚く息も引かせ此室に居合す二個の武士追ッ取り刀に反打たせ己無
禮者奴と白眼つけたり

● 第三回

其時女按摩は是はとばかりに呆驚き其處等に飛散る急須茶碗を片寄るさへ手元霞へ
て裾もあらはな容形 撥刷ふ際もなく顔赤らめて兩個の武士に打向ひ只管粗勿を詫居
るは野に咲く桃の雨に惱み垣に綻み牽牛花の日に傷みたる風情なり彼方の武士は此有
標に夫と次第は分りながら一個の武士は眼剣出し刀の柄に手を掛けて武士たるもの、
居間ども憚からざ無禮を働く此女奴と立掛るを今一個が袖を取り「ヤレ待たれよ權之
悉迄の高の知れたる賤しい女那の通説て居ればモ一お免しなさつたが宜しからう 權之
コリヤ藤岡氏には何せお留めなさるハ、ア夫でハ左一郎迄の貴君は兼て此女にか馴染
でも左一 コレ津島氏左様な事を眞面目に言はる、も大人氣ないマツくお鏡まりなさ
るが好い 權之 エ、男にせよ女にせよ斯無禮を働く者を其儘に差置ては世間の聞が 左一

イヤ取るに足らぬものに取合ふて彼是言へば却て夫が不外聞殊に貴君の是より主君の
御側の御當番要ない事に手間取つてハ差當つた落度で御座らうと云はれて見れば道運
にて返す辞もあらざればムツとはされと詮方なくオ、虫の如い藤岡氏箇様汚穢しい
女でも御意に叶はや随分値つてお遣りなされとへらぞ口疊蹴立て、出行て跡に女は涙
押し拭ひつ、一個の武士を伏拜み 是は且那様有難う存じ升己にお手討にもならうとす
る所を助かりましたも全く貴君のお情けで御座り升 佐一 ナニ夫程禮を云ふにも及ばぬ
事だ併し手前は此家の下婢とも見ぬぬが一体何仕に來たのかと問はれて女は若い身に
不似合な業するを卑下してか或ひは今しも行燈の火で此武士の姿を見るに年尙二十三
四にして屹としたる顔付に何處やら愛嬌を含み身の廻りも立派にして今惱まされたる
大勢の武士共とは雪と墨程な違ひあるに恥らひてか再びハット顔赤らめモツくとし
て何とも辞を出兼しが漸やく思切つて女へイ妾はアノ按摩で御座り升 左一 ア、左様か
ナと云ひつく熟く女的面眺め暫らく黙止つて居しがやがて又言直し 左一 然らういふ事
であれば仕方もないが全体按摩は人の寝牀などに近寄て肩を揉み脚腰磨るものなれば

若い女の手業にはチト似合はぬ様だ併し夫とも去り難い仔細でもある事かと言はれて
 女はハラ／＼と涙を溢し女御深切
 なそのお辞實は妾も嗜好で斯うい
 ふ事を致すでは御座りませんけれ
 ど何を申すも旅の空母が病氣を介
 抱の際間に稼で一貼の薬でも食さ
 せたら併續て手を明る譯に参ま
 せぬから一通りの水炊奉公もあら

さし
 やう
 こと
 なし
 の按



磨業
 是も
 ツイ
 今日
 此頃
 に初
 めま
 した



ので骨折る割よはと言さ
 して袖で涙を押拭へば左
 一郎も坐ろに哀を催し夫
 では卿が郷里は何處であ
 るかと問れて女は頭を擧げ「ハイ妾は言と申しまして山城伏見の産父さんの播磨屋清

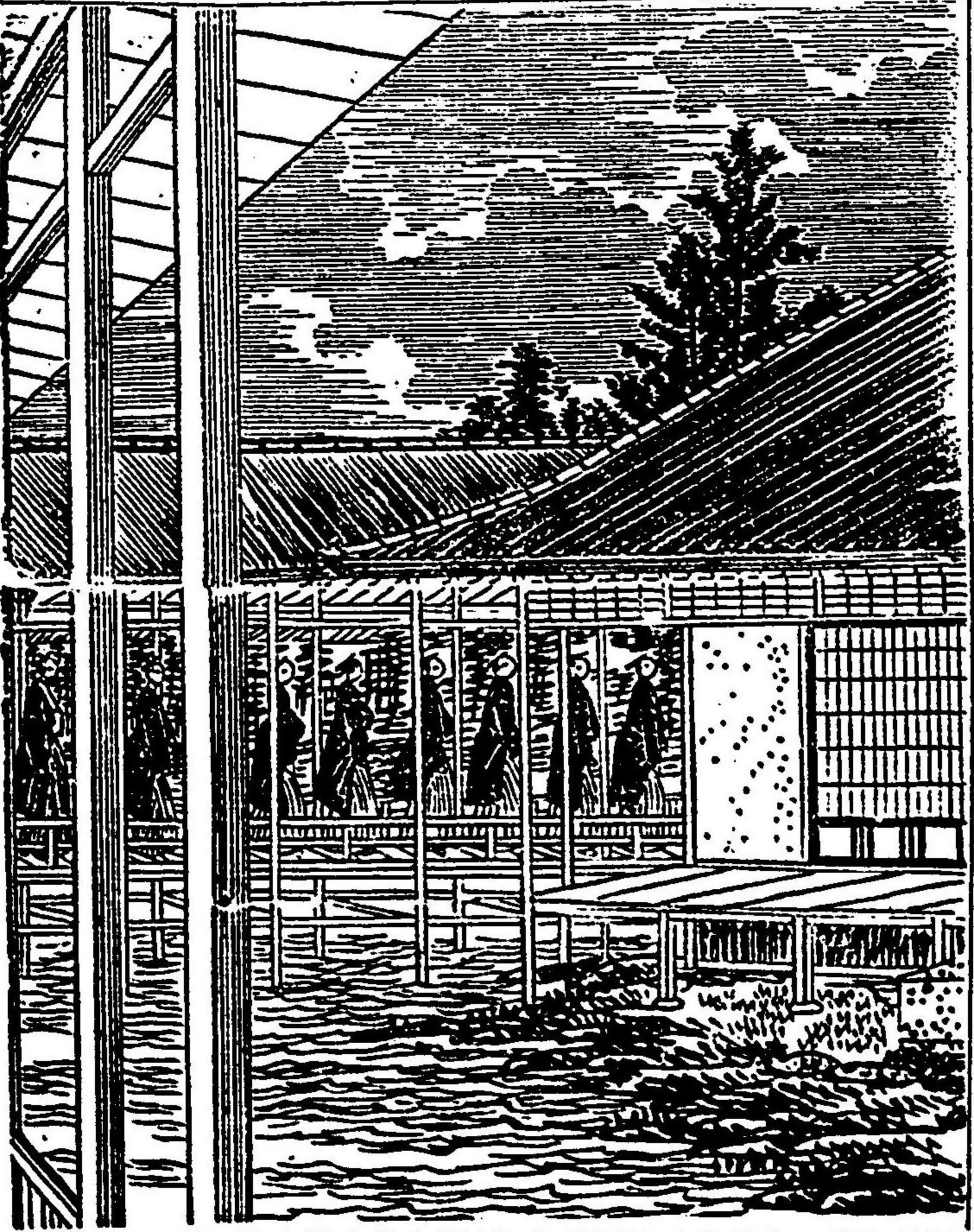
五郎とてお屋敷方の人足頭兼て子分の四五十人もあつて左程不自由もなく暮して居りましたが今度の軍で家宅は丸焼斯ういふ中にも父さんは平常御恩に預かつた屋敷へ出た切りおれば母さんと妻と又一個の弟どが手を引合て鉄砲の煙の下を潜抜けその上段々様子を探つて見ると父さんは如何やら流丸に中られて果敢ない最後をなされた由夫聞た時の哀しさは有るにもあられお母さんは夫が爲め瀕氣の病妾等も責めては又さんの死骸なりとも探し出さんと思ひました夕何を云ふても軍最中嫌うなう少しの知る邊を便りにして大阪へ下つて見れば此にも軍が初るとて目的の人は逃て仕舞ひ身の落付のない所から母さんの言はるゝには是は別に明して話せなんだが元我等夫婦の出處は播州にて先の夫が亂に出来た子もあれば全体一通りでは之を尋ねる道なければ今は外に身を寄せる先がないゆゑ其方へでも手寄らんとて母子三人が今日からは八日前。ア左様で御座りました此月六日の晩飾磨通の船に乗りました處不幸の上の不幸にも此沖合へ来て難船に逢ひ一旦妾等三人も涙に捲かれて死ましたを天命が未だ盡させんものやら不思議にも親子三人が一緒の救船に救上げられ危い難免れましたがお母

さんの其折より大煩の少許の路用さへ海で丸きり没くしましたので、乘所か雨露波が術もなき身の不仕合を氣の毒など此家の御主人が情を懸け裏の納屋を貸て下され色々お世話にも預つて何の暫らくの中は然らせせとも御深切のお辭も有り升が只御厄介になり升も道でないと思ぬぬ業の至らぬながら斯様な事を致し升ので御座り升と又も涙にひせ入れれば左一郎はいと々不憫と眼をしばた、さ懐探つて紙入より二分金二ツ取出し藁の代の足しよもせよと紙に拾つて興へたり抑も此両箇の武士は如何なる身柄ぞ夫の權之丞といふは松ヶ枝家の一家老津島權右衛門の倅よて又此左一郎は同一家老なる藤岡左内の弟なりと聞ぬける

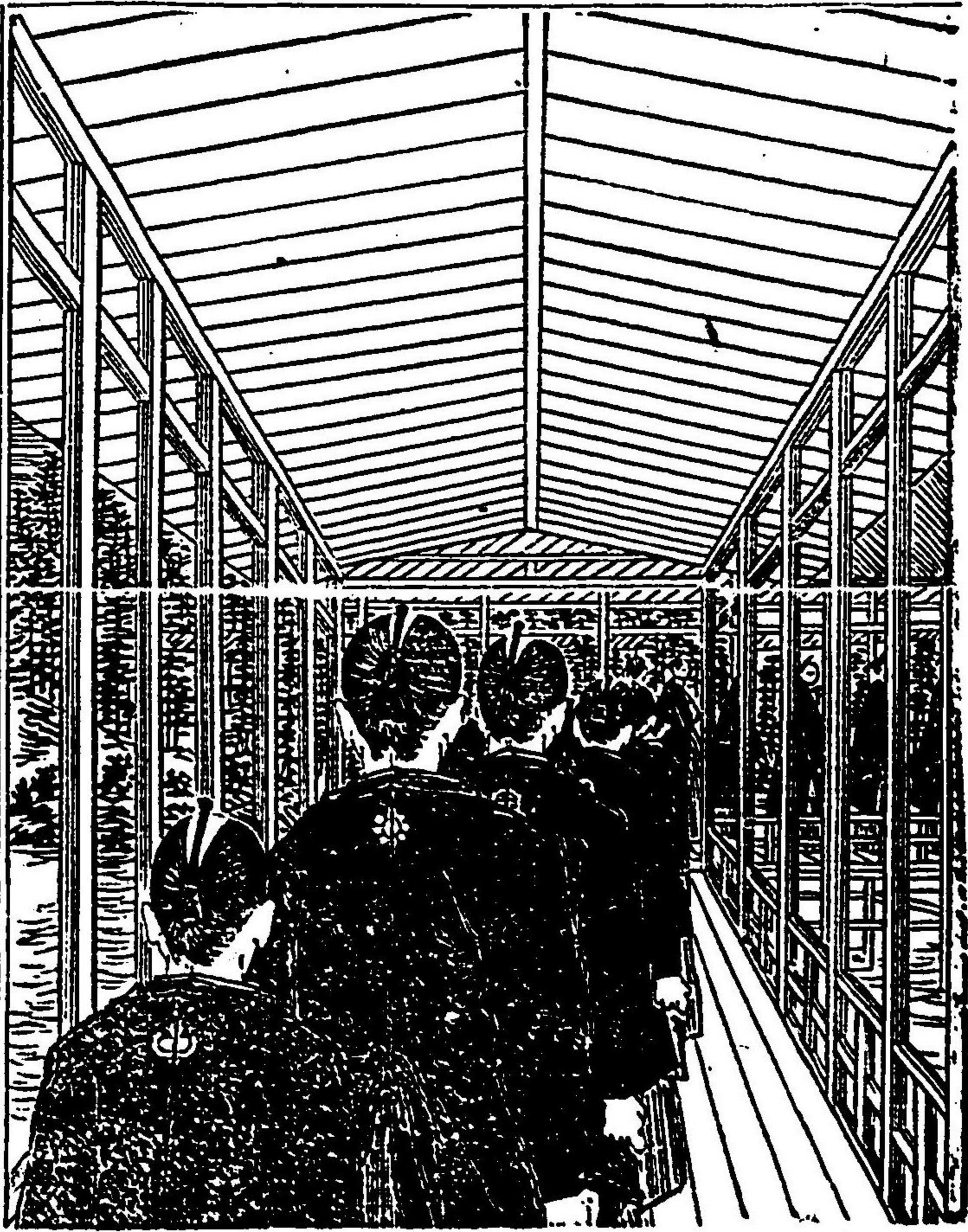
● 第四回

此に又播州松ヶ枝家の當主は正春殿と稱し若年(二十)ながら先王安興殿には徳川家に功勞も少なからせして世の常ならぬ因るおれば兼てより大阪に馳上りいかで徳川家のため年來の恩を報ひんどの心構なりしが今度京都への繰出しにも料らき後陣に廻つて戰に與からず兎角する中去ぬる七日の頃なりけん肝腎人々が頭に戴く慶喜公には

會津桑名の兩藩主并に板倉小笠原など、軍艦に打乗り江戶城を引渡すかたれ
 ば士卒の狼狽騒
 で落行く様は宛
 ながら蛛の子を
 散らす如くにし
 て常又の奇羅々
 をしたりし陣羽
 織も俄かに色を
 失ひ肩に荷へる
 鉄砲手に持つ鎗
 さへ何となく武
 威を輝かすの光
 なき心地のする



は落武者の習ど
 は云ひながら最
 淺猿く見ぬたり
 ける斯る有様な
 れば舊來の情合
 にて徳川家に加
 彌なさんと期し
 居たる諸大名も
 其目的を失ひ爲
 さん様を知らざ
 る場合となりた
 れば正春殿も一
 且兵庫へ引上げ此にて彼是の評議ありしに元來容易ならぬ大事すれば兎もわれ國元へ



引取らんて同じ十三日の遇々に兵庫を立ち其夜は明石なる大森谷を泊として夫より
 幾日もあらで松ヶ枝家の本城へ歸着あつて其翌日九時揃と云觸出にて藩中の士分を
 城内の廣間に呼集め大評定を開かれ藩主正春公も出座ありて親しく官軍に願はんか
 或は何處迄も徳川家を佐んか時勢と道理とに因り當家に取つて吉凶利害の見込を充分
 に申立て互に評議を盡すべしとありければ列居る諸士は一同にハツと答へその中にハ
 兼て胸に意思書へしものなきにあらねど流石輕からぬ事柄逆雲時は一座シンとして只
 誰となくエヘンくと輕さ咳拂を袖にて遮る音のみ聞ぬしが兎角する中諸士の上座を
 占めたる一家老津島權右衛門席を進め津島只今王君より仰せある一條に就ては勿論輕
 くしき考を以て容易に事を決すべき譯に候はねど去迎徒らに首を拾り腕を組むばかり
 では事定らま就てハ某が存ざる處を申さんに今でころ時の勢にて大阪を引揚られたれ
 と云つ、一段聲を斷まして徳川の流も未だく濁果たるにもあらざその中慶喜公關東
 に御歸着あらんには頼本家人の面々は申すに及ばせ譜代の大名追々々馳付て日ならせ
 大軍京都へ責上らんは必定なり去れば今日薩州長州などが編々として閃かす鎧の車も

却て徳川勢の袖に纏る時あらん然ば差當る策は官軍に願はせ當城に據守つて時の到
 るを待つの外は御座らぬと憚る所もなく言出せばその尾に就て用人山田六郎兵衛を初
 めとし老職の御論至極御今日之處は實に仰せられた通りに致すが宜しう御座る拙者
 も御同意某は異議はないと凡と一座の人々口を揃へて津島の説又加擔したるに此津島
 の次に扣へし是れ家老の藤岡左内年こそ未だ津島には及ばね其顔色の沈着てそはく
 しからの舉動にて思慮分別に長けたるを知るべく眼涼しくして見付の朗かなるは忠義
 の心深き徴を現はしたるが今しも津島の説に人々の同意する有様を見るより靜か津
 島の方に打向ひ藤岡只今貴殿の仰せられる所ハ成程一應御尤にて誰しも先其處等の考
 を附けることでは御座れど熱々此に思慮致せば津島イヤく藤岡どの貴殿の御論は又
 例の朝敵論で御座らう夫ならモ一別に承るに及ばぬからぬ扣なさつてチト餘人の慮
 思を聞らうでは御座らぬかと傍若無人にもその口鐘ほとんどなしたれど藤岡は別に腹も立
 てぞニッコと笑みつ、今度は廣く諸士に向ひ藤岡何れも如何思はる、か存せねども是
 迄段々承る處では畢竟今官軍に願ふは薩州長州へ降参でもする様に考られるが多い

様子なれど官軍へ願ふと云へば取る直さき朝廷へ願ひ奉る譯にして全体又譜代の諸家は暫く措きその他の諸大名にて幕府の家来と云ふにあらざれば徳川家の大軍を従へながら伏見淀の一戦に敗を取るより逸早く大阪を引退せかれしも必らき朝廷へ敵せんことを憚つての事なるべしと云ひ掛れるに一座類りに色めき立ち藤岡一人に眼を注ぎ膝向けて口々にその話の誤なり間違なりと詰咎め斯る中にも獨り用人の筆頭なる見玉三左衛門が藤岡の説を替けて官軍に願ふの道理にして當家の爲なる由を言張けたるもその聲は一座に通らせして津島に同意するもの共が議論のみ左しむに廣き席上に鳴渡れり恠て正春殿は最前より此両説に耳傾け未だ何れを是なりとの辭もなく思沈んで居られしに頓てツツと頭をあげ諸士の方を打見遣り何事をか言出さんとせらるゝ氣色なれば人々始めて口を閉ぢ静まり返つて扣へける

● 第五回

藤岡左内の悄悄として城より下り跡振向ひて眺れば天守臺矢倉の葉高く空に聳へ堀を見越の松ヶ枝は常磐の色を改めぬと時勢昔と變つたる折なれば一たび進むべき道誤ら

んには二百年來根を固めたる名城も如何なる様に行くやらと思へばいとや藤岡からを表面は去氣なき様子に取なせと顔色の常ならせ見ゆしよや頓て我屋敷に立歸るに妻の浪江は玄關に出迎へ例の居間へ打通る後につき脱捨の羽織袴などを摺みながら浪江今日は殿中に御評定があつた上如何やら御氣分も勝れぬ様子何かお心に濟ぬ事でもありましたか夫は雨うと今日はアノ出入の七助爺が遠い處をぬさく久振に尋て来て且那様は未だお歸りでは御座りませぬかとアナタ氣の毒らしい病を澤山に呉れられたので料理致して御座り升から一盃お過しなされてお氣休をなされませぬか左内アノ爺は一向氣の變らぬ男だ併し今は尙早いから後に仕やう 浪江左様で御座り升かど云ふ中に摺める衣裳を側に積重ねながら尙も良人の顔を眺めて 浪江如何も御様子がお常の通りにならないは氣掛りで御座り升大事なくば何卒その次第を仰しやつて下さりませ 内成程卿が其通り言ふも無理ではない言は、是も天の然らしむる所か知ぬが如何にも今日の評定は安からぬ次第にて兎角時勢に暗い議論が行はれて其が赤心籠めし忠義の辭も採用にならざりしは返すくゝもお家のために嘆はしい事であると思はせませ

息を吐き小首傾けて獨言「それに就ては如何にして此の處に好い工夫を運らざるべしお家の没落の見る様ながハテ如何したものだやらと手を組んで思案に沈める折しも次の間より弟左一郎が入来り前に座りて挨拶すれば左内は頭を捻げ「サ、卿は今朝から不快であつたがチト気分は好いか 左一 ハイ最前より大きに快うなりましたから御安心下されたら存じ升が只氣づかへしいの評議の一決今日殿中の御換振はど兄の氣色を伺ひながら物靜かに問掛けられたれば此方は打點頭は是より評議の次第逐一に告示し尙も自分の思ふ由を相談すれば左一郎は聞く事毎に悔しがり或ひは齒を喰ひしぱり或ひは腕を取しげれるが頼て膝押進めて聲を低め 左一 今お話の次第に就ては兼て御承知の通り某が主君のお供で京大阪に逗留中薩長其外土州肥前など有志の人々と交り置いたるも斯様の時のためであれば兎角此處の某京地に赴いて時機應變お家の無事を計ひ斯くして又兄上國に在つて諸士に時勢を説諭し叶はぬ迄も主君へ諫を奉られんには尙も家の運命を持堪ゆる難うは御座り升まいと聞て左内の忽ち撲と膝を打ち 藤岡オ、卿の云ふ處至極尤到底今日の策はその外にないと 喜面に現はれたれば左一郎も共に

喜び 左一 然らば是より直様發足 藤岡 夫でも卿の不快の中その身を厭ふも忠義の一つ 左一 イヤ只今も申した通り心地は全く常の通りに平癒致した事なれば片時も早う出立して藤岡 然らば大義であれど何か又心を配り脱目ない様コレ浜江左一が俄かの旅立早うその用意を仕たが好いと主君のために盡すなる武士性質の勇ましく専ら用意を爲す折しも表の方より若黨が走來て只今兒玉三左衛門様が見ゆられましたと取次ぐにぞ左内はオ、是の恰ど好い處であつた直ぐに此方へお通し申せと言進れば浜江は早くも下女を呼び火鉢座蒲團などを取出させ我身は立つて茶の拵を爲し居たり

● 第六回

兒玉三左衛門一室に通る主人に向ふて今日の評議に互の見込立ざりしを打嘆き如何もアレではお家の行末が案じられたるので御座るが之に就ては何かお考もある事にやど眉を皺めて問掛ければ左内は席を進め實はその事に就きての斯様々々の見込にて只今弟左一郎を京都へ旅立せる等に致した處を仔細残らぬ設示せば三左衛門は膝を打て感心し 三左 流石は貴君なり又左一郎どの能く其處にお氣が着かれました併し左一郎どの、

獨出立の誓くみ見合せを願ひたい 左内トハ又何故 三左イヤ外でも御座らぬぞとお約束
を申してある某が娘彌生と左一郎とのこの婚姻をツイテヨツモ 左内 是は又早急な何も
只今と限りと申さぬし 又此時節申さぬもいふよその話と申すは少くも改しとハ



と云ふ辭を見玉は坐ろに聞流じ忙しく玄關に走出で、待して置ける家來を呼び何か密
かに言付て頼て元の座に立歸り 三左 今某が斯様に申せば定めて日頃にも似ぬ粗忽もの
どのお考もあらんなれど是には段々仔細のある事にて不肖ながら此三左痛門強ち娘
の痴情などを憐んで婚姻を望むのではなく實は至らぬ娘ながら彼も御存じの通り最
早年頃の兼てお約束の致しながら未だ表立ちてその由を人に知らせてなければ先頃よ

り追々懇談の言込も聞きながら無論に謝絶を申して先何れも事なく済みましたれど此
 に一つ迷惑なは彼の津島權右衛門とのより子息權之丞の嫁に吳よと達ての所望一應二
 應ではなか／＼聞入られる氣色なければ終に左一郎とのとみ約束のあることを打明け
 て程好う謝絶を申したに未だ婚禮をせぬ中は如何とも其處はなる事もある是非我方へと
 の我慢の言條只幸ひに此由は某直ちに津島氏より承まはつた譯でもなければ段々話の
 入組ぬ先に早く婚禮済して當家へお引取り下さる、様致すが好らうと兼て存せる折柄
 今左一郎とのが御上京なされて何を申すもアノ津島氏の事であれば時節柄にも願着
 なく此上如何なる事を申さる、やも測り難ければ強て今日の御出立をお留め申すには
 候けぬと今一時か二時ばかり御猶豫あつて責て婚禮の盃だけでもお濟し下さりませと
 娘の心汲取つて左しにも固き武士の鉄石心も子に引かされ情愛籠れる言葉には橋つく
 術もあらざれば藤岡は左迄拒まを納得して尙其由を母に告げ弟又説聞を坏する中に早
 入来る兒玉三左衛門の妻眞砂娘彌生の手を引きつ、俄かの事に支度万端取揃はねと程
 好き一室をかり初ながら白無垢の打掛と帽子眉深に打冠らせ徐々座敷へ打通るを待女

郎も銚子の役も浪江と下女とが交互はけり他人交らぬ婚禮の盃頃てその席燈へは時刻
 移つて初夜も過ぎ餘り深ては城下の關所が而倒なりとて左一郎の脚絆小袴の旅裝束手
 荷物傍に引付けながら最そこ／＼に三々九献の式を濟し三左衛門の扇拍子を取つ、も
 時節柄とて世間を憚り口の中にて詠ひ収さめる四海波、立騒ぐ世の味氣なま名のみな
 りける花婿花嫁、後の築はいざ白雲の山の尾隔て、寐る鳥の跡霞ませて都路へ。旅立
 つ良人を見送るさへ未だ初々しくて細き情を述べも敢へず只御機嫌好うとの一言に千
 万無量の思を籠めし彌生が胸を推測れば母に兄舅の兩夫婦も坐ろに涙の眼に涙をシツ
 と堪へて左一郎の跡につき何れも門前に送らで、後姿の見ぬ迄イみしが折柄雲間を
 漏る、月影は弓張ならぬと左一郎は張ある心に愛情を思ひ捨て只國のため主君のため
 と脚元軽く京都を指して旅立ちぬ

● 第七回

此に攝州一の谷は播磨境に近く後は鉄拐の峯つゞき前は漫々たる海に臨み壽永の春の
 夕風に散りし榮花の夢の跡平家一門が哀を留めし世にも名高き土地にして須磨と明石

を東西に控へ西國街道の咽喉なれば晝は旅人の往來繁く夫の敦盛塚と言習せる石塔の
 邊りには一軒の草舎を結び盛は敦盛味は義經入物は鐵拐にと喧しく言立て、客を喚込
 む熱麥屋もあれど夜は只松風と岸付浪の音のみ高く殊に此節の世の騒に紛れ盜賊屋々
 徘徊して最物騒なれば驚來屋も夕暮より堅く戸を鎖して外には少しも出る事なかりし
 どぞ憚る折にも去り難き用事ありてか四十餘と見もる一個の女十八日の月さし出る頃
 に須磨の方よりとぼくど此一の谷へ歩み来て今しも敦盛塚の前に近づけるが持病で
 も起りしや俄かにハタと路端へ打倒れ頻りに悶へ居る處へ西の方より脚を早めて來掛
 る旅人夜目で確とは知れざれど三十餘の逞しき武士なりしが一向此方の様子に氣がつ
 かきその儘サクく行過んとすれば女は松が根に取纏りつ、頭をあげて苦しい感して
 モーシくと喚掛けしに武士は不意に驚きながら立留り後振向けば女は又も聲をあげ
 「モシお武家さま誠に恐入り升が持病の瘵氣に悩むもの何卒お持合せの藥が御座り升
 れば戴して下さりませと云ふも息はしき様子にて忽ち仰向に反返り胸を接へて苦し
 めば此方の武士も見るに忍びを違て、傍に立寄り女の身体を引起し確かりせよ氣を確

かにと其處に坐らせ尙ものらんとする首筋を片脚あげて押へながら手をさしのべ木の
 間漏る月影にて山より滴る清水を掬ひ女の口に注入れ脊を撫下し胸を押へて遣らんと
 仕て思はせざるはる金財布武士は是はと驚き而案時考へ居たりしが如何に胆を定めしか
 獨り點頭き手先に當る件の財布引出し奪取らんとなしたれば今迄夢中になつて惱みた
 る女も忽ち正氣となり夫取られてはと首に掛たる麻紐を確ツかに掴つて手放さず是は
 つかりはお免し下さりませ何卒戻して返してと引かる、ま、に打轉び片手露して伏拜
 めど此方の少しも顧着せせエ、面倒など腰の一刀引抜てハッシと紐を斷切れば機に女
 は仰向に堂々後へ倒れながらムツクと其處に起上れと筒治まらぬ身の病立んとして又
 轉び聲を限りに盗人よ人殺よと助を呼べば武士は取つたる金高財布の外より探見てコ
 リヤ少なくも三十兩。ア有難いとチヨイと戴いて手早く懐に押入れつ、生して置けば
 後日の妨げイテ引導を渡して呉んと刀振上げ女が執念深くも脚引倒さんと取付をハッ
 タと蹴飛し肩先ハツサリ切下るに女はアツと聲立て、倒れはしたれど尙死切らざ疵口
 押へて切ない息を吐きつ、も女今其金を取られては妾が身体は兎も角も寄邊も何もな



い年行かぬ子が忽ち渴命に及次升何卒を返し下さりませ 武士 エ、何時迄も死太い女だ
 モー斯うなつちや一千万遍喋いた處が
 役もや立ないわい 女 夫でも此金には取々

義理が籠つてあつて
 並や大體で出来たの
 では御座りませぬ事

長くとも仔細をお聞下されて是非に金を
 元々にお返し下さりませ 武士 ウン此寒天
 に長談ハ随分迷惑だが一吹する間に何な
 ど吐せ併しその重手にて話の出来るはな
 かく感心だと戯れながら其處なる程好
 き石に腰掛けて火打取出しカチ／＼と打
 てば飛散る火の光は此處のみならで行手の方にも二つ三つ暴風
 提灯の影閃いて人來る様子に見えれば武士は大に打驚き脚を早めて走去んとする處



を思ひ掛なる塚の後より現出する一個の武士何にも言はせツカ／＼と進寄り刀の小尻シツカと取留むれば此方の武士ハタチ／＼と一脚二脚引戻されながらウンと力を入れて振拂ひつゝ、逸歩出して逃げあがら小柄を取つて打掛る早速の手裏剣彼方の武士は隙をき刀の柄にて受留め折柄雲切れ光を發つ月影に透して持人の印もやと眺める處へ動搖々々來掛る漁師共夫と見るより口々に己盗人奴每晚此處等に彷徨て人々搦す報を見せざるぞ敵きのめさん生捕よと喚きながら楯棒竹棹手王の柄中には櫓など振廻し勢劇しく打掛るにぞ武士は後へ飛退て此場の様子を説聞すれば彼方は少しも耳に入れ大勢頼みに滅多撃ち逆め口にて言解くべく見ぬざれば武士は怒つて腰刀拔そばめ取巻く奴原が真中へ割つて入り手當り任せに刀の棟にて打据ゑ／＼薙立れば初の搦勢何處やらへ逃腰早き漁師共鯨又出會へる鱒の如く四方へサツと開きたれば夫の武士は突と斬りけて東を指して落行けり

● 第八回

大藏谷なる宿屋の主人徳兵衛忙しく母屋を立出で裏手の納屋に走來て「コレ／＼清吉

や早う起た／＼オ、火を消して寝て居るかヤレ／＼年も行ぬに人の厄介になる身連何にも敷にも氣兼ねをするとの嫌らしい事であるわいウン何んぢや母さんの歸りを待つて寝だに居るとか。ア、コレ／＼吃驚するな達て、いならぬぞサア濱方の衆道地へ連れて來て遣つて下されと子供ながら清吉はハツと痛める胸先の戸板に乗せし女の死骸漁師共が手舁にして静かに卸すその顔を一個が差出す提灯の火で一目見らより清吉はヒシと死骸に取籠りヤア「コリヤ私の母さまエ、身体中が血だらけぢや。誰が斬つたのか殺したのか。コレ母さまイナア只ツた一言でも物を言ふて下されませ。仇何處の何者ぢやコレナア母さまと聲を限に呼ぶ叫べと絆断て死相現はれし亡骸の魂招く術なければ清吉は瀧なす涙に奪もなく直と平伏し泣入れば傍に在合ふもの迄も坐るに能はず涙の滴頓て徳兵衛ハ涙す、つて「オ、尤ぢや。道理ぢやぬい思へば今日ハ卿のために如何なる悪日ぞや朝には交好い姉と生別れ夜には杖と柱とも頼める母に死別是が泣きに居られうぞモシ濱方の衆聞て遣つて下され此親子はナア元々伏見の播磨屋清五郎と云ふ人の女房子にて今一人の姉妹と一楮に先頃の暴風の時難船仕たをい前さん等



の仲間の人に救援られ
 ヤツと命は助つたれど
 持合せの路用は海へ落
 し親は病氣が出て立居
 る出来を其日よりして
 身の置處もない難儀の
 見ては流石に棄置さ難
 く差當つて此處の納屋
 を貸し先食ふ丈の世話
 を仕て居るが感心ナは姉娘のお富を云ふ子。年の若いに身も持はせ技屋まで勤めて煩



らふ母に薬を飲せ晝夜怠らぬ介抱にて此頃病氣は少し癒りたれど兼てより尋ねて行ふ
 とする先とて確かり便りにならぬとかで所詮此儘にて行末憂東ないと云ふ所より
 姉娘は身を賣つて母親と年行ぬ此弟が身の落着を定めさせんと我手に望んで止まぬ所
 から母親も定めて好んだ譯でなからうけれど終にウンと納得して一兩日前より彼是口
 を聞合して實は今朝方兵庫の柳原へ娘引連出て行たに其時余へ挨拶して清吉を頼して
 置升れば宜しう頼申升といふた一言が全く此世の別でもつたかど云ひつゝ、聲を震ら
 せば鬼の眼にも涙とやら最荒くれな漁師共る潮に乾びた手の平にて掴み取て 甲オ、夫
 は氣の毒な乃公は斯ういふ話を聞くと堪らん様になつて来るわい乙コレ清坊とやらモ
 、エー泣なエ。賢い子じや 丙オ、爾うぢや早う涙を拭てお念佛でも云ふが好いわいと
 銘々立か、つてすかし和ひれば清吉の位じやくりながら頭をあげ 清吉 モシ叔父さん私
 の母さんを誰が斯んな目に逢したのぢや何卒言ふて聞して下さりませ乙フン夫は斯う
 ぢや余等が今日夕方から一の谷沖で網を引わうと思ふて昨日の暴風を預けて置た船の
 處へ行かうと思ふて教養家の手前迄行た所處かに聞ゆる女の泣聲ア、コリヤ此頃船の

ある追懸に掛られたのであらうから映けて還らんと駈行けば案の條倒したる女の體
 にツ、立て居る一個の武士彌々此奴と取巻て敵討して手柄をせんと手ん手に得物を取
 つて立掛つたに思ひの外に手剛い奴刀を抜て 右左電のひかる様に打振る上近寄る
 るのを蹴飛ばし取つて抛げる殿しい動に。ナア八藏ツイ二歩三歩 逃げたど云のせはな
 かつたけれど 後へ退去つたその暇に彼奴は得たりと松林に逃込んでその時生憎月に
 む雲掛り行方知れなきなつたれど年の頃は難ふ廿三四の若武士で又當座遣の出鱈目首に
 違ひなからうけれど某は通掛りの播州武士ア、何とか吐したせオ、内外喜一と云ひ決
 して胡亂な者でないど 丁イヤ乃公は濶外と聞たせ 甲其處で又余等ハ切られた女を助起
 して何處のものかと聞て見るに大藏谷の播磨屋清五郎さん方に危話にまつて居るもの
 と云ふた限りに辻跡は好ら聞取れなんだが夫では兎も角送つて行かうと蕎麥屋の軒に
 立掛た此破戸に身乗せて余等三個丈が後戻り此へ送つて来た事なれど途中で終に息引
 取つたとは如何にも要取なる事ぢやわい乙何にしても相手は東の方へ逃げたから何れ
 兵庫邊りか夫とも事に因ると高懸して京大阪へ行くか知るれぬが今から劍術でも神古

して仇を取るが宜からうと清吉の背を撫で、願まし値るその處へ土地役人の作右衛門
歩卒に提灯持せて出來り検屍などの手續万端執計ひ事一先片付けば夜ははのくぐと明
にける

● 第九回

雲の上やふるさ都になりけりすむらん月の影は變らでと西行法師が詠る歌も今は逢
かな昔となり和田の岬長く延て港を包み出入の船々晝夜引も切らせ實に福原の名に負
かぬ土地の繁昌京大坂にも劣らざる兵庫津の柳原と云ふは三味線太鼓の音高き遊所に
て軒と並べし青樓々々に點掛けたる行燈の何時も月夜の別世界然ながら四角な卵はあ
らぬとも日々集ふ商人やら船人が鬱暗し歌ひつ舞ひつ樂遊公間かさ仲居の返辭の生長
き廊下吐嗟苦嗟走る音小婢が喋る甲ン張髪は高けれど髪々ア藝子の拳の慶耳を買ぬく
如くにて往來の人も右左心取られて脚下もそゞろなるかと思えたる中を西の惣門より
十一二歳の男の子が旅装束にて入來り兩側の掛行燈を一々眺め歩行るに丹波屋と記せ
る家の表にて立止り頓てオツくしながら關の内へ入り「此處に姉さんが居り升なら

逢せて下されませコソ申しと二言三言聲かけても勝吉の方の取込に紛れてか一人は
をするものなれば一足歩み二足進み思はせ壘所迄這入つて行くを今迄氣づかぬ下男
の源七忽ち夫と見答めて聲あらしげ源七ヤイヤイ孩兒奴薄汚穢い形をしてワリナ一休
何處から來たア物貰ぢやナ物貰なら何せ門口より聲掛けぬかエ、早う出くさらぬか
ハ、ア己は下駄でも擧へる積で來せたのぢやナと追立てる傍から此處の仲居のお熊
々が縦目の酒の溜めると構はせ徳利を暫く銅壺の肩に立佛。後生一切頓着ない心の鬼
の櫻欄等手に追ッ取つて是はと呆れながら尙も姉さん逢はして下されと願ひ子供を
ハツタと白眼み瞞付く様にか飛し未だ堅意地に出をらぬかと己に打んとする折柄此家
の主人喜右衛門がヤソ待つた様子ありげな此子供形容は汚穢がマンザラ乞食でもな
さ、うなから次第を篤と聞てやらう彼地へ來いと煙草盆引ッ提て店の次室へ廻して上
り口に進出で喜右 コソお前は今も姉に逢たいと云ふたが一体何といふ名であるのかと
物和かに尋ねられて此方の妻々とする中に喜ひの色を含み小さい手どとに掴につかへて
子供 ハイ私は大森谷の淡路屋さんの方でお世話になつて居り升揚屋清五郎の清吉



舟入
 せと皆逃言はさる主人
 は歸頭き 喜右フンく
 夫なら此間お時さんが
 逃れて來られたお富と
 云ふ子の弟ちやナ子供
 ハイ。然う仰しやれば
 聞て居た丹波屋さんに
 違ひない彌々此に姉さ
 んが居られますや何本
 一寸逃はして下されま
 せ誠に哀しい事は出来
 ましてと言ひつゝ、
 泣出せば主人は眉

○やナ 喜右、
 んが斬られて死
 んで姉さんの身
 代金も取られて
 仕舞ひました 喜
 右 エー 喜右 夫で



淡路屋の叔父さんは何時迄も世話を仕て遣る様に言ふて下され升けれど是非姉さんに
 逢ふて今度の事を耳に入れ行末の話が仕たら御座り升ので一旦身を賣つたものに逢ふ
 のは難いやうに聞きましたれと悲々尋ねて來ました何本姉さんと呼んで下されませ何本

々々頭を下て頼まれる程主人は氣の毒さうな顔付して居たるが稍や暫らくしてボン
 煙管をいたさ喜右 サア其姉が家に居さへすりや直に逢して上げられぬ今此に居
 ぬから清吉 何處ぞへ行て居られるなら歸り迄待つて居ます 喜右 イヤ其様にツイ歸つて
 來ることなら好いが實はお前の姉の氣遣と云ひ又少しは驚めあれば平常の娼妓にする
 も惜いと思ふ處へ京都より來合せて居る判人が望むを幸ひ一度の勤めさ、さに直ぐ京
 都へ遣つて祇園町の竹屋と云ふ家に藝妓を仕て居るぞやサ、折角來たのに本意なから
 うが仕方のないことぢやア、尙肩繕上げも取れぬ身であるに可愛さうな定めて置も破
 てあらう夫なら臺所へ行て食べるが好いと言はれて清吉は涙を拭きながらハイ有難う
 御座り升が夕飯は淡路屋さんで仕て下されましたお辨當を長田のお宮の前で食べまし
 た宿屋へ泊るお錢も貰ふて來ました左様なら叔父さんと辭儀をして消々表へ出掛るを
 見るより主人は今迄組し手を解てア、コンチヨツと待つたが好いと如何なる積りか喚
 留めたり

● 第十回

却説松ヶ枝家一藩中の存櫛は夫の評定の折にもその色現れし如く只二百年来の恩澤
 と云ふ事に拘はりその眼には徳川幕府のみあつて 朝廷御親政杯とは思ふ寄らぬ事の
 際考へ早く官軍へ従順ひもせせ去逆兵隊を押し出して官軍に打掛るとか關東へ走下つ
 て存亡を徳川氏と共にするといふ程の事ななき徒らに混雜の中に日を送れるが兎も
 する中正月の下旬となり官軍俄かに傾分境へ押寄せたりとの報知ありたれば城下の
 騒動は言ふばかりなく藩士の面々も今更の事に思惑ひながら熟々々始末を取亂せば官
 軍とて聞きし程の多勢にもめらで畢竟降伏を諭される使者の護衛兵を引連れ發向あり
 しにてその人は長藩の中井庄太助と呼をれ温順に旨を傳へられしかば流石今迄徳川家
 や々々と口に仕たるものも扱はと今日の時勢を變り順逆の次第を合点し赤から兼て大
 阪に在つて川口を警衛する中幕府のために長州の落人を捕へ又是迄官軍に馳加らせし
 て二心を懐ける廉は赦され難い筋なれば今神妙に官軍に従はんと思はゞ事に當れる家
 老の首を切りその罪を詫よ夫とも此旨を兎や角言はんには兵隊差向けて誅伐に及ぶべ
 しとの談判なれば是に就て二日の猶豫を乞ひ又更に昨日より一藩中の評議を聞きしに

前日は徳川氏を助けると云ひ官軍に順ふと言ふも眼の前には迫れる事ならずしが今は城下へ使者を引受け殊に江戸の様子も薄々聞くに到底徳川氏の流る此に絶たぬべき時至れりとぞしく一つとして東むべき方なければ棄て藤岡左内見玉三左衛門の両個の説を打消したるに似も遣らざ大勢が藤岡に向て口々に「モシ藤岡殿貴君の兼て官軍方イヤ官軍へ順ふが當然なりとの御論もあつた位なれば此の處に何か程か好いお考は御座らぬか」無事に治りの附く様は「ナニ其處は藤岡殿の事なれば」必らき好い御勘辨があるに違ひないと切ない時の神頼み俄かに縫つて相談の絲口引出さんとしたるを左内は疾に是と思案を極めし處あれば更に慌ても驚きもせず落着いたる顔色にて莞爾と笑ひながら上座に坐れる津島權太夫を乾度房目に掛け左内は「然れば其事で御座るが誰やら前日の評議にて徳川家を佐ける議論を立て諸君大方之御同僚なりしに定めて胸にお覺のある事なるべく亦常藩の今日官軍の使者を引受けたる次第になれるは君達の御論が不幸千万にも某等の説に勝れたためである」と云ふ事も御合点なるべし尤も一時は順逆を誤るにせよ此方より申出で、處置を請求するならば格別己に彼方より使者を

差向けられるに及んでの最早致し方の無い事にて實にお家の大事に係る場合であれば此一件に就ては餘計な詮議は指置て罪引受人物を定めるが肝要で御座らうぞと又もチテリと權太夫の方を眺むれば平常は驚の様に肩怒らし虎の威を振る權太夫も此日はグツとの聲も出し得を汗たらしくと額に流しながら尙立派に我罪なりとは言兼て年來人に下させし頭を今一時に我より下げて返すかと思はる、ばかりにさし俯向き時刻の遷るのみにて決着つかねは見玉三左衛門は堪へ兼ね列より出で、三左「サア津島氏如何で御座る全く今日の事あるは君の御論より起つた次第御覺悟の程承りたいと膝詰りけし折柄に應對役が走來て官軍の使者中井殿より附人を差越され約束の刻限なれば否を早々返答あれとの事で御座り升と取次げばハツと驚く權右衛門ウンと點頭く藤岡左内何を云ふにも日延の時刻の切る、迄兎や角評議纏まらぬとあつては當家の恥辱此上なく只夫のみならず斯る次第の明白に知れる時は謝罪の道も絶果んか斯なる上は少しも疑議はなし難し甚だ反對な事なれど某一人罪を引受け申すべし急ぎ此由官軍へ御返答あれかしと辭涼しく言放てば今迄押し黙止りたる權右衛門が頭を上げて一座を見廻

し罪人は念々藤岡左内に極つたりと聲高々と呼はつたれば左内は立掛りながらハツタと權右衛門を白眼つけイサ是より主君へ最期のお暇を申上げんと静々歩む長廊下奥殿さして赴さぬ

第十一回

罪なつぬ罪を身に受て屋敷に籠り門を鎖り専ら切腹の沙汰を待つ心を夫と知らざれば藤岡の母岸野は一室の中にて静に香を焚き觀念の眼を塞げる左内の前より入來り襟合せしつ、岸野今年の寒さ何時迄も長引ではないかエ夫は爾うと昨夕卿が下城してより俄の閉門は一体如何した事から。コレ黙止つて居ては分らぬが。ア、コリヤ余の前にて立派に言へぬ筋と見ぬるナ最前からも浪江が兎や角と心配して仔細を聞うと仕ても何事も言やらぬゆるキツウ心配を仕て居るぞやと老の一徹先立つものは涙にてわな、く膝を進めながら一事新らしう言ふでいな我が藤岡の家は天正の昔より御書家に仕へ奉り先祖代々忠義の心衰へど露聊の落度もなく二百年來連綿として最潔白なる家柄であるに卿が代となつて斯る不都合を仕出すとは不忠不孝の白痴者ナア此上にも言

譯あるか。次郎を明して恥しからぬ事なるか。假令閉門であれ縦又切腹である連も左内エ岸野君を諫て罪蒙り悪人原に讒言せられ夫で斯うなる譯ならば少も先祖へ對して取る處はなけれども自から口へも出し難き後暗い罪を犯し左内全く左様な岸野イ、エ夫なら何せ有体に罪の次第を言やらぬかエ、不孝者奴がど立掛り左内が襟首掴み手に持つ珠數を振上げて打んとする手を次の間より妻の浪江が飛で入りヒシと捕へて浪江マアく待て下さりませ日頃忠義一國の旦那さまには何ぞ仔細がありさうな聞けば此間より官軍のお使者も見ぬた様子何ぞ夫に就ての事では御座りませぬかと取支る後に續いて花嫁の彌生も此に出來り共々姑に取籠り詫びるも怒るも眼に涙思義籠れる此場の有様に何れ包果つべき譯ならねば左内はやをら面をあげ事云々と物語んとする處へ實に親は泣寄りの比喩と洩れぬ三左衛門隔てぬ中とて次の室からズツと入來る影見るより何れも是ほど座を正して挨拶すれば三左衛門も會釋して頼て左内に打向ひ三左天晴に候ふ藤岡殿兼て反對の議論をば却て自分が唱へしと罪引受けて命抛出しお家の危急い難を救はる、ハ古今に稀れなる忠臣義士と聞くより母の岸野に妻浪江弟妹の

彌生も共にアツとばかりに驚きながら岸野は涙掻き拭ひ膝押し進めて左内が顔をジツと見
 るに三左衛門は語を次で「夫に引變アノ津島權右衛門我身の罪を人に譲つて法々生存
 命へるさへあるに置を鳥と云征て己が生殘るも忠義の一つと言はぬばかりに君達を取
 刷ふた模様で御座る
 が狗著生とも壁へ方
 なき腰拔武士實は某
 む餘りの事に堪兼ね
 己に昨日殿中にて彼
 奴と指違へて死んど
 存じたなれど左様致
 して内情の言軍に漏

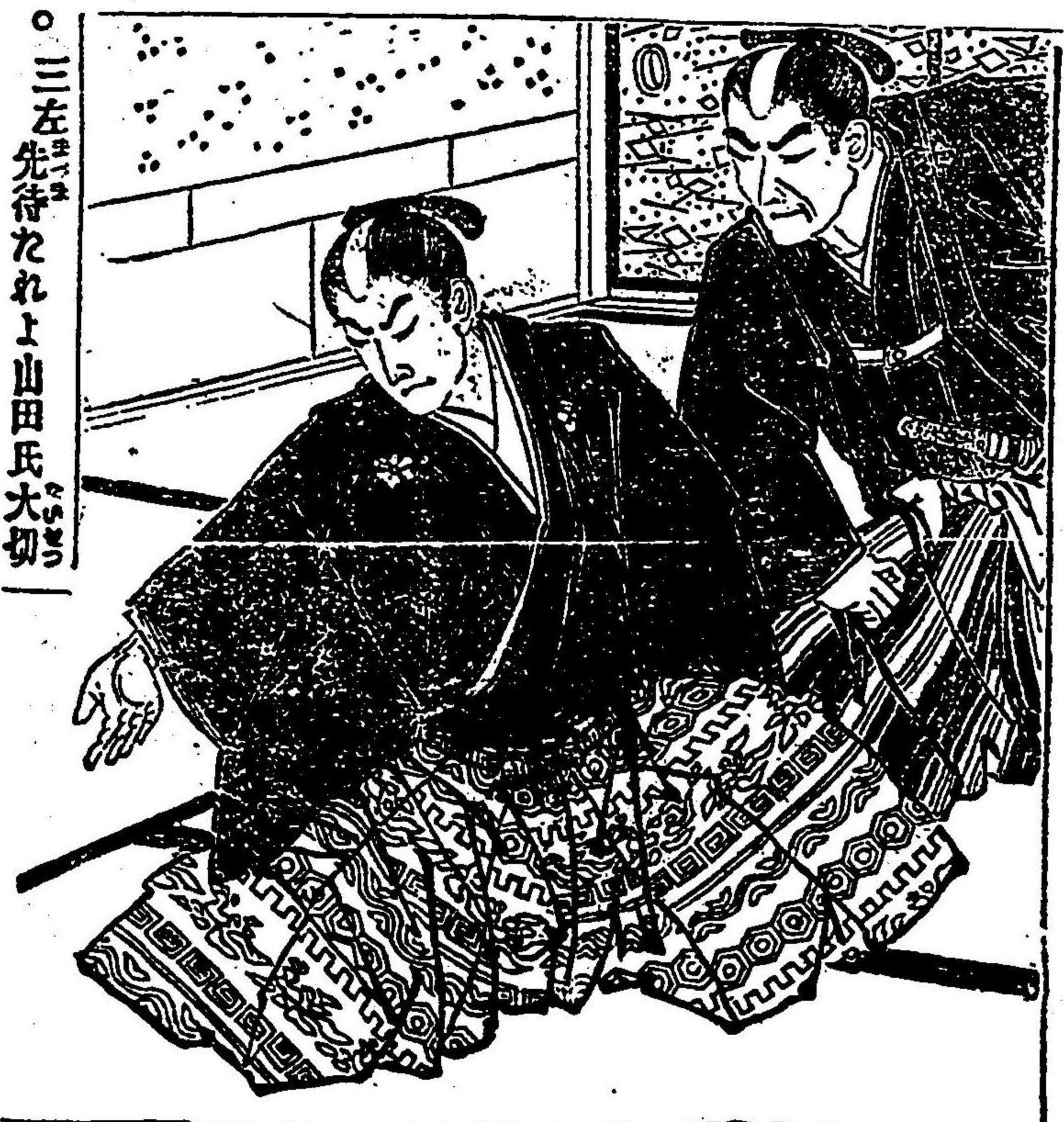


れんには貴君が折角の御苦心も水の泡と胸を撫で、辛抱した次第で又成るべき事なら
 生過た此三左衛門悴も己に一人前の者となつて居れば忠義のために死ぬこと幸ひ貴君
 は當家第一の忠臣にて若今貴君を失へば松ヶ枝家は暗闇同然ゆる某代つて罪引き受け
 ん念願なれど是將身分の違といひ又今となつては叶はぬ事去るからには及ばざるがら
 某貴君に成代りお家の行末何處迄も安穩に守護致し主君に恙のない様に力を盡さん存
 念なれば此は御安心なさるが好い夫に就ては御家族の慮も某悪しうは計ひ申さねば是
 る亦御安心あつて潔よう最期のお覚悟なさるべしと誠籠れる辞を聞き左内が莞爾と打
 笑んでその深切を喜ぶ傍に母の岸野は始て様子を夫と知り哀しき觸れしと取交せて眼
 を瞬た、く後には浪江彌生が堪ぬ愁に身を平臥し涙に疊を濡らす折しる忠義一圓の若
 黨幾歳表より走來り只今御上使として山田六郎兵衛様がお立向で御座り升と取次いだ
 り

● 十二回

役目を笠に山田守る素山子ならねど心の根に持つ竹の弓張膝をして六郎兵衛辭つたさ

へ荒々しく大郎 コレサ藤岡氏何も左理儀是歎かる、にや及ぶまい全休た手前から監で
 出られたので、御座らぬか夫に何ぞや津島氏なり某等が執計でも願ひ様に。ハ、ア
 コリヤ今更命が惜しうなつたのだナ。エ切腹であらうが打首であらうが詰る所お家の
 治りさへつ好は好ではないか若此方がお手前ならソンな典法未練なことは申さないナ
 ニ左様な心底でないとか。なければ早うお立なさらぬか兎や角言へば時刻は遅るサア
 サア早うと急立られる左内より傍へ馳する岸野浪江等は堪り兼「マア」か下下り
 ませ假令官軍より指圖があらうとも今波地より檢使の見わた陣でも御座りませねば侍
 卒卿のお情にて切腹お聞届を願ひ升其上にては首斬りなどお心次第の事ながら幕首
 様との餘りとしても残念な何卒々々と取違るを六郎兵衛は白眼つけエ、ツヘユと森
 ましい某は主君の仰せ通りに計らふが身の役目詰らぬよまい言は聞く耳持ぬサア藤岡
 氏イヤ左内どの何をウヂく愈々猶豫せらる、なら引ッ立てる連行うかと迫立つたる
 折しもあれ襖押あけ次の室より見玉三左衛門出來り庭先よりは若黨幾歳様鼻に小腰屈
 めて 幾歳 モシ旦那様何せ確かりと不承知を仰しやらぬ何せ黙止つてお出なされ元元よ



○三左 先待たれよ山田氏大切

五十一
り身みにれ受うけのない罪つみでは御座りませぬか。お家のためためにに引ひ受うけなされた罪つみでは御座りませぬか。お家の為ためにお引受けなされた罪であらば切腹せつぷくと云ふが當惑あたふた何にも知らぬ私わたくしでも討首うちくびの身首みくびとは餘り非道ひだうな爲ためなされ方と存ぞんじ升しやうと言いせも果はては六郎兵衛ろくろべゑ荒あらげ六郎ろくろヤア無な至極しごくな下司げし下げ今いま一言ひとこといふて見みよと刀引やいばひヲ提ひげ立た掛かるを三左衛門さんざゑもん靜しづかに押お止とめ。

なる役目やくめを持つて未まだ御用ごようの御ご中ちゆう取とるに足たらぬ下郎げらうなどが申ます處ところにお取とり合あひなさるとは大人氣おとなげないで御座ごらうと言いはれて六郎兵衛ろくろべゑはそれほどばかり桃類ももがたばつた猿さるの如ごとく頬赤ほおあからふくらして苦く々くしげに座まに返かへれば三左衛門さんざゑもんは辭ことばを更かめて「最前さいぜんより承うけたまれば左内さない殿どのには討首うちくびとある上うへ刺さへ鼻首はなくびにせらる。由全体よつてんたい此度このたびの一ひと條ぢょうは津島氏つしましなり貴君あなたなりが言張ことばられたる取論とりろんより起おこつた事ことなれば御用ごよう人ひとの中ちゆうか一個ひとこはその罪受つみうけけらる。お當惑あたふたでは御座ごらぬか夫等おれらの義理ぎり合あひと思おもはれなば官軍くわんぐんより戻かへしらぬと



あるにせよ程好う執計はる、が道であらうに今度官軍よりの掛合の只事に當つた家老の首を斬れど迄の事なれば切腹の上でも討首でも首實見にさへ入れ、ば好い歸還すべくもか家のため命を捨る忠臣を縛り首にせらるゝなど、は必き主君の御本心とも思はれ老夫を何人が言立て、斯様に取極をなされしぞ。津島殿であるかの貴殿であるかア其お心得が承りたいと詰寄れば六郎兵衛は類罷撫で、薄笑ひ六郎エ、入らぬ事の調立如何であらうが斯うが斯上意のあるからには幾許言つても所詮無益だが一體見玉氏に、閉門中の此屋敷へ何用あつて来られしかサア何御用があつて見ねたのかと急所捕らへて竹籠返し人の憂を樂しげに顔ヲヨクと覗込みニタク笑ふ面悪さ三左衛門は齒を喰しばつて怒れども差當つたる難じの辭に返さん答を知らせして夫はどばかりに閉口するを今迄さし俯向ける藤岡左内惣ち口を開て六郎兵衛に打向ひ左内イヤ御上使山田殿此三左衛門は全く拙者より呼寄せた次第にてその譯は同人の娘彌生は拙者が弟左一郎と内縁取結び兼て手元へ引取り置たる所此頃左一郎は何れへ赴けるか行方知れねば拙者より離縁して兎も角親元へ返さんため御座る。見玉氏今申す通り

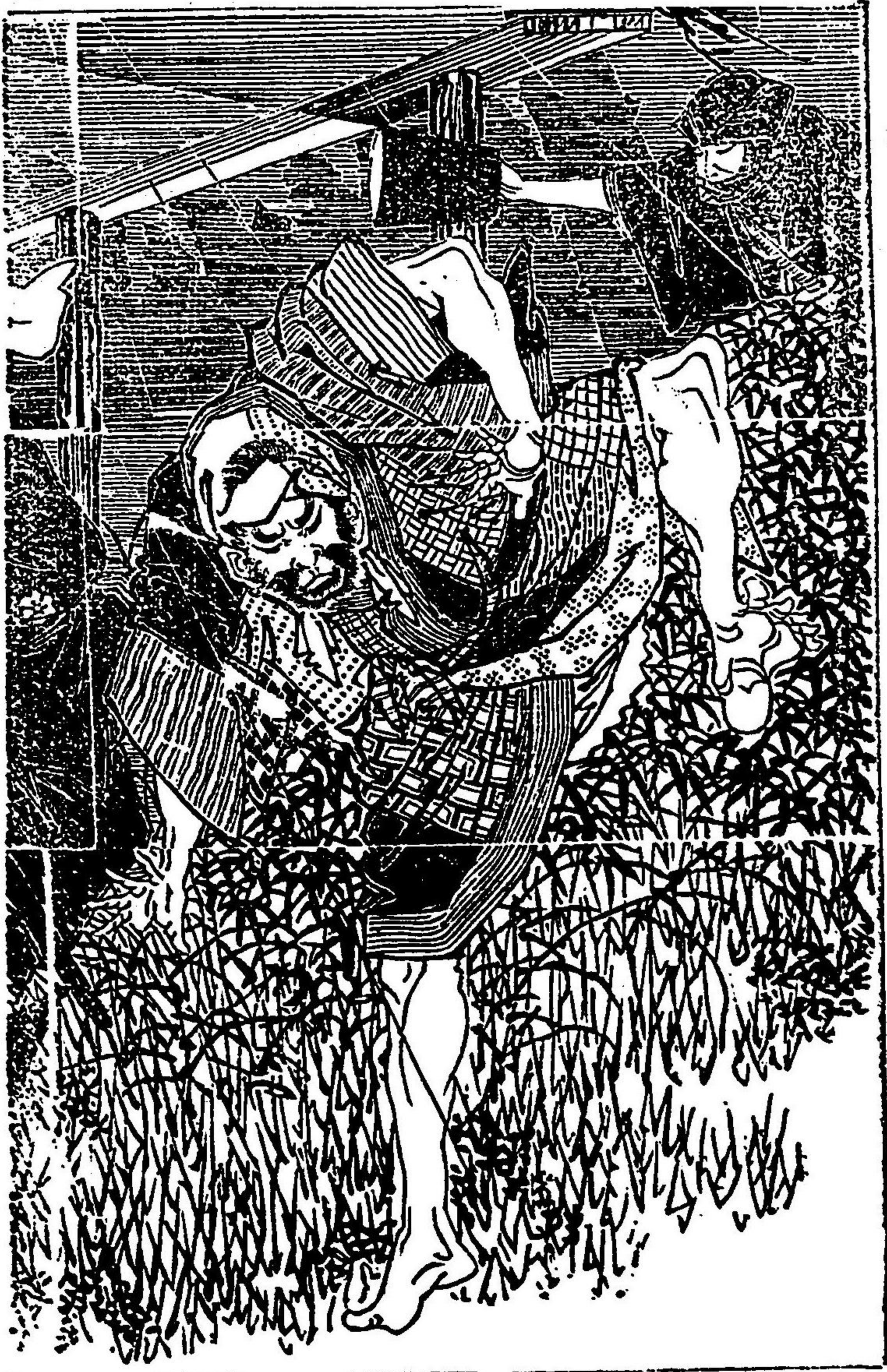
なれば弥生は今より阿伽の他人を連歸りなさるが好いと聞くより彌生ハ打驚き夫はど何か言はんとするを三左門衛は心あり氣な言葉と察して押留め居るに左内は此時幾歳を次の室へ呼寄せて左内若黨風情の身を以て御上使へ無禮の段々手討よする答なれど指てお咎めなない様子ゆゑ只今より暇遣すサツサと屋敷を出て行かれエ、今更言分け仕たどて役に立たうか夫に就てハ汝を雇ふた奉公請書是持つて何處へなりとも勝手に行けと一通の書付取つて幾歳が膝元近く抛遣りけり、

● 第十三回

叙装を引掛やうと乞食滑稽、是も亦菰の上人地を牀に天を幕なる非人共城下外の刑場に斬かけられし梟首の番をなしつ、一人が「吉よ貴様尙だ初だ十三日乞食すりや其味を忘れられぬと云ふの、ア此處等の事かい別々棄骨も折せに二百錢の雇賃貰ふて辨當さへ下さるし焚火の間で温くりと暖まり寐酒をクイと斯う遣つてと品相應しき口の欠けたる貧乏櫻を傾けながら是で不足を言ふては例が當つて素人になるぞよ併し此上羨しい女でも来々や尙十分だわいと打笑へば今一人が「備中よ又管を巻くかい人里離れ



五十五



五十四

た刑場へ此真夜中に若女が出て来て見い夫こそ通断の出来ぬ眉毛に唾代呂物かヒユウ
 ドロ／＼ぢや「エ、不景氣なことを吐きさぞとモツと飲んかい怖や思ふとソレ弱身に
 附込む風の神だハツクシヨ一瞬をすれば影とやらハツクシヨ一可笑な事を吐すから到
 底本當に風をひいた様だと云ふ折しも傍近き藪だ、みの中ニゴソ／＼と音すれば
 兩個は我知らぬ顔見合しながら備中と云ふ非人の尙も元氣さう「ナニ畏怖ること何
 むあるものか何れ犬か狐だヲ全体恐いものと云へば人間に限るのだコレ此にある首を
 見んかい松ヶ枝家の二家老藤岡左内と云へば誰知らぬ者もない忠臣。表はナ主君様
 を賊軍とやらへ味方なさる様に進められた罪で斯うなつたと云ふければ今日も見物人
 が涙溢して低々と話して居るを聞くと有條は一家老の津島奴が罪を塗くつた上日頃の
 怨から是程いせせもの事を悪るら執計ふた譯であるさうな。エ吉よ人の心程恐ろし
 いものハ無いノウ。コレ吉よ。ア、此奴は早い奴だモーグツスリと遣り居るワ夫では
 乃公もツイトロ／＼と明壘を枕にし鎧被つて寐入りしが兎角する中夜は段々に更けた
 り松吹く風のコウ／＼と音高く焚火の今は消んとしつ、尙は消ぬぞ折々チヨロ／＼

上りて木の上遙かに懸られながら懸人共を怨みてか怒を含める鼻首を照らし露物凄く
 見ぬにける斯る處へ藤岡浪江死後の恥辱を隠さんと良人へ盡す心の誠忍姿を男に傳
 り小襟からげに類冠り黒の羽織を身に纏ひ刀の鯉口寛るげて番人起さなば斬つて棄ん
 と身構しつ、彼方の枯草押分出で焚火の火を消消て鼻首臺へ探寄り懸たる首を取らん
 とするよ這は又如何に我より先に曲者あり暗を透せば早已に首取下して逃んとするに
 ぞ此方の驚き天奪はれてはと袖引留れば彼も大いに打驚き取らる、手先を振切つて逃
 んとなしたる眼の先へ忽ち閃めく含燈の火影に是はと二度吃驚り面見られと手早く
 袖をさし翳す。隙を得たりと附入る浪江曲者が小鷗を掻込み首引取らんと争ふ折しも
 藪陰より立現れし大の男含燈照らして脚場を測り二人の中へ割つて入り是も同じく首
 奪はんと争へば以前の曲者は周章驚き必死となつて手足働らかし身を播振んとする機
 に兼耳に水の夫ならで臥ねたる非人の頭をハツタとばかりに蹴掛けたる彼は不意に首
 さキヤツと云ひつ、起上り暗に黒白は分らぬと必定曲者と朋輩喚起して取掛るも敵者
 定めぬ波多撃管るを幸ひ引据んと立廻れば名々目的を失ひながら負けず劣らぬ結合ひ

暫く時を移せしが俄かに一箇の聲として己曲者旨々逃して好いものかドッコイ爾うは
と云ふ間もなく忽ちベリく物引裂ける音と共に此方に堂と倒れる響あり是はと思
へば又彼方へ人の走出す様子なれば夫と比しく二三人其指す方へ追行ぬ

● 第十四回

却説津島權右衛門は清なくも忠臣藤岡左内を討首にせし刺さへ官軍の使者に細船以終
に鼻首に懸けたるがらの夜料ら曲者あつて奪去れし由番人共が争ふ折その手に懸る
羽織の片袖取添て掛りの者より事云々と訴ありたれば時を移させ穿鑿を遂げ全く曲者
は元藤岡に使れし若鯨幾藏なりと定り又その行方の知れぬ所より左内の家族を取押へ
て幾藏の仕業は必らせ手前等の言付けたることならん次第明かに白状せよと手懸い時
味をさせたる上尙取調中預りと稱し己が屋敷へ連歸り離坐敷へ細込置けるは如何な
る底意ある事か岸野浪江の兩個が身の上最も危く見えたりしに先程より只一人奥庭さ
して引れ行きし嫁の浪江が如何に言開をなしたるか人一個も附添はせして自由の身。
眼元に濡る涙の跡は未だ乾かぬと笑溢しつ、戻來れば岸野は不思議さうな面をして岸

野オ、嫁女キツウ暇が取れて来して居たに思ひの外なその有様。エ最早時味はゆるさ
れたとか夫なら何は束めあれ重疊々々試てハアノ幾藏は兼て左内から奉公請書と言做
して左一へ送る手紙も波してあれば仮令昨夜の首盗人は彌々幾藏であつた所が然れば
又今頃は早く領地を立去つて程好う悲むはて呉たであらうか。併し年老れば耻多し言
はゞ斯いふ暗い世の中に生延びたが不仕合せであらうけれと思ひても尙思ひべさは森
悪非道な此處の主人今勝手に卿を縦すと云ふも合点行か余等女子の身でなければ彼
が生首引提げて悴が墓を祭らるものと思ひを聲を高うすれば浪江は忙て、押留め浪
江コレ母さま夫は何を仰つしやる全体權右衛門さま連思ふた程の悪人でも岸野ナ、何
と云やる浪江イエサア今も段々聞て見ると向ふには又何かの譯があつてと半分言はさ
き岸野は怒りの色を現はしつ、ハタと睨んで齒齧ををし岸野浪江卿は氣でも遣はせぬ
か。最前迄仇と怨んだ權右衛門を何故回護ふて肩持か浪江イエ肩持つ譯ではないけれ
どアノ權右衛門さまは苦味のある丈智慧あり岸野エ浪江兎角未見込ない藤岡の家
に居るより好き、うなから今宵一晩。チハない何時迄も妾は此處に居り升がその代り



貴姑は屋敷へ歸して上げ
ませう岸野ハ、ア夫では
日頃貞節など思ふて居た
も眼鏡違ひ全く津島の襟
に着いたのであるナ 浪江
言ハ、爾ンなもの幸ひ手
違ひければ斯いふ時に
け誠は象樂であり升わい



ナアと聞くより岸野は赫とばかりに急立つて身を震しながら何か言けんとして言ひも
得老悔し涙に暮居たるが流石の浪江も今迄の恩義を思へば堪へられずや密に
て拭ひ雲時辞るなかりしが折柄正舎の方にて置時計の響すれば浪江はハッと頭を掻げ
胸の中にて音を數へ 浪江 アリヤモ一暮六つ使是しては何かの妨げ今に此處の家來が支
度盤へ来る筈ゆゑ餘り暮切らぬ中トットと早うれ歸なされ妾は正舎へ行き升ぞエと突

立て此を出んどなしつ、も跡振返て、姑が顔後より跳遣り聲低て尙も嚴しければ、随分厭ひなされませ。若御持病が起つた時、手軍等の小抽斗に藥を入れて、のり升ゆゑ、早う服るが宜しいせ。又何ぞ事でも起つた時には、三左衛門どのへ御相談なされませ。去らばとばかりに言殘し、心強くも此處を出て、駒下し、ハツと思を吐きつ、も斯く掛へ置けば、是で好しと、獨り點頭き、飛石傳に正舎をさして、走行ぬ。

● 第十五回

浪江は主人、權右衛門が居室の傍に歩み來て、襟袵整へ、帯刷ひ時しも、木の間通來る夕月の形なしたる、鑿甲の櫛、抜取て、水鏡、揺めく影は、定かならねど、手洗鉢を、盤盥、髪搦つけて、袵やかに、椽側より、障子引開け中に入れば、權右衛門は、機嫌好氣に、權右、オ、思ふたよりは、早かつたナ、浪江、ハイ、何とやら言惡うて、大分、手間が取れました、たれと貴君の仰つしやる、通に言切つて、權右、ウン、その境の様子、は疾く聞いた、浪江、エ、妾がアノ姑へ、申した、愛想づかしを、ソリヤ、何時の間にと、驚くを、權右衛門は何にも、言はき、打笑ひつ、ナニサ、卿の、必慮見ぬて、是より喜ばしいこと、はないサ、ア、近う來て、一盃、酌して、たもれと、今迄、飲した、盃、出せば、

江はハイと云ひつ、にじり寄り、徳利の尻を、搦で、試み、静かに、注ぎ、甲斐々々しくも、赤た、漬や、しう、並べ、立たる、肴など、小皿に、取りて、進めつ、終に、我身も、侘られるま、一盃、二盃を、過したれば、權右衛門は、獨り、頻りに、興に入り、兼て、某が、心を、懸けた、眼鏡に、建はき、姿の、辱れしのみならず、なか、の、利、悉もの、近頃、死んだ、女房、本を、如何して、一、及ぶ、所でない、わいと云ひながら、酔了れる、酒で、他愛なく、浪江が、膝を、假枕、何時か、昏々として、睡りたる、顔を、眺めて、浪江は、如何に、思ひしか、天に、知られぬ、涙の、雨、ホロリと、落す、一滴、權右衛門は、岸破と、眺起き、權右、浪江、卿は、泣いて、居るナ、尙未、練が、覆つて、哀しう、思か、今、料ら、せも、我面へ、涙かけたる、涙にて、二心ある、ことを、察したり、次第を、語れ、由縁を、言へと、手元、に、在合ふ、脇指、押取り、鯉口、縫めて、詰寄るを、浪江、ハ、笑ふて、浪江、是は、マア、大、壯らしい、仰し、やり、權貴君こそ、尙も、疑がある、と、見ぬ、升。成程、まじ、泣きました。ハイ、涙を、流しました。併し、その、泣いたのは、貴君の、御心、切が、嬉しさに、て、權右、何と、浪江、サア、今朝、から、役所を、如何に、亂た、世の中、連アノ山田、六郎、兵衛が、老人、婦人とも、用、拾せ、せ、嚴しい、責、苦、命も、已に、危険いと思ふ、折に、貴君が、お、辭懸けて、差替る、難い、場を、お、助下、され、ました、喜ばし、誠に、萬、歳で、逢ふ、た、佛、縁の、やうに、御、坐

りまして其上是から先に吟味があつても程好う言取つて疑ひ舞れる様又家名も立て遣
らうとの仰せ真にね嬉しう存じ升全体表は父母兄弟もなく只一人の叔父があつても江
戸住居にて斯いふ時便りよするものとて一人も御座りませんゆゑ今からはお情深い



御心腹に聞ふく只貴君を杖

ども柱ともみ廻り申さうよ

り外に仕方ないの御座

り升何卒不憫に思召してと

袖口にて密つと涙拭ふて片

手をつき指俯向けるその風

情、刃當てるの扱置て硬さ

鮮も加ふべき様なければ權

右衛門は一旦の怒り一時に

解けてニッコと笑ひ權右オ

、爾うなければならぬ答今

言ふたのは眞の卿が氣を引

て見た迄の事必らぞ心に懸けぬが好いぞや、浪江、夫なら妻も安心を仕ました。何の心に



懸るなど、いふ事が御座りませうぞと云ひつ、障子に移る月影を眺めて「オ、初夜も過ぎました様子モ、お休なさり升かど是より浪江は權右衛門を奥の寢床に扶入れ頼て我身は密と外に出で行燈の灯を細め屏風引廻してやをらその中へ入らんとする時手早く枕元なる一刀取つて扱そばめ權右衛門様覺悟と云ひ様斬付たれを權右衛門は大いに驚き跳起て身を躲し手近の煙草盆取るより早くハッソと投げたる礮漬し瀝と立つたる灰煙に浪江は思ひを飛退つ、尙る屈せを壁掛るにぞ權右衛門の前後左右に外しながらあしらひ兼て見わたりにしが狂しといへど女業終に夜着を刃に打掛て浪江を其場に押伏せ足下に踏へ權右己女の分際にて予を騙詐り手向せんとハ片腹痛しモ、此上は可愛さ餘つて憎さが百倍イテ思知らせて呉れんと扱身もぎ取り振上げて哀れ浪江は一刀の閃く下に夜の嵐の花と散りあんな有様なりしが折柄次の襖押明けヤレ待玉へ權右衛門殿と叫止めながら入来る人あり誰かを見るに外ならぬ腹心の山田六郎兵衛にて辭忙しく只今料らぞ都合せ驚き思ふ此場の様子お手酌とは御無理ならねど今此で切替あつては主君は勿論藩士の思はくも如何と思はるれば夫よりは云々期々してと何かは知らざる耳に

口暫く低話さ居たりける

● 第十六回

見玉三左衛門の娘彌生藤岡左内の母岸野と妻浪江とに打向ひ彌生サッ昨日から御心配なされたであらうと存じ升イエ何も御遠慮に及びませぬ。ハイ此は父三左衛門の姉が存命中に厄となつて住で居た家で妾方の別荘も同様にてその伯母が没なりましたから平常は鎖切て去年以來縁に掃除もせきに放抛てあり別に人も居ませぬゆゑお心安う思召すが宜しう御座り升コソ松や早う茶を拵てお呉れとまめくしう待遇して尙る心を配り「今日は大分暖かい様でまだ梅も残つて居ますればお茶を上つてからチト庭でも見てお氣晴しをなされませと傍の障子押開くに構の門は鎖してあるに何處より入りたるか忽ち一匹の白狗が走來て岸野浪江の顔を見るより尾を振動し左も嬉し氣に前足様頬へ凭掛けたれば浪江は愛さが中にも莞爾と笑み浪江サ、白か好う來たナア岸野如句して余等の來たを知つたであらう彌生眞に感心なるもので御座り升浪江コソく爾うしては様が汚れる下へおりよと優しう叱りつ、眉をよせ「御でさへ伺はる、主を慕ふ

て人に近い心あるにアノ津島権右衛門素道といふも餘りなと語らば岸野のその語
を大ぎ 岸野一旦斯うして三左衛門との、手へ引渡になりはなつたが後で如何に
目で見せるか知れぬと思へばなかくに落着ては居られそその中三左衛門のがお
出でいあれば蕭々御相談を仕て見ませうわいな 彌生 實の最前父上が御座へ上ります時
今日は成らぬ迄も主君へ申上げてお願ひの事を解き吟味を免される様に計らば
ば此由を申して置けとの言付も御座りましたためア御安心なされませと尙も様々愛
想して兩個を慰め居る中に早黄昏に近くなりて表の方より人の人來る音する彌生が
忽ち父なりと推察して出迎へば岸野浪江は坐を正し待問もあらで三左衛門彌生と共に
此方へ通り岸野等が厄介になる挨拶するを打消て三左ナ爾う餘所々々しう言はる、
には及ばぬ事表の聞ぬは離縁でも此彌生と左一郎との一旦結んだ縁は何處迄も願
ぬ中縁者となれば互に力になり合ふが當然さら〜お世話申すを厭へぬと云として
打委れ暫らく俯向き居たりしが頓て又頭を捻げ「今はそのれ世話をするに九分は出
來ぬ仕宜と聞くより彌生は父の顔をジツと見詰め岸野浪江は如何なる譯かと胸を刺め



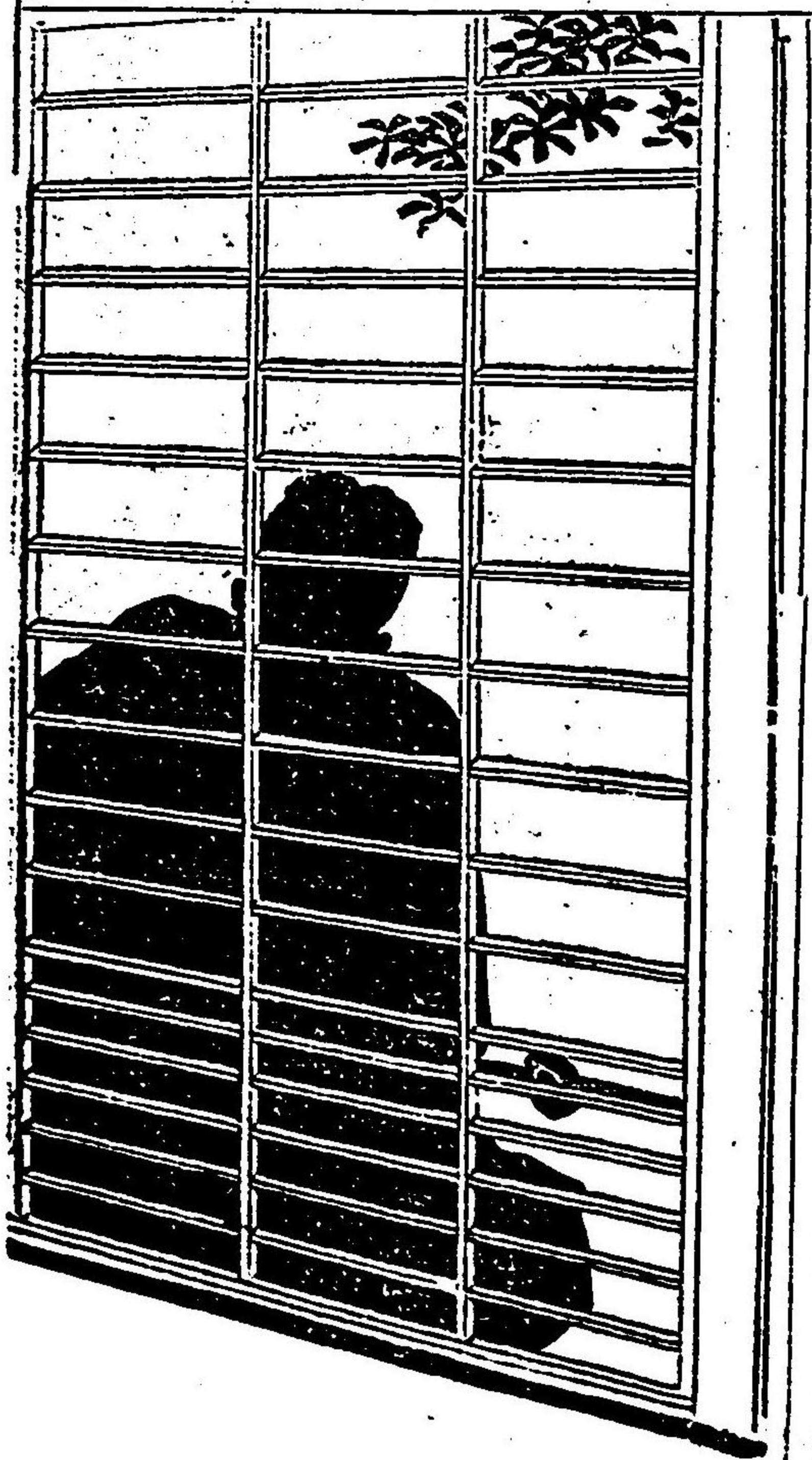
て氣色を疑へば三左衛門は若し氣に息吐て三左サア委しう語らねば仔細知れぬと聞れば又主君の非を擧げまばならぬと語る所某が申す處は少しも採用にならぬして又夫の律島山田等が計ひにて左内の首紛失はその家族が元の家來兼藏に言ひ付て盜ませしに相違なければとて如何やら家名斷絶は勿論殘る家族を城下より追放と定れる様子を御座るサ、そのお慨さ尤にて某も腹に据兼ね殘念に思ひながら今事を荒立て、は左内殿が折角の忠死も無益にならんと存じたゆゑ何事も皆胸に納めて引取つた次第其中世の治りもつさ主君にもお威の解ん折を伺ふて立派に藤岡家の相續出来る様力を盡し申すべければ先夫迄の然るべき土地へ身寄せて時節を待ちなさるが好い、聞て驚く岸野浪江悲嘆の涙止め敢へて身を平伏して泣入りたり斯る折しも最前より此家の裏手へ忍び寄つたる怪しの男暫らく東西同居が頃て夕月の影を照らして枳鞆地の枯れたる所に犬の出這入せしと思はる、隙さへあるを見付出し是幸ひと撞分けつ、マンマと庭へ入込るに忽ち吠ゆる犬の聲序悪しと思ひながら白よくと低やかに呼掛けたれば如何なる仔細か犬は俄かに耳を垂れ尾を振立て、怪しの男の脚下近く走寄つたり

第十七回

家裡には三左衛門眼を屢た、さ三左そのお慈悲は御尤もながら今は何程泣いた逆路方ない次第であれば夫よりは差當る身の落着をね者なざるが好いア、何處かに然るべき所はないか備前に頼母しい親類もあれど是は少し遠方ゆゑ不便であり當内にてハオ、ソレト廣恩寺の住職こそ平日の菩提朋友出家に似合ぬ義氣ある人なれば城下よりは間近過れど彼處へ頼み申すべきか併し夫の權右衛門が一旦手討と迄に怒りながら俄かに山田が言を容れて何事もない振に某へ引渡して更に又城下を追放とハ必らき其處に悪計のあること、覺しければ迂濶に仕て居ては如何なる禍あらんも知れきと小首傾くれば岸野は涙を拂ひ岸野ハイ何から何迄も御深切に有難う存じ升。併し今お話の次第は御心配下されまますな實は此處より餘り遠からぬ妙壽山の麓田中村に住居り升七助と云ふ男は以前妾方に勤て今に折々は尋ねて来て何時も變らぬ實貞者で御座り升れば此一旦は彼の方へ手寄つて参らうと存じ升三左左様の處があれは重畳ながら權右衛門が悪計を避る用心には如何なるもので御座らう岸野イヤ夫は御安心なされて参らうませ

右の七助と申すもの、悴は兼て妙壽山の別當寶珠院の寺侍となつて居りまして此寶珠院の住職の京家の尼君妾も一二度お目に掛つた事ありければ危急の時には夫にお籠り申す積で御座り升三左オ、夫ならば先の安心去りながら何處迄も邪智深い權右衛門踏分共に心をお配りなさるが宜しいと語らふ折しも次の間の庭に方て犬の吠聲聞

る
にぞ
三左
衛門
は立
上り
隔の
襖引



明けて向ふを
乾度眺れば夕
月採鼻の障子
に照らし木々
の枝葉を寫せ
る中に怪しや
人の刃を持ち
今や腹を斬ら
んとする様見
わたれば三左
衛門はアワヤ
と言ひつゝ、駈
出て障子シハ



ラリと引明れば彼方が驚き振向く顔を三左衛門早く認め「オ、汝は幾藏何故の生害を
 狼狽たか氣が狂ふたかと云ふと比しく刀持つ手を取押へ尙三左衛門の後に眼を走ら
 る浪江を初め岸野弥生も共に聲掛けて死を止めたれば最前より怪しき容子と思ひてか
 類りに吠へたる狗も暗止たり幾藏は縁側に手を突て幾藏狼狽たか氣が狂ふたとか仰
 つまやるはお情ない實は此程お暇を戴かましたが如何にも跡の處の氣掛りなれば京都
 へ参るお手紙を持ちながら尙當地に脚を止て居り升中旦那様が天晴御國のために御最
 期なされましたを悪者共の計ひから終に三尺高い木の空へ鼻首にお掛り遊ばされた獲
 念さ責ては今一度お目に掛つてと委借して刑場に行て見れば怨を含んだ御顔色と云ひ
 つ、涙す、りあげ「爾うでは御座り升が私の眼からは尙日頃柔和な御氣象は失せせし
 て幾藏か好く来たど仰しやるやうに思ひれて如何も棄置さ難き處より其夜の暗に紛れ
 番人共の邪魔を拂ひマンマとお首を盗取り御菩提所に赴き住持頼んで密かに葬りを仕
 て貰ひ初翌日より彌々京都へ出立と存じた所市中の取沙汰にては番人共に引切れし羽
 織の袖が證據となり後室様奥様方が旦那様のお首紛失の事に就き上へお捕へになつた

との由夫聞いて初て吃驚りア、下司の智慧は後からと云ふ比喩の通り只一國意の考へ
 から思はぬ御難儀を掛けたる事の悔しさ斯うなる日には自分一個の考で致した事と名
 乗つて出るより道はないと存じた折柄思ひの外お兩個は見玉様へ引渡となり此處へお
 出になりしと聞きましたに就け餘所ながら御容子を伺ふて進退を定めんと最前より忍
 び込み料らお話しを立聴けばお家斷絶の上城下を追放とは驚き入つた一大事は皆私
 が粗忽より起つた次第その言辭は腹切るより外ないので御座り升是が如何して死な
 せに居られませう 三左 サ、夫が大きに間違であるぞ成程汝の言ふ通り今此處で切腹す
 れば生殘る後室始め浪江どのへは言分け立つる上へ申開きの益にもなりませ殊に没なら
 れた左内殿へは濟ひまいがナ夫よりは兼て左内殿より渡されたる左一郎どのへの手紙
 を届けるが大事の役目 幾藏 ソリヤ承知は致して居り升が眼前お兩個に御難儀を懸けな
 から浪江イヤアノ晩にお首を盗んだ罪は強ち卿一人が負ふでもない有やうは斯いふ委
 る男妾に出立つて 幾藏 ヤ、夫なら焚棄の火が俄かに消ぬお首争ふたは番人と思ひの
 外 三左 今迄口に出さまりしが其も亦首争ふたその一人浪江エー幾藏 ハ、ア夫の折含置

持つて御座つた十貴君様で御座りましたか 三左 畢竟彼是争ふ中含燈探消して真の暗其
 上番人共が脚手まどひにて事遂げ兼ねたれど幸ひ汝が一人盗課せて葬りせしは此上な
 い手柄落度も何もあいなれば切腹杯とは思ひも寄らぬ跡の處は其然るべく計へば汝
 の片時も早く京都へ赴くが好からうぞと論す傍より岸野浪江も解を添へて和じれば
 藏漸々承知して去らば是より出立と立上るを三左衛門は呼止めて夫に就ては面倒なが
 ら娘彌生を同道して呉りやれと聞くより岸野浪江は口を揃へ 岸派 彌生どのには離別の
 後難義の掛る筈もないに他國へお出なさる、は 三左 イヤ彌生に就ても津島の毒計始終
 は彼奴が粹權之丞の妻にせんとお思はくれば所詮某が手元に置れぬ次第コソ幾瀬汝
 が竊かに京都へ伴ひ左一郎どの、宿を尋ねて行末の苦樂をば俱にさして下されよ 幾瀬
 お連申すは安けれど尙生若い私なれば 三左 イヤその遠慮は入らぬ事兼て見込んだ
 汝なれば是非に頼んだ承知あれど云ひつ、 懐探つて疾くより用意やしたりけん金包
 取出て「聊かながら路用万端にと手渡し仕て尙又彌生に事の情を言聞せ専ら旅立の用
 意を盡かしぬ

● 第十八回

扱も藤岡の元若無義は三左衛門の依頼に因り娘彌生を伴ふて西口街道夜を日に繼ぎ
 内日さす都路さして急ぎたれば幾日もあらで津の國なる芥川驛に着きたるが折柄日
 も已に暮れんとしたれど最早京都に程遠らねば逆一挺の駕籠を雇ふて彌生を乗せ我身
 は後に引添ひつゝ、急し行けば頓て山崎の唐街道近なりにけり抑も此道筋は文祿年中豊
 太閤が朝鮮征伐の折開かれしより斯呼刑めたる者なりとぞ左れどその以前も京都羅城
 門より淀を経て西に通る官道昔据ゑたる關戸の院は跡絶ぬたれど今新關を設けられ
 藤堂家の手勢嚴重に守居て殊に夜中なれば容易に通行許されず番番の兵士門内より名
 を問ひ行先を尋ぬるに幾瀬は差當つて飯の姓名告げて程好く仔細を述べたれど彼方に
 の怪しと思へる廉あるか如何に言へども夜中なれば逆門開かねば流石の幾瀬も困り果
 駕籠昇据たる處に立戻り 幾瀬 オイ駕籠屋此邊に好い宿屋はないか夫共此關所を通らば
 に京へ出る道はあるまいかな 駕籠屋 ヘイ、宿屋と云へば芥川か責て高槻へ戻らねばな
 りやせんが又問道なれば此邊で名の通つた私等も知らぬと云はないがナア且那斯



ンなよる夜中にや先お断り申しやせう 幾歳も未だ夫程遅くもないから這つて呉れ 駕籠イ
ヤ真平だ。ノウ合棒 合棒 然うだ別して斯んな代呂物を昇いでは只さへ牧屋な世の中危
険い〜と冠を振て尻上げねば幾歳も暫く小首傾けしが俄かに獨り點頭さ内 懐 懐 懐
りて三左衛門より渡されたる路用の金財布取出して二分金一つを駕籠屋に與ゆれば金
の光は七ひかり親の云ふ事聞かぬ身も忽ちに折る腰の番へい有難う這りませうと勇し
く息杖取つて肩を入れ廣瀬村の小道より柳谷邊を目當にし人目憚れば提灯吹消し
さ山路を覺束なくも迎り〜て凡一里餘りを進行き天王山の裏手と覺しき所に至れば
左は頭上に落かゝるばかりの崖にして右は底を知られぬ深き谷 道も一入險阻なれば
駕籠屋は此に肩を休めて傍の岩角に尻打掛け稜の取れたる燈石口ヲ斜めてカチ〜云
はし古傘を蓋べる様な真する莖ツウ〜吸ふて互に面を見合しながら 駕籠 且那な
ト〜の難所で逆も此儘越ことア出来やせん 幾歳 モー此處は峠であらうから然う言はせ
ど氣張るが好いッ 駕籠 イヤ如何しても行きやせん。ダガ酒手次第で其處は又。ナニ最前
も遠たとかへん馬鹿ア言なさんナ。アヲヤれ前さん汪路の負だッ。サア酒手を下さい

金を出せと手を眼の前へ指せば幾歳は執として幾歳コリヤ〜夫程欲くば遣らぬで
 めないが強請がましい事をすりや承知仕ないぞ 駕屋 何だ強請だとコウ〜乃公等より
 貴様ア一体何者だコリヤヤイ金と人との違ひあれど女盗人欠落者頭から圖所越されぬ
 身分であるを斯う問道から無事に越さする乃公等なればオウシ〜朋に巻て居る金の高
 なら二百兩キリ〜此處へ出して仕舞へと時しも西の家に落かゝる月の光を便りにし
 て息杖振つて撃掛れば幾歳大に怒り扱は己等盗賊よな覺悟しをれと腰刀引抜き渡合ひ
 駕籠を載ふて取ふに不敵無殘な兩個の奴原高の知れたる赤鯨た、んで吳んと勢 鋭く
 撃込めど幾歳少しも驚かそ一個の駕籠屋手を負し今一個を斬倒さんと振上る刃を避
 んど彼が傍に飛退く機其處に昇据ゑし駕籠にトッサリ打當れば中なる彌生がコロ〜
 と轉出でアウヤと云中右手なる深き谷間へ陥込て生死も知せなりに免

● 第十九回

初め都に上れる頃東山に白う見ぬし餘んの雪も疾く消て庭園華頂邊りの花も何時か散
 り今は早新樹の葉風うち薫る四月初旬となりしが藤岡左内の弟左一郎木屋町の宿大坂

屋が二階座敷の柱に凭れ此程より降續きたる卯の花くだしにて 涙流る、鴨川の面を
 見送りながら腹の中にて「世は尙静かならねど王政一新の業も次第に基立ちて又松ヶ
 枝家も先故なく官軍に服従したりとは言ひながら只合點の行かぬは兄左内が罪引受け
 て死したりと云ふ一つにて先頃本藩へ使者に向へる長藩の中井某は是迄通手を求めて
 一二度面會せしことある人なれば委しき様子を開んとするにその後江戸表へ出張あ
 りて會ふことならねど兼て其筋へ報知ありし所は右の通りに相違なしと漏聞く上先頃
 より折々兄へ書面を出したるに彼方よりは一度の返辭も来らざ且本藩より我身の舉動
 を伺ふ氣色見ゆる杯心得難きこと多けれと此に熟々考ふれば全体我兄が議論として朝
 廷に對して罪となる筈は万々あかるべき事なれば何か是には間違ある事ならん縱し問
 違ないど仕た所が思慮深い我兄上なれば決して眞に死なれた事でもなからうと思定しつ
 思返し獨り思案に暮れたる處へ段階子の音ト〜と響かし此家の女房お安が駈上り
 夜具押入の前で何事か喋べり居る兩個の下女を呼掛けコノお梅下の八疊で手が鳴て居
 るせおみきは最前から何を仕て居たのかチヨツとでも問があるぞとチヤ〜とはんに



くドもならんナアと小言たらしく左なきだに情からぬ面相に腹立顔を取添て左一郎の前に貼たり坐りお安モシ旦那藤岡さん妻が来ると又イヤナ事を言ふ婆々がと思なさ

らうけれ
お熱う動
を思ふて
御覽外の
宿とも迷
ひ此木屋
町では座
敷から夜
其家具一
散枚上美
た物を使

ひハイく知れ

た事を言なされ

マ一風呂を焚た

處で丁子を入れ

るし火鉢の火で

も切戻なり夜半八つでも手さへ鳴れば起番も

居升しソリヤチツとは並の宿屋との違ひませうへん何が何ぢやとか直段の調ならマア

た金の顔見せてから言ひなされ。一体貴君は此三月の初に四條から宿を變へてお出で

、只た半月丈の拂をなされた限りでその後は何時も國から金が来ぬくとばかり云ふ

て悪なさるがその金け兵に何時来るのですエイヤノ今日と云ふ今日は何の何のつても



埒明けて貰はねはなりませぬと云ひつゝ、手に持つ津付屋の上に引廣げり是が通當の
 お賄で是がお客さんのあつた時の入用是が何邊のお取替都合合して二十八兩三步
 二朱と百七十二文サア奇麗に方を附けなされイエ待ぬと云ふたらモ一待ませぬ。ア、
 斯ういふ事を知つたら早う應對をして暮切れば好かつたと思ひ升ッイ貴君の乗出しが
 エライのと又此節諸藩のお方がお交際のために大勢出張して御座るから夫と同じ様
 に思ふて是迄ウカ／＼乗込で大失敗コレ旦那モシ藤岡さんコレ黙止ッて居ては分らん
 やありまへんか。エ無いものは無いから暫らく待てサア／＼その工面仕て見やうも久
 しいものぞす。ア夫なら仕方がないその工面の出来る迄刀も指脇も衣更も何も敷も預
 づて置き升ッソテ坐敷も今から下へ變つて貰はんとなりませんと無理無体到手荷取
 づて押へんとする折しも思ひ掛ない一個の藝妓が様先よりサ、旦那で御座り升かど云
 ひつ、此方へ走入つたり

● 第二十回

左一郎は此方へ走入り嬉氣に會釋なしたる藝妓の顔を熟々見て小首傾け如何やら見た
 様に思ふれど頼ど是迄何處で逢ひしとも思出さき何にして此境の大驚を聞かぬ、が
 面目なさに少し困りし様子にて 左一 卿は余を知つて居ると見ぬるが余は少しも知らぬ
 顔若や人違ではないか 藝妓 イエ／＼人違なほどは御座りませぬ妾は此春と云ひ掛るを
 女房お安が打消して お安 爾んな事は如何でも宜しいがサア藤岡さん勘定が出来ねば今
 言ふた通りその衣類も大小も預りませう小富さん卿も向ふの見ぬぬ見ぢやナア斯んな
 懐の寂しい人に勤めても程賣つても線香半本の足にもならうわいなア今妾の宿賃の
 滞を催促仕て居る處と味もなく言散すに左一郎は聞かざるさうにさし俯向けば小富
 はお安の方を振り返り 小富 サア此旦那に宿賃の滞りがあるなら夫の何程か知りません
 けれど妾から勘定致し升 お安 フン卿から貰ふても旦那から受取つても妾の方は勘定が
 濟さへすりや好いけれどコレ小富さん二兩や三兩の端金で無いぞへソレ此書付の通り
 貳拾八兩三步二朱と百七拾二文ザツと廿九兩の高であるが小富さんは是でも拂ふてお呉
 るかエ 小富 ハイ二十九兩であらうが三十兩でも妾から埒明け升わいなね安オ、夫なれ
 ば宜しいけれど夫なら又た今此でサラリと拂ひなされ 小富 サア今と言ふてはその數も

仕て居ぬゆゑ此で如何すると云ふ譯に行きませんがマンザヲ知らぬ顔でもないから
 然う喧ましよう云ひなさいでもお安イ、エ是迄延に延た上なれば少しの猶も出来ぬ
 わいなア併し卿が本當に確つかり受合ふて呉なら此の處は待ぬでもないが夫も長う
 のならぬぞエと話半へ下から下女が今江州のお客さんが見ぬましたとの報知を聞きア
 、然うかと云ひつ、此處の應對の打棄て、忙しきうに階下バタ／＼下り行けり跡は左
 一郎の坐を正して藝妓小富に打向ひ 左 最前も言ふ通り余の方には覺ぬない位である
 に段々の深切辱なう存ざるが何分心の術の露宿賃の處は此方にて如何とも都合致す
 から捨置て下されよと懇懇に挨拶すれば小富も形を正し 小富 其お辭は御無理でも御座
 りませんが全体妾は此正月に播州大藏谷の宿屋にて大勢のお客さんに調弄られた末粗
 匆を仕まして其處に居られたお武家様のお手耐にもならうとする處をお助け下された
 播磨屋清五郎の娘富で御座り升と云へば左一郎は膝を打ち 左一オ、成程然う聞いて初
 めて分つたが卿の姿は一体如何したのだエ確か那の時煩ふて居る母もある様は云ふた
 が其後全快を仕られたのか 小富 ハイ何時に變らぬ消しいお辭有難う存じ升と云ひつ、

少し過ぎしが夫と就ては聞てお貰ひ申したい事が段々あり升ければ最前より貴君の御
 様子を見守りへ行た歸りがけに承まはり差當る御難儀と察して指し出がましいとは存じな
 がら兼て受けたる御恩報じの端にもとツイ此へ出ました譯で御座り升と聞くより左一
 郎大いに感じ是より今の我身の上を委しう語出で始終打棄れたる様子なるにぞ憂ある
 身は人の哀も一人に胸へ應へて小富は坐るに滯る、眼元を拭ひ妾も當地に来て未だ長
 んのなりませぬと祇園町に居て彼地此地馴れぬ御坐り升ゆゑ假令お國の便がありませ
 ぬとも決して御不自由させぬ積り必らお御安心なされませと云ひさして階下の方を
 振向て手を打叩き宿の下女を呼寄せ耳につき何事か騒げるに折柄縁側より一人の女が
 顔出して小富さん早う此地へお出んか小富さん／＼と叫立てける

● 第廿一回

一室の中には男女の低々話始終ハ判然り分らぬと女の聲にて「如何いふものやらその
 後是非來ねばならぬ音信が母さんから來ませぬので此地より容子を聞かうと思ひまし
 ても只播州の龍野近邊と云ふ處を心指して行かれる筈で確かに何處とも分らぬ大藏谷

の淡路屋さんの方へ手紙を出しましては如何な事でも返事がないゆゑ日夜案じてばかり居り升と云ふに答へて男の聲「夫は心配な事であるナ。併し時さへ来りや又音信を聞て喜ぶこともあらうぞエ」妾の苦勞は厭ひませんけれどツイ母さんやら弟の事を思ひ出すと、云ひさして後は暫らく慶聞をざりしが頓て「是ハしたり貴君の心を慰めんとしながらツイ妾の身に掛る事を云出して却て餘所の雨にみ氣を曇らしめたサアモ一つお過しなされませ。ソリヤ貴君の事ハ申しませぬが妾は大恩受たか方ゆゑ少の間も忘れずに何卒今一度逢たい目目に懸りたいと心に念じて居りましたに斯んな嬉しい事は御座りません。何のアナタ少し過ぎた逆妾が介抱致し升ぬいナア。イエ今日のお客さんは加賀のお武士と云ふ事ですが眞の二見のお方何れ構は仕ませんと稍笑聲の溢れしハ問はせと小富左一郎が兩個の物語と知られしが之に引續て隣室には一個の田舎武士只さへ荒くれなその上に酔の廻つた慶高や傍に坐れる舞妓に酌をさせながら宿の下婢に向ひ 武士 コリヤ早う小富を呼んか何を仕て居るのだ 下婢 サアアノお見はアノ一前廉世話にあつた御主人も同様な方料らせ會ふたと云ふ様ナ 武士 ヤ

イソソリヤ何を吐すのだ譯も分らぬ事を彼是云はせに行て居る所へ案内せいで、ヤ乃公が直に出掛けて。コリヤ邪魔するナマゴノノすると蹴飛ばすぞ。何の己引摺つても連れて来るのだと陰隈く脚に銚子皿鉢踏蹴し追つ取刀で縁側に駈出れば折も折とて隣室に女の聲よてホ、と打笑ふを本性違はぬ生酔の早くも耳に答めてオ、小富奴は此に居るのだナと云ひつ、ツカノとその座敷へ踏込んで矢庭に小富の襟元掴み有無を云させ引摺り行んとするを左一郎が見兼てヤレ待れよと支る辭を聞も取らせハツタと此方を白眼つけ小富を其處に突遣つて刀に反をうち掛ながらヤイ貴様ア何者だ何せ止めるのだアソリヤ見る所ではマンザラ素町人とも思はれぬが一体お手前は何處の御番だ何處のお武士だ。何だ張腕を仕て眼をパチノ、オ、腹が立つかコリヤ不思議な事もあるぬい人の金出して呼んだ藝妓で遊ばうと云ふ様な意氣地なしの人間には腹の虫もなからうと思ふて居たに扱々妙だ奇妙だワと嘲弄極はめし彼が無禮に左一郎も今ハ堪へざる言ひして置けば様々な詈語畢竟此女どの顔知合ふ中であつて料らぬ面會に何かの話を致した迄遊ぶなど、は思ひも寄らぬ事。夫も事柄も聞かされ無禮至極ナ 武士 ナ

二無禮とは左一言の返りなきに對して腰刀を抜き、武士と云の事も可笑い無禮を仕たら何とする。左一何處迄も傲慢な白痴者其處動くなと腰刀の柄に手を懸けて詰寄れば彼方も應じて詰寄りつゝ己に扱合さんしとたりければ小富は忙て、群を盡し取支れど武士と武士との言上り互に意地をはり弓の選分るべき氣色なく頓て立上つて扱合せ一太刀二太刀打合へば物音に驚いて下から駈來る宿の者共人数多ければ何も皆此有様に打驚き離手を出すものもなかりしに小富は一圖に左一郎に怪我あらせじと氣を急編り隙間考へて二個が擊合ふ刃を事どもせせマア〜待つて妾の云ふ事を今一度聞て下さりませと我身を隔に押し止めたり

● 第廿二回

京都大佛前邊は江戸の橋本町大阪の長町と劣らぬ貧乏暮。幸なき人のしがなくも過兼る日を過し行く浮世の小陸物好な福の神がある逆も滅多な事には寄付ぬ。名に聞ぬたる末町にて道に多きは子供と塵埃。味噌醬油も一文より賣り。一升米を買ふのは先祖代々の釘鍛冶が敵延した屋臺骨とその身代を羨まる、世界逢ふた裏長屋に一

子相傳の膏藥賣が技屋入らせと口よは云へど何時も借金に肩がつかへ首も廻らぬ切ない思ひ。苦しい中にも亦差の段々あればある世とて此處等に多き木賃宿我家の裏に長屋建二疊三疊に間を仕切つて座敷に宛てし一構此に築る多くの人東國者に北國者四國九州と夫々生産は異りながら祭文語輕業師物真似チヨンカレ辻演劇下駄の齒人屋烟管仕替磨砂賣剪刀研自他平等の薄福人有甲斐のない世波に搦て、加へて降續く此頃の五月雨にて出商賣を妨げられ口の乾上る男女誰彼が雨霖も漏次第なる筈にイみ破臺に臥腹這ひながら口々の物語「コウ吉さん大壯降るぢやねへか隣の松ツアん如何だ工場では天道も人を殺すと云ふもんだ「秀さんの言ふてや事ぢやけれど其處が平常の大事な處ぢや。然やさかいお前さんも是から食溜を仕て置なはれ「ハアおみねさんの言はしやる通り違ひない乃公も此後は其積になりますベイ「夫は大きに然うだが江戸ッ見ア錢の顔見ちや然うは行かねヘッナ。然とす〜今日廿五六文得益が多かつたのでソレチヤンと此通りでおますと欠皿に盛りし生節をチヨイと見せながら隣の室に病氣と見ねて鬱々々と生し顔色青ざめた年尙若い一個の男に向ひ「モシ幾造さん壯健な身

体でも梅雨の飛滴を受けたら毒ぢやから其本端に出せと引込で居なされ頼れてゐる着
 物も日和になり次第洗ふて上げやうと思ふて居るけれど此降續。シテ那の綿入は着倒
 したばかりでなく破れた處も六分あるゆゑ單物にすると思ふても多い事綴くらねばな
 らぬけど妾が
 塩梅好う仕て
 上る併し此春
 から今迄の煩
 定めて辛氣に
 思ひなさらう



ナア夫は爾うと今日朝早く伏見へ行た處此頃稻荷の傍へ出て琴を弾く女乞食が死され
 て居ると云ふので忙しい中から見て來ましたが不思議な事もあるもので貴君から聞て
 居る天王山とかで知れん様になつたと云ひなさる様さんの年恰好に好う似て居た上儀

に入れてあつた書付で播州の生産ぢやうですせと聞くより男は打驚き瘦せたる手
 を突き方なげに頭を掻げ「夫でその女は色が白うて三日月眉毛耳朶の傍りに一つの黒
 子がありましたか」「ハイ、妾も恐々見たゆゑ確かり分りませんが何でも以前は由緒ある
 人の娘であらうと評判して居ました」「ヤ、夫ではヒヨツとお嬢さんが落魄て爾ういふ
 哀しい死様をなされたか。去りながら世には似た人も随分あるものなれば確に夫と極
 められ老何は兎もあれ一走りと我を忘れて立んとして忽ヨロ／＼と倒掛り初めて氣づ
 く身の疾堂ツかど其處へ平太張りつ、股を敲いて打嘆き「コリヤマア如何した因果で
 あらう那の山道で取附く賊を斬殺し木の間谷間の嫌ひなく夢中になつて嬢さまの生死
 如何にとお行方捜すその中に爪先蹴かいた所から破傷風の重い煩悩しる心當の方角よ
 嬢様の死骸のなかつたが頼のある所と思ひながらも尋ね歩行くに便さへなく泣かれ
 ぬ苦を救ふて下された表の親方我身に取つては神佛不動の清五郎さんのお蔭にて如
 何やら斯うやら今日頃日此處迄全快の驗は見れたれと尙此通り脚腰叶はせ馴や殺され
 た女乞食が見玉の嬢さま左一日那の御内室か夫かあらぬか實否を察する事だにもならぬ

と云ふは天にも地にも捨てられたのか有に甲斐ない此體と身を指落して男泣か光は傍
 と氣の毒顔に「由ない事を言出して酷い氣を挑しました。世間で病は氣から出ると云
 ひ升ゆるゑア然ないに言はせど何も因果と諦めて養生仕なされ大方那の乞食も人達で
 ありませうわいなア」「イヤ毎も御深切に有難う御座り升私も段々快うなりますから今
 の話が無い處が此三四日も立つたなら一商賣に有附く積りハイ／＼是も清五郎親方の
 お世話です何れ夫迄に氣分の好い折を見て伏見の方を尋ねて見ませうと口には言へど
 腹の中は立つても居ても堪へ切れ老鷹絶ゆる思ひせり

● 第廿三回

城州伏見の稻荷神社は和銅年代の古同國紀伊郡三の家に崇祠り永享十年に今の地に
 移されてより以來宮柱太しく立せ明治維新の後には官幣大社に列せられ恒例の祭日は云
 ふに及ばせ平日逆も參詣の諸人絶間なく鳥居の前なる鍵屋玉屋を初は宿屋支度所軒を
 並べ數々ある入形店は幸右衛門より初りて今に此處の名物となり其外物賣る家の多か
 る中に僅かに圓口一圓半の店構その正面には光輝く具輪金輪を幾箇ともなく打附て抽

斗多き寶筒めさしものを恭しく飾り附て上に四尺より七尺にも近き居合刀三腰許と六尺棒半棒を一本ツ、横へ架けたるは簷に掲げし男女御入齒師とある招牌の反響に出て齒抜屋と名の通つたる香具仲間主人は和田新九郎と呼ぶる、男にて尙新店の仕似せもあらぬか療治頼む客もなく齒磨買ふ人連稀れなれば主人は頃日の梅雨濕にて眞赤に錆た入齒細工の小刀を研ぎながらその傍に齒磨と磨の油の効能書を掲せてある新参の弟子幾藏に打向ひ、新九乃公も今度不動の親方に引立られて此店も出せたが何分困るの毎日雨だ併し貴様は不動親方からの頼みだから乾度一人前の錢得益をさせたいと思ふて居るが。オツと危険いクラ〜と悪い砥石だチヨツと臺原に敷くから其損損じの反故を呉んねエ。其處で話して置くの外ぢやねへが全体此齒抜屋は口に云ふだけが寒水石でその實は房州砂に薄荷を交せた齒磨と安鬘附を土臺にせし發の油とを一包一貝が何文と賣れて行く随分悪うないもので實は掘取と云ふ按摩より尙一位面白い上諸國へ渡りのつく商賣の路用がなくとも氣樂に旅が出来るから乃公も今迄諸國を廻つて来たが子幾藏ハイ〜然うで御座り升かな 新九 江戸では長井京大阪では井上と云ふが通る

もの所々の祭禮法會場に出掛けて行けば得益高は叩分け。併し斯う云つたばかりでは分るまいがソレ高い足駄を穿て三寶の上で居合を抜く親方もアイヤイ左様でと半棒持て受答する奴も得益た金を二つに割るのよ今此で言ふて見リヤ宇治とか大津とかへ泊りかけて行く時は場所を賣る外に宿へ療治に来る客もあつて親方の用が多いから宿賃はアイヤイの坊の割前からするのが規則だ。幾藏 モシ親方夫では刃が附き過ぎやせう九新アイヤ未だ〜だと從容をさう話に味が入つた。も言はせして尙も同じ小刀を研いで居るに幾藏は可笑さ隠しながら 幾藏 時に此間稻荷前で殺された女にア少し心當があつた所病氣のため運うなつて到底間に合はなかつたが親方は定めて見なさつたでせう一体何處の者と云ふ評判ですか 新九 左様サ播州産ださうなが貴様心當があるなら地方の役人へ申出て仮埋の死骸を掘出して見せて貰へば好いワ 幾藏 が私の方には又死骸なんぞと器々しう言はれぬ廉もあるから困るのです 新九 その死骸も死骸だが什商賣の秘密に骨落しと云ふ事があるから序に云ふて置う 幾藏 エ骨落しとは 新九 ナニ大した事でもねへ貴様も是迄見たであらうがアノ法會場か何かで店を出して未だ見物人も

充分集らない時に前に出張つて居て利口氣にない子供を見立て、お前は大社悪い齒
 が有る捨置ては唇を突貫くから御披露のためだ無錢を抜て上やうイヤ／＼痛い事はね
 へ併し痛いなら痛い。痛うなければ痛うないと云なさいと騙し込で白紙に少しの粉糞
 を載せて見物の前に見せ歩行きキリ、と捻る時にソツと用意の欠齒を包込み口に咬へ
 させて程好い時刻を測りソツ此通り抜けましたと手際を見せて客を釣込む種にするの
 たが是から勢込んで齒の講釋を初め玉襪に居合腰。抜ささうにして容易に抜かき刀の
 鯉口ガチヤ／＼と響す中が肝腎の場て此時アイヤイの受替を勇ましく遣つて齒磨を賣
 付ると云ふ段取だサア小刀も是で好いから徐々言立の稽古を初めうと支度なしたる折
 しもあれ表の方俄かに騒しく大勢駈走つて只事ならせ見ぬたれば兩個の驚き聲がけの
 ま、忙しう我家を飛んで出たりけり

● 第廿四回

往來に立騒ぐ人が口々に喧嘩は何處ぢや「イヤ喧嘩でいない大騒さうな」ツン又取
 か騙々取争なら取争で家を片付ねばならぬわいなア「何の夫程の事でもないけれど今

官軍の人達に稻荷山へ追ッ詰られた主従兩個定めて由縁ある武士ならんが當春伏見一
 擧の後 朝廷を怨み奉る仔細あり委信して都に上り忍び／＼に同志を集めて徳川家の
 ため事を舉ぐとなしたるに武運拙く隠謀露顯に及び「コリヤ成程有さうな事ぢやナ」其
 處で家來の男は主人の刃引提げ目に餘る官軍の中に割つて入り斬死おさんせ有様なる
 を袖に縫つて引止め今は早御運の程も是迄と覺ぬ候へば名もなき葉武者の手に掛んよ
 りは潔しう御生害召されよ某は刀の刃の積かん限り敵を支へ頼て冥土のお供仕らんと
 誓地に駈出した勇しさ「ハ、ア丸で軍書讀の口具似ぢやナ。ソリヤ一体何處の話です
 エ私は稻荷山から歸つたが爾な事は少もなく只鳥居際で乞食が喧嘩仕て居たばかり
 であつたせと錫目の合ぬ風説も此へ走來し幾歳は心に思ふ仔細あれば又何かの手掛も
 あらん。事の實否を見んものと親方新九郎を棄置て人の群立つ稻荷前に走附見るに十
 五六人の物貨が十二三歳の是も乞食らしい子供を捕へて「コリヤ新米何處から來たの
 か湧て出たのか」サア此街道で稼ぐなら仲間入をせんかい何せ今迄黙止つて乃公尊の
 邪魔を仕たのだ「其返報に表して仕舞へ書ンでやれと打つやら蹴るやら引指やら罵



い仕方い仕方に手足あしあし傷やつまき今朝けふあしたまで雨あめりし泥どろに塗まれ只たださへ脆弱やわやわさ子供こどもの身みの今いま泣なげも立たぬばかりばかりになり居ゐたれば幾藏きぞうは見るみるに見み兼ねかねて大勢おほしやうを制せいし止とむれどなかくなかくに聞き入れいれま「モシ且また那取なとり支しるらなら仲間なかま入いの酒さけ二三升にさんしょうと夫つま丈だけの肴代さけしろを出だして遣やりなさるか但たゞは此こゝ奴やつを救すくて貰もらひに出でぬ様よう仕して下くだされ「斯こんな素人しんじん乞食こじきが徘徊徘徊いてはツイ人ひとが不憫あはれがつて乃公等おのこうらうに呉くれる處ところを此奴こゝやつの方かたに遣やり升しょうわい「サア且また那酒なさけ買かひなさるか救すくはれるかと言いはれて幾藏きぞう困果こんくわて今朋卷いまともまきには二百兩許にひゃくにやうごほ三左衛門さんざゑもんより預あづかれる金かねのれど元彌生もとやまひが賤用せんように被かされて是迄こゝまで病氣びやうきで難なん滞じ中なかさへも手ても付つざりし位くらいなれば今斯いまこゝる事ことのためために使つかはれま去ま遣はるかその外そとに一文いちもんの持合もちあせるなし是こゝれは難なん義ぎな處ところへ口くちを出だしたと當面たうめんに現あはれて思おもはまるか知らしらましらばま食たべま共どもは一時ひとときにママと笑わらひながら又またもや立た掛かつて以い前ぜんの子供こどもを引ひ連づるか



し、打撃をささんとしたるに、忽ち人掻分て出来る男の頭は三十五六色、顔に赤く、背は左迄高からねど、骨組逞しく、侠客らしき一個の人物、釘貫糸に染めし軍衣に大空の羽織着下したるが、其子供は乃公が助けて遣らふわいと聲掛ながら片手で襦袢先掛け、歩寄つたる顔見るより大勢の乞食共は、軽二盃ヤアコリヤ親方だ親方が助ると言はれるぞと、何れも四方へ散行けば跡見送りて、彼方の侠客は倒れし子供を引起し、侠客コレ小僧よ、悪い奴等の追拂つて遣つたからモ一泣なく、其處で汝は全体何處の者だ形は穢いが、全くの乞食でもなかりさうなお、播州から来たと云ふのか、子供ハイ姉さんを尋ねるために、明石から、侠客ソレで両親は如何したのか、子供、父さん、伏見の戦争母さんは空人に殺されて死ました播州に、母さんが産で置た兄さんもあるさうですが、是は未だ會ふた事もなく、今は私が只一人。尋ねる姉さんは一向知れぬ初姉さんが兵庫に居た時の親方から貰ふた金もありました、夫も暫くの間は無くなりましたので、餘所の門に立つて物を貰ひ、雨の降る時は、籠の下雪の降る日も、菰一枚情ない人には、追立られ三度の食も碌々食へ、其上今日の様に奇責られることの度々で、御座り升と泣じやくりして、物語るを此

方に、尙江然りと立ち居たる幾瀬が、耳に止めて、腕振さながら、獨言「播州に母さんが置た兄さんがある。父さんは伏見で。ハテ不思議な事もあるものだ」と小首傾るに、彼方では、侠客がにじり寄り、侠客フンシテ汝の年は、子供十二で御座り升、侠客名は何と云ふか、子供、清吉と申し升と此問答を聞くよりも幾瀬は若や夫かと、打撃さ一脚二脚、彼方を指して進寄る時、忽ち後に人あつて、貴様何時迄グツ／＼仕て居るのだ、不動の親方が来られたからサア早う歸らないかと促がしたり

● 第廿五回

表は京都、出張の諸大名へ出入して、人足廻を營業とすれど、内實は賭博のあらで、置を渡る祇園町の邊に住居して、侠客と立てらる、熊鷹の角兵衛が形汚穢さ一個の子供を、連れて其處に居合す子分に向ひ、角兵衛、藤吉や此小僧をチヨツと湯屋へ連れて行く、垢を落し、着物も横町の古手屋で買つて着更させて呉れ、藤吉親方宜しう御座り升、カウ小僧悦べ、親方の言つしやる通り、奇麗に仕て遣るぞ、ソウヨ其姉御にもお禮を云ふのだ、サア乃公に眼て来るが、好いと子供を連れて、出行く跡に、女房お玉は不審さうな顔をして、お玉、モシ今の子

供は如何したのかエ人の世話する
 に事欠て汚穢い乞食見た様な角兵
 見た様な所か乞食だッ併し根から
 の乞食でもなく随分見所ある奴

だから
 拾上げ
 たのだ
 お玉成
 程爾う
 聞けば
 賢さう
 な子で
 丁度小



用使に
 好さ、
 うなが
 一体何
 處で拾
 上げて
 お出た
 角兵ウ



ン今伏見から戻る時稻荷の前で大勢の乞食共がアノ小僧を捕へて仲間入をせいと散々
 な目に差せて居たに小僧もなかく負ン氣の有る奴で一生乞食をするのでないから飯
 合殺されても仲間入はせぬと意地張て居る根性が面白いから世話仕て見やうと連れて
 歸つたが名は清吉と云ふて姉を尋ねて播州の明石から當地へ来たもので大分入障ある
 奴だから湯から戻て来たなら納身の上話を聞て見やうと云ふ中お玉は火鉢の隅角を

徳利さし入れ飯盛へ三種三種の肴を並べ酌をしながら折柄梅雨の夕暮ならで又も降出すボロく雨の徒然を慰めんにとや隣に聞ゆる尺八の音に耳引立て、今迄の話は棄てて突然にお玉アノ隣へ此頃入込んだ人は何であらうナ 角兵 オ、誰か来て居るさうだが乃丞は未だ見ない一体如何な風の男だ お玉 武士は武士であるが形状も見すばらしうて何ぢやか迂散臭い男如何見ても浪人には違ひないが罪の家へ何せ又誰なるものか来て居るのか到底尋常の泊客では決てない 角兵 フン爾うかな お玉 夫で時々何氣なう下地よ口を引て見ても只ツイ一寸とした義理合から泊めておますと云ふたぎりで何時も外よ紛らして頼と打明た話し聞かんので何ぢや知らんが氣掛な 角兵 コウ汝も酷い苦勞性だな何にしても脇外の事だから捨て置くが好むいと云ひつゝ、手拭を額を撫で、ア、陣中でツミく冷やかだつたが時候柄で大分暑いから今一層は冷で遣らう何だ尙隣の話か お玉 けぞナ浪人者での随分懲りたぢやないか隣の事と云ふても亦如何な迷惑が掛らうやら知れんせ 角兵 何の汝昔と云へば遠い様だが徳川時代の昔と違つて今は天朝の世の中だから減多の事アない何事も御一新だと笑ひながらに話して居たるその處へ子分の

の藤吉以前の子供を湯屋より送歸りて親方も勘御も見て遣つて下ささいコウ此通りになりやしたと云ふに角兵衛は飲さした猪口を扣へて打點頭さお玉は走寄つて お玉 眞に好い子になつた。此眞物も好う似合ふナア。名は何と云ふた。ソウく清吉であつたナ其處で話も聞きたいがお茶も濁てゐるからマア飯をお食べと膳拵を仕て宛がへば清吉の深切な待遇に 喜涙を溢し手を突て 清吉 イ未だ食たうは御座りませせん親方さんの御膳が濟んでから戴き升 お玉 オ、賢い子ぢやが汝は嘔空腹からうゆふ精を食べるが好いわいなアと進る折しる表の賣戸をグツツリと引明け遠しう駈入る女上口より聲高く親方お宅にお出でますかアノ一今亂暴人が兩人連でと云ひつゝ、胸を接へて鼻を擽ぎアノ一夫で武士ですから抜刀かも知れません何卒一寸来て下さりませ何卒親方が願です後生ですと身体わなく戦慄振ふて居たりける

● 第廿六回

主人角兵衛坐つた儘入口の方を振向て 角兵 オイ小富さん何を周章て居るのだマア上ンなさい 小富 オ、親方お宅ですか何卒早う来て下さりませ家へ居るお人に怪我があつ

てはなりません何卒早う角兵その家に居る人とは誰だか知らねへがお前の頼ならと立上り一刀腰に手挟んでサア行ろかと云ふ顔女房お玉が打眺お玉ッレ今言ふておた舌も乾かぬ中に斯ういふ事が出来たぢやないか何にしても相手は武士であるさうまから子分二三人をと皆迄言はさき角兵エ、何の是しさの事に用意も何も入らねへ高の知れた奴らしいから乃公一個で大丈夫だナニ藤吉汝も来るには及ばねへと云ひつゝ早くも駆出す跡に續て小富はお玉に會釋するさへ勿卒と我家に歸らんとする處を最前より物陰にて様子見て居し清吉が姉さん待てと走り出で袖に縫ッて取留めれば小富は吃驚り仕ながら後振向て小富ヤ、卿は清吉ぢやナと思ひ掛ない面會に暫時は嬉し涙に咽入つて互に辭めなかりしが折柄隣にドン／＼と人の聲合ひ賑ふ音手に取る如く聞ゆれば小富は忽ち氣を引立て、親方には行て貰ふたが氣遣なアノ物音と駈出さんとすれば清吉がコレ姉さん何處へ行きなさる今迄お前を尋ねて夫は／＼言はれぬ程の難儀を仕て来たわいな小富オ、然うであるか爾して母さんはエと云つゝ、耳を引立て、ア、アノ聲は誰か斬られたらしいヨリヤ斯うしては居られぬと又も駈出さんとしながら清吉は第一

杯目に溜て睡ッかど袖に縫り居る顔眺めては様子如何にと問たうもあり去迄を慮しき隣の物音。彼處は指當る危急の場合此處も振放すは忍びぬ業一の身体に二の思ひ弟清吉の手を取つて行かんとしつゝ、又止まりつ上小口にうる／＼するをお玉は見違つてお玉コレ／＼小富ぞん何を仕てぢやエ。コレ小富さんお前の家の事はモ一好い氣遣はない女が行ては手足無却て邪魔になる小富爾うぢやと云ふてお玉イエ怪我を仕てはならぬマアお待ち待つたが好いわいなア。シテ合点の行かぬのその子供お前さん知つて居るのかエと問はれて小富は初て氣づき小富オ、妾とした事が貴女の方に居る此子をばツイ心が急ぐ故何の仔細も話させなんだが實の妾の弟清吉で常々お話し申した通り大藏谷にて別れた儘何の音信も無いゆゑ日夜案じて居たのですがコレお前は如何して此處へと尋ねられて清吉の涙を拭ひ大藏谷にて別れた後母さんは小富その母はんは何處も悪うは無か。シテ又京都へは定めて一緒に來やつたであらうナア清吉イエ／＼其母さんが居られたなら別に難儀は仕ませぬけれど小富エ、清吉アノ母さんのお前を兵庫へ送つて行た辰道一の谷で盗人に殺されて死なしやつたぞエと聞くより小富はア

ツと驚き反かへつて持病の癩に氣を失へば共に倒れて泣入る清吉お玉もろろ心迷
てア、コリヤ大變ぢや酷い事が出来たコレ藤さん早う水を持って来てお呉れオイ、早
う水をエ、何時の間は何處へ行たのかいなア。コレ清吉や此處を離かり扱て居やソレ
く、手を放すと悪いせと獨り焦燥々々氣を揉んで勝手元より柄杓ながら水汲来つて顔
に吹掛け胸を撫で介抱怠りなかりける

● 第廿七回

お玉が甲斐々々しき介抱に小宮の漸々眼を開き弟清吉の顔を見て小宮ソア母さんを殺
した盗人は分つて居るか何處の物ぢや名は分つてあるか 清吉サアその殺した者が分つ
たら淡路屋の叔父さんがお上へ願ふて敵を取つて遣ふけれど殺した者が逃げて仕舞ふて
分らぬゆる仕方がないと言はれましたが母さんの殺された時に行合して死骸を昇て來
て呉た人の話では殺した盗人は内外喜一とか瀬外とかいふ二十三四の者を此名前は言
拔を仕やうとて盗人が自分で言ふたことなれば當にやらぬけれど何でも播州武士には
違ないよ 小宮 エ、内外喜一と瀬外と云ふと藤岡とも聞ゆる様なお、喜一と云ふも左

一、似てあつて播州武士で廿三四とあれば如何やら旦那の名前に似て居るが不慮
な事であればあゝもの。夫で母さんの死骸の。フン、淡路屋さんが何もかも引續て
葬式をも仕て下されたか。妾が身賣をした金も煮ッかり暮れたであらう。母さんに
儀をさせまい逆仕た事が却て雨の種となつて斯ういふ哀しい目を見るは如何した報
か何の因果かと怒きに晴雨の雨天の早暮か、る門口にサアお遣入なされませと主人角兵
衛の聲聞て藤岡左一郎を案内しつ、藤吉も後に跟て入来れば小宮お玉も形を改め二人
の無事な顔を見て喜ぶ中にも小宮は胸撫下し 小宮 是は旦那様御無事で。親方大きに有
難う御座りました爾うして悪者は如何になりました 角平 イヤモ、旦那のお手も持つては
那程の奴等が二人や三人シタバタ仕ても何の事ア無いのだ皆追拂ふてお仕舞なつた
が。旦那如何ぞ此方へ。コレお玉や此旦那はソレ去年お君公様に附て大阪に来て入ら
つしやつて乃公が彼地で段々お引立に預つた器々枝家の御家老藤岡様の御二男だから
御挨拶を申すが好いせ。其處で旦那只今の加賀の武士とか云ふ奴が大坂屋の二階で酒
の漬ぬのと吐したので御座り升か餅し彼奴ア似せ者で金澤の武士ぢやアありません

ソヤヤ今一人附て居た奴が私の顔を見ると尻込して真の朋友の義理合から加勢に来たと腰を下して吐しましたから別に精付ても遣りませぬだが全体彼奴は大佛前の不動の清五郎が子分で此頃伏見街道へ店を出した齒抜屋にて刃のない居合刀は珍様つても人の斬れる刀は分に合はぬ取るに足らない香具商人何と是で那の武士の高も知れるぞは



御座りませんかど云ふに皆や打笑ひ何れ仕舞は金にせんとて来た譯であらうに辛い目に逢ふて歸つたとは氣味の好い話であるが後に又仕返しに来はせぬかと三小富が紫じるを角兵衛は打聞し



て角兵 何の其の心配に及ばねへ恰と隣りから乃公が附て居て指一本觸さす事ぢやねへ
 併し旦那の今も小富さんの家で一寸承まれば諸藩の方々とお交際のために當座へお
 上りになつた譯なれば女子ばかりの處にお出なさるは何とやら外聞も宜くない故更も
 角今日より私の方へお泊りなさる様に云ふてお進申したのだナニサアノ儀武士の處は
 子分等に言付て置さや二度と脚踏の出来ぬの勿論事に寄ては彼奴が化の皮も引割て置
 るから安心仕なさいと聞くより小富は大に悦び厚く禮を言遣る側にお玉が膝進めて夫
 の兩うと最前から聞て居ると此清吉は小富さんの弟であるさうなと云ふに流石の角兵
 衛も是は不思議と打驚き左一郎も共に奇遇を感ぜれば小富は眼をしぼた、き親方アア
 聞て下されませ此子は妾が平常お話し申した弟で母さんの人手に掛つて死ましたさう
 で御坐り升と又も催す涙の雨天にも一陣降る雨にいとゞ哀を添へにける

● 第廿八回

今日圓山の也阿彌樓に酒宴を開ける大一座その人々は兼てより世の形勢を見んためと
 て京都にのぼれる諸藩の武士始の程は武士性質の堅くろしきと浪人附合の餘風も興り

て握拳を膝の上方身返つて肩怒し一寸の語る切口上四角強たる身の取爲し宛がら石と
 金とで造れる人間の寄合へるかと思はれて若その間に聊か摺合ふこともめらば怒り火
 をや出さん事や起らんかと思はれたるもその中撤出す酒肴に 膳和を弾歌ふ三枝の音に
 心蕩けて終には笑さ、めく聲のみして最樂し氣に聞ゆしが此に藤岡左一郎は或る人の
 花咲て蚊屋をた、めば師走かなと云へる句もある如く昔より月日は過ぎく事は成り難
 しと嘆くなるに我身は先頃思掛ない事のため快客角兵衛の許に身を寄せてより兼て風
 説に聞ける處と夫と推する所もあれば兄左内への文通け思止りたれど責ては見玉三
 左衛門へなりとも當地の摸線を知らせ彼方の有線をも聞んものと思案しながら今本
 藩より疑受けて始終我身の舉動を伺はる、程の次第なれば迂濶に音信などせば夫の人
 に禍被らすこともめらんか然れば小富が立替呉れし木屋町大阪屋の宿料も未だ返さ
 ざして立歸んの本意なけれど一旦自から國に赴て様子を探り見んものか如何はせんと
 思ふ中偶と風邪の心地にて打臥したるが次第に重りて時疫とも云ふべき程の症となり
 て苦しき中に三伏の暑き日を過し漸やく涼風の立つ頃より快氣の微見ぬしも全く牀を



離れしは冬の初に
て夏以来凡そ五ヶ
月許を空しく費したればその心中の憤懣かしの思
はれたるが之に引變て 朝廷御親政の光景の遠く
ばかりに歩を進め軍威も次第に輝き兼て慶喜公の

旨又違ふて上野に籠籠れる賊共を討平け續て徳川の領分を賤遠奥羽の地にて七十万石
を賜ひ後又徳川の諸臣を撫安せらる、旨をも示されたれば歸順するもの引も切らざし
て尙奥州出羽に 朝廷に願はざる 輩多かりしも是逆今は 勢差け根強く敵對した
る會津の藩も九月廿三日に城を開て降伏し日ならせして仙臺南部庄内なども同じく降
参し十月十三日 天皇東京に御臨幸あり維新の大業此に其基を固めたれば今は是迄集
れる藩々の諸士も多く國許に引取る事となりしに就けて其中の誰彼が發起にて離別の
盃 汲んとて斯くは今日圓山にて酒宴を開けるなれば左一郎も或る人の勸にて病
搦句の元氣も充分本復せされど今迄 交結べる人の此を去ると云ふに坐る名義惜き心
遣するにぞ勉めて此席に出でたれど熱々我上を思廻せば人々が故郷に歸る 喜に引變
て家あるも歸り難くその身の安危さへも定まらねば何となく氣分浮立を兎角指解向さ
名に負ふ圓山の景色も眼に入らき處秋さ迄遊べたる珍味佳肴も口に甘からぬ容子なり
しが斯る中に時刻次第に移り此二三日薄つすりと色づける庭の楓に夕日照映る頃後れ
て來れる一個の藝者あり左一郎よりは四五人隔てし客の傍に座したるを左一郎ハその

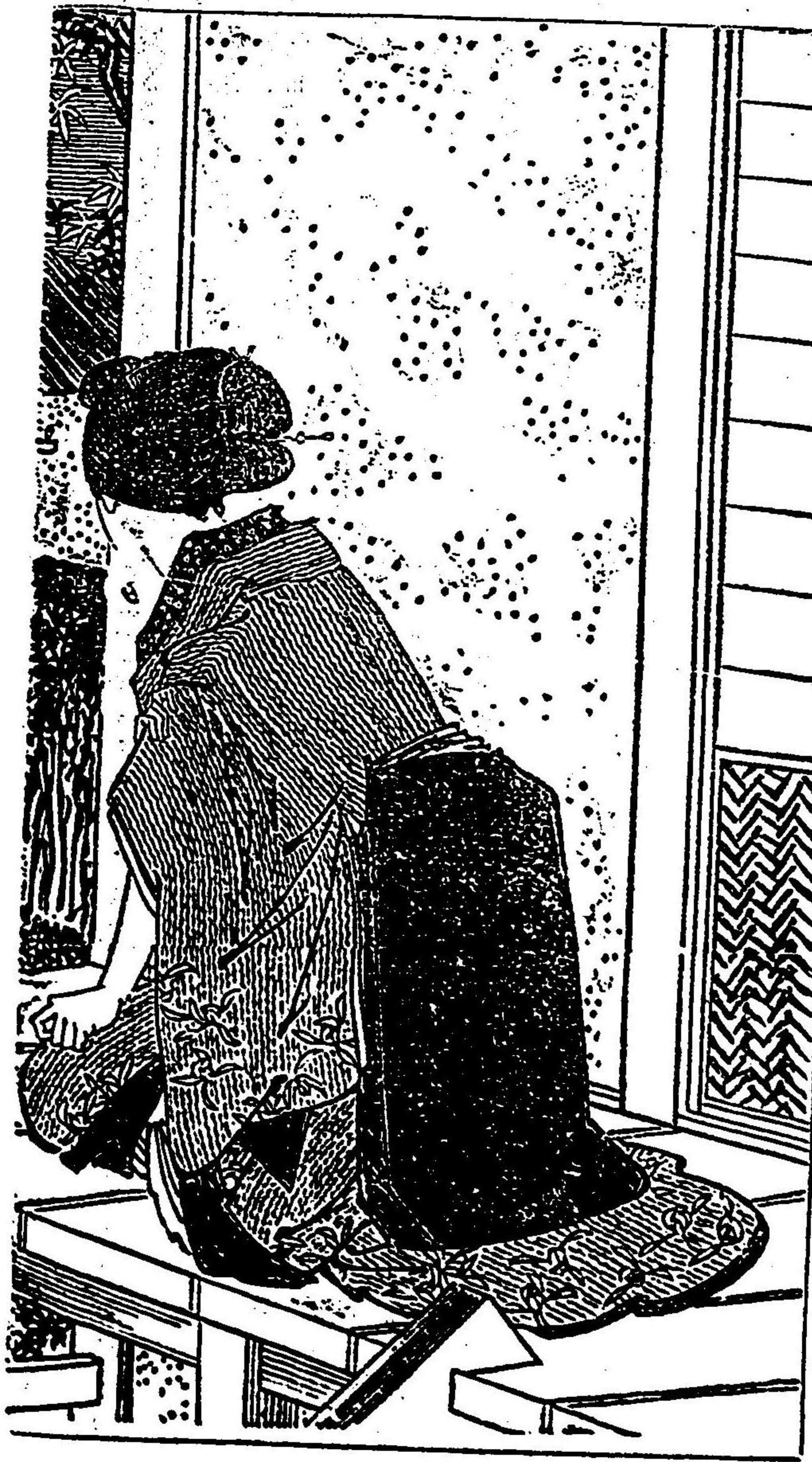
顔見るより如何に仕たるか人目に立つ遙眺め入り幾々我を忘れしかと思はれしに是は
又先程より左一郎の方をのみ見護り居たる藝者小富此有様に不善を抱き舞く三味線も
調亂れ心の根じめ動搖さて果は人に物言はる、も答せき只茫然として居たりける

● 第廿九回

座敷は今しる燭を入れ一際華やかに闇ひて冬の夕とは見ぬざるに獨り左一郎は裏に顔
す胸の雲。時雨催す空打眺め流石人々に先立ち歸るも不興ならんと尙事切らぬ難先よ
り京都の町々を見下して暫らく眼を慰め頓て便所に赴て元の座敷へ歸んとて長き廊
下を徐々歩めるに向に不ひ藝妓小富使方は未だ口を開かねど左一郎は先聲掛て左一
、小富か最前より顔へ見たれど小富サア羨み此へ貴郎のお出の初めから知つて居まし
たが故と知らぬ顔夫は爾うと今日は如何やら御酒も碌に飲らせ御氣分も淫かぬ様子未
だお身体が充分好らありまへんのかエ 左一 イヤ身体はモ一大丈夫だ 小富 爾なら安心
しましたが先刻からアノ妓の顔ばかり見て居なかつたは 左一 エ。アノ妓とは小富ソレ
後れて出て来て柱の傍にと辭に力を入れ少し眉を引立て、左一郎の面見諦めその後未

だ言出さき此方も打明け難い仔細あるか夫はとばかりに行詰り迷霧さうに見ぬけるが
斯る折しむ片脇よりオ、左一郎さまか良人さまかと不意に聲掛け近寄るものあれば雨
個がハツと驚く中にも小富は逸早くその顔見て小富 コレ誰かと思ふたら小富さんか前
此旦那にお馴染かエ。サア何處で馴染か知らんけれど妾が話を仕て居る中へ蘇から棒
の出過た挨拶チツト遠慮を仕なはれと尻目反してボンと跳ねナア旦那と左一郎を見返
る折柄座敷より小富さんくんと仲居の呼ぶ聲頼りなればエ、折の悪いと云ひつゝ、も心
殘して走て行く跡に左一郎は小雛に向ひオ、彌生どのかと呼掛たるに小雛は飛立つば
かりに嬉しけれど我身の上を思ふて見れば藝妓姿の恥しさ何と言譯せうやらと兎や角
胸に考へながら腕さの涙露車小雛は坐ろに袖濡らして小雛 モシ旦那さまお聞なまつて
下さりませ此春父上の情にて良人を尋ねて此地へ参り升途中盜賊のため伴に連れたる
藝藏と離散れ妾の恐しい谷へ落しましたが不思議にも生茂つた樹の枝に受留られて身体
に恙なかつたを 幸なりと喜んだは不幸の本と語りも敢へぬに又た座敷より小雛さん
くと忙しい呼聲に聲方涙押拭ふて駈行く小雛の跡見送り左一郎がホツと一息吐く間

もなく以前のいぜん小富が走來はしりて小富こぶモシ今も蔭かげで様子ようすを聞きて居ると、ノ小雛こひなとは今日こんにち此頃このころの馴染なじみではあさ、うながアレでは餘所あまへ氣きが散ちつて最前さいぜんから落着おちつきぬ様子ようすの見みぬたも無な



座ざではありませんと
街まち云いひも切きらぬに此こ一座いざの
老人らうじん棟肥むねこ前某まへ藩はんの何某なにがコリヤ、小富こぶは何處いづこへ行いた早く來きて用もちせぬか小富こぶ々々々々と呼よび立てたてに心こゝろ残のこり限りなけれど不性ふじやう無性むじやうに返へん辭じして彼方あつちをさして立た行いけば左ひだり一處いちも今は一ひとたひ座敷ざしきへ歸かへらんと思おもひながら彌生やよいひの小雛こひなが身みの上氣うへに掛かり今いま一度いちど送おくふて朝あさは

後日にするも荒方なりと仔細を聞かん再び出で、来よかしと背後側から庭の邊を東西歩み居たるに此時日は没果て木立の下より暗くなり庭の眺めも草地判然り分らぬなりしが小雛は又もや座敷の間合見計ひ密と外して出来り左一郎の前に走りつき小雛今も話し仕掛つた妻が事は措置ても申さにならぬか國の大變兄上左内様には非業な御最期と聞くより左一郎はアツとばかりに仰天し暫らく酔ふまかりけり

● 第三十回

斬つた劉つたとの大闘争より辻合の端鏡合迄一擲に擲取つて夫々に袴を附るから名に呼れたる熊鷹角兵衛弱を扶て強を折く腕前にも骰子の目ばかりは力に能はき今日も手合の好らぬよや子分の藤吉賭場より走歸り藤吉姉貴如何いふものか親方の目が立たを最前から儘の間に二百兩餘り飛んで仕舞ましたせよ玉オ、夫ならその積をするが併し爾ん悪運命の時にや早く手を退く方が好さ、うなに藤吉サア私も然う思ふて段々親方を諷めましたが何分相手が不動の清五郎ゆる退に退かれぬ場だクツクせきと早う行かんかと大さな眼玉を貰つたのですから如何か一つ工面をと頭接々頼むが如く

言ふ顔見てお玉は打笑ひれ玉エ、勝も負るも時の運づく然んば意氣張なら仕方がない。何もお前の貰ふ金ぢやなし氣兼ねしう言いでるサツサと持て行くが好いと軍管の抽斗彼地此地より接集め紙に包んで百兩許サア是をと藤吉の前にザツクッ投出してお玉夫で若足らぬなら正では無いが着類から家財々々を枉ていもモ一や二百の工面するから必ら親方が氣の引ける様な事は言ふて呉なと聞くより藤吉は感心し藤吉流石は姉貴ソレ聞て私迄大丈夫な氣持になりやしたお玉餘計な事を云はきに藤吉イヤ行て來ませうわいと金懐に捻込で出行く跡を見送つてお玉は最前より奥の一室に小首領け思案に暮れたる藤岡左一郎の傍に行きお玉モシ旦那爾う鬱陶でばかり御坐つては病氣が出ませうから幸ひ今日の好日和清吉連て高尾の紅葉でも御見物にお出でなさつては如何で御座り升。實は此狭い家では定めてお氣が詰らうと思ひ升ので早う程好いお家を持へやうと兼々角兵衛も心配致して居升れど此頃は續て手合が悪ふてツイ延引をと言を打消し左一郎は此方を見て左一何のく某の思案を仕て居るハ左様な事では御座らぬから決して御心配は止め下さい夫に就ては打明てお話せねば分らぬが此程圖山

男は嫌で御座んすゆゑ暇下されサア暇状書てお呉れ。今も彼室で聞て居るご様子其中

百廿四



に存せぬと以前は彌生
と申してお玉ハア成
程左様で。是はマア且

那と仕た事が何せ早う仰しやらぬ。隣の小宮さんはあつてもソリヤ又以前からのお馴
染なら。イエ違ひ升か。何の貴君お隠しなさるには及びません品に因つたら夫の夫で
話の附け様ありませうから必らき心にお懸けなさるな何を云ふても身体が大切に御

百廿五

座り升ぬいナ 左一 是は又迷惑な推察だ何が今申したは左様な浮々した事での御座らぬ
 實ハその彌生と云ふは國に残した某の妻であるゆゑ是はと雖も人目を忍び小座にて仔細を聞かんと致した處を小富或ひは仲居等に妨げられて兎角委しき話も出来き其中又折を見て國元の騒動兄の不幸其上家老の津島權右衛門の悴權之丞と用人の山田大郎兵衛とが當地に来て彌生が今の身分を幸ひ家老風を吹かし無理押付に權之丞の心に從はさん積なれど彼は少しも遠慮なく恥を興へて取合はぬと云ふ迄の話を開き貸その後を問はんとする間に一座の退散其上彌生は薩摩の藩士何某が手を引立て、何處へやら連行て今の住居も聞かざれば尋て見んにもその先分らき勿論小富は彼を知つて居れど是ハ又少し憚る所もあればと云ひながら煙草吸つけ火鉢の縁にかゝりたる炭埃を額指の腹にて拭落しお玉も早香込の推量進に少し間の題ふて兩人暫く静なかりとが忽ち表の賣戸をクハチリと引開け子分の藤吉が姉貴又ですが金の工面をと懇請として走入りぬ

● 第卅一 回

祇園邊の會席料理屋の奥座敷に津島權之丞と酒汲交し居る山田六郎兵衛惣管取延べ此を立出んとする藝妓の裾を押へ六郎 コソ小離ではない見玉三左衛門どの、御島女彌生どのとも言はる、身が爲る業に事を欠き難でも彼でも錢づくで酒の相手よ慰まる、藝妓とは情ない斯う云へば何とやら耻を興へるやうなれど見玉氏とは同役の某。三左衛門どののは相變らき國で列屹と仕て居らる、にその娘御が箇様な賤しい勤をするを聞かれたなら嘔歎かる、事ならんとその心を察するに就け此間からも段々口を利く譯であれば爾う誤切つて歸せどもマア座に着ても好さ、うなむのだ 小離 ハイ夫は大きに御深切有難う。併し餘り御深切過て氣が有りませんからか斷り申升とゾ、ケリ云ふて彌生拂ひその儘歸行んとすれば六郎兵衛は額に青筋立て 六郎 オ、斯う迄言ふても聞入ぬとあれば仕方ない話だがその代りには此春以來脱走同僚國を飛出し如何やら當地に潜て居て主君より疑か、つた左一郎の跡を追ひ淫奔を盡し身を落して親の名前は未だ思か主君の御外聞にも係る所業表向にて國元へ引戻さうか 小離 エー夫は 六郎 又一つには左一郎の行方詮議には大事の糸口如何でも其分にはさし澄けぬ身体だが其處は又蒙て

む云ふ通り此權之丞どのが
 望の通りに身を任さば何か
 の事も障りなう執計ひ一生
 涯安樂に御家老の奥様で過
 せる上父御のためにも大き
 き幸福。何だどエ左一郎と
 は婚禮を仕たと云ふ迄にて
 名ばかりの夫婦夫も今の離
 縁の中行方も何も知れぬと
 か。オ、夫なら尙更の事で
 此間通天にて料らせ權之丞
 どの、目に留つたも盡ぬ縁
 是が只ツイ一通りに顔知合



ふたと云ふではなし匂い頃から同じ土地ア、ソレ何とかしてあをかりしより思ひ染て
 さとの歌もあり今此庭に照て居る楓葉を壁に引けば未だ此通り色づかぬ頃より胸を焦
 された切ない思ひ。ナア小雛彌生どのモ一是迄言つたら得心が行たであらう合點かど
 辭巧みに説つくれば小雛は其處に平伏して只會潜々と泣くばかり暫らく答もなさゞり
 しが願て涙拭ふて襟掻合しつ、小雛成程お諭の處は一々分つてあり升が只分らぬは貴

君方の御心底サア何も其様にお面色を變なさるにも及びません只今も權之丞様に従ふのが身の爲ぢや父三左衛門の幸福ぢやと何も歎かぬ爲倒しに仰しやるが畢竟言へば貴君の方の爲ばかり妾に取つての不爲だらけ夫で又若妾が御意に従ねば表向に連舞るの左一郎の行方穿議に就て其分にさし置ぬのと聞たうもない恐喝辭ハイ妾も見玉三左衛門の娘で御座り升爾ンな辻褫合はぬ話合點仕ませぬぞエ。夫程又同役の好と主君のお爲を思ふ忠義な心があるならば何せ權之丞様に従ふとさけお疑の掛つて居る左一郎に由縁ある連其分にさし置かれぬ程の妾をば其分にさし置いて障りなう執計ふと言ひなさるか異にマア淺蕪な。ハイ外の座敷が急しいからモ御免をと再び立んとする所を六郎兵衛は立しも遣らだ。六郎ソリヤならぬイヤ爾うの脱けさ、ない最前からも聞て居ればッペコと小間尺れた言事なか〜運者な口であるが全体汝の身体は賣物だサア賣物だから金で買ふ彌々此方の云ふ事を聞かぬとなれば仕方がない否でも應でも金づくめ落籍にするから然う思へと金の力を精につさ一本グツと極められて洗石の小籠も夫はとばかりに行詰り容易に返す辭も出さりけり

● 第卅二回

神徳を仰で此に北野なる天満宮の境内には常に参詣の諸人を目當に様々の賣物店など出し列ねて神の餘光で世を渡るもの、多かるよ今日は別て二十五日の祭日連境内の片隅に一構の場所を取て三十餘の男が黒木綿の紋付に縮緬の袴穿き襷袢にて長き居合刀を腰にさし高下駄穿て三重の三寶に片足乗せ右の手に扇を把つて前に躊躇る若者に打向ひ「ヤイ〜若三餘り休んで居ては和田新九郎は齒磨を賣ぬのか此境内へ遊にでも来たのか但は大刀の齒乾にでも来たかど仰しやる 若三 アイヤイ左様で御座い 新九 此新九郎は遊びにも来ない齒乾にも来ない併し太刀は居合の一腰を抜て見せるために飾り矢張齒磨を賣に来た 若三 サヨサヨ左様で御座い 新九 からか客様方へ梅香散齋齒磨の功能をお話申さうと云ひつ、エ〜ンと暖拂ひして「扱此梅香散は我師匠阿蘭陀の大醫より傳授を受けた法劑にて吟じに吟じた藥 齒磨 若三 アイヤイ左様で御座い 新九 第一齒を白くすること雪水晶の如く第二には動く齒を固め第三には口中の惡臭を去る 若三 サヨサヨ左様で御座い 新九 平常此齒磨を遣へば一百過た老人でも豆が咬める 若三ア

イヤ親方が客様より其證據あるかと仰しやる 新九 成程其お疑めあらう然らばその疑を



暗して見せう

コリヤ〜若

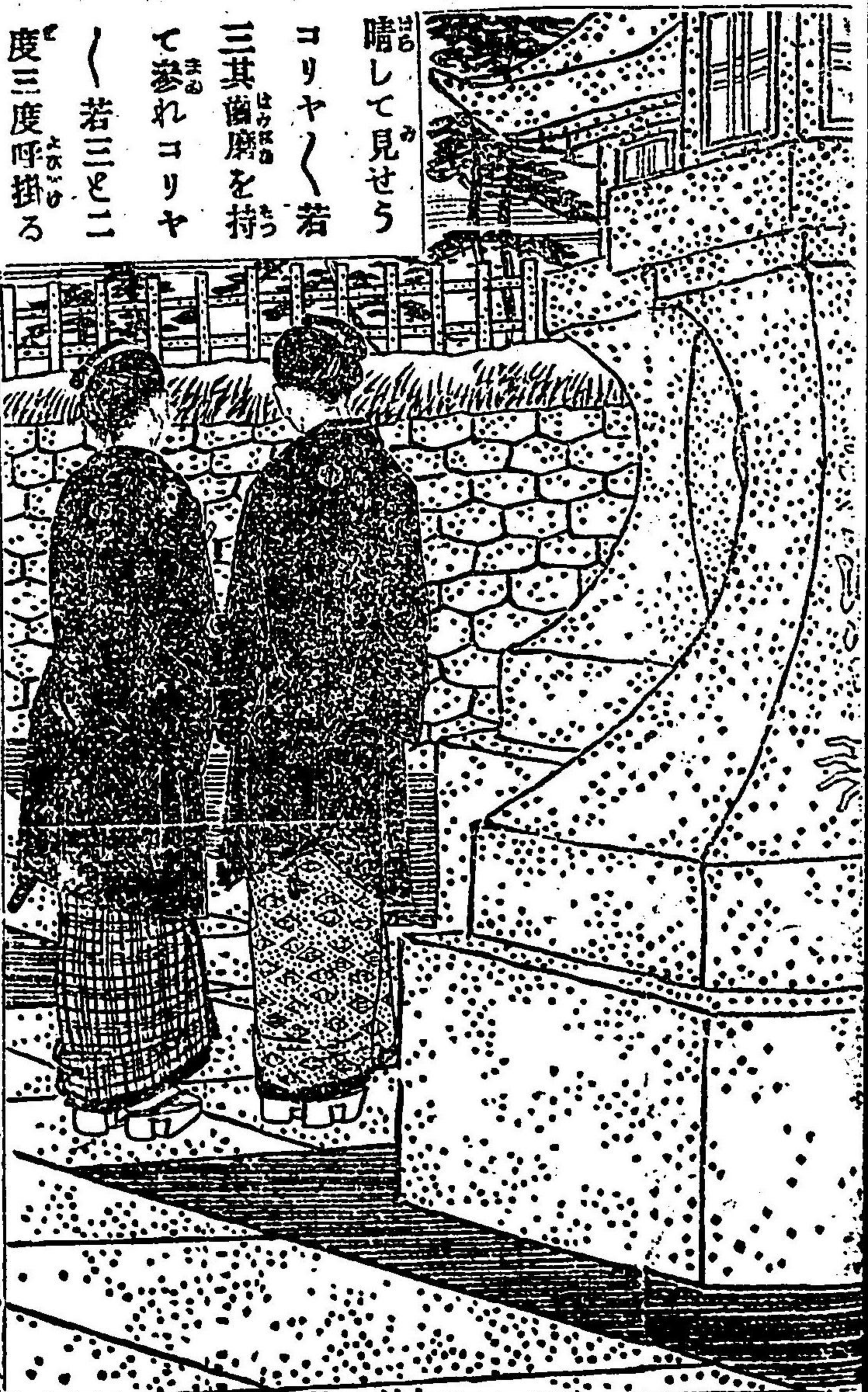
三其齒磨を持

て参れコリヤ

〜若三と二

度三度呼掛る

に此時若三は如何にしたらるか躊躇つた體勢向いて前を圍める見物の隙間より遙か彼方



を眺め入りその中ツロく、腮と共に腰延し終には其處に立上り親方の言ふ所も耳に止
 まアハヤ駈出さんとしたりければ親方の一際聲高くコリヤヤ、若三と呼掛しに初めて
 氣着きアイヤ左様で御座いと間を外したる返答に流石の親方も拍子失ひグツと辭に行
 詰り刀の鯉口抜指急しく暫らくガチヤ、氣合を調へ漸やくよして口を開き「コリヤ
 く若三齒磨ばかりを賣て居てはアノ新九郎は居合を好う抜まい矢張太刀は過乾と思
 はれやう 若三 アイヤイ左様で御座い 新九郎 此で一腰二腰お眼に掛やうコレ御覽なさい此
 刀は柄鞘かけて七尺八寸野郎の長より二尺も長い夫を抜が居合の早業と云つ、三寶に
 乗移て腰を据ゑる」坐つて抜が達磨返し。立て抜が野中の杉ノ口に任せて喋り居るに若
 三の又もや脇見仕出して頓て親方がコリヤヤと呼にも構はせツ、と延上りしが忽ち
 「ヤ、彼は彌津島山田此見遣してはと打點頭さ駈出す機に親方が太刀の柄に手を掛て
 抜んとなしたる土臺の三寶蹴飛ばせば何かは以て堪るべき上なる親方は眞ッ逆様見事に
 轉々杉倒し大地の小石を向齒を欠ぎ刀の鞘で脾腹打ち聲も得立てき平伏りたる不慮の
 騒に群集ふたる多くの見物笑ふもあれば誹るもありて驟く間に己が様々散行さしに機

遣ハ又斯る粗忽も見返るに暇なさや今しも參詣濟して社の後へふらく行掛る二個の
 武士の後追ふて走出す向ふにスツクと立たる一個の男夢中になれる若三が胸元チヨイ
 と手を押して「コリヤ幾造ヤイ汝一休何したのだ今み見て居りや新九は轉んだぢや
 ねへか 幾造 ヤア不動の親方。チヨく一寸向ふに 清五 何が一寸だ 幾造 イエチヨツと其
 處を御免なさい大變な奴を見附けイヤ大變な用が出来たので 清五 イヤ通さない新九に
 何ぞ意趣でも出来て打倒したか但し外に縁由あるかその様子が知れれば放さない袖
 を確つかと引留めたり

● 第卅三回

是も同じ日北野天神の給馬堂にて牀几に腰掛け茶を啜る兩個の武士ありしを且見斯う
 見て頓てその片脇へ歩寄りたる一個の男オ、山田の旦那様と聲掛けたれば武士は不
 識さうに此方の男の顔熟々と眺むるに身の丈高くして肉太り若類の有様にては全く使
 客など、立られるものと見ゆたれど頭から顔一面濡に爛れしか火に焼れしか髪
 毛處々剝取れて眉毛も半消失せ二眼と見らる、相ならねば首片向て「成程拙者山田六郎兵

衛であれど長らく國に居て京都へ出るも久々なれば當地に知る人とはなない筈だがと
 訝るを此方の男の腰屈めつ、お見忘る御九元私は見玉様に御奉公申した忠誠で御座り
 升と聞て六郎兵衛は暫く考へ忽ち撲と膝打つて六郎オ
 、爾う聞けば二十年許の昔となつた様だが確か女の一



條で忠誠 見玉様を脱出して伏見へ参り名前改めてお屋敷方の人足廻しを家業として月

日を送るその中に此正月戦争の折中つた流丸は左したる事も御座りませなんだが火事の烟に取巻れて御覽の如き大火傷夫から此方へ妻子の行方も知れなくなり今は京都の大佛前に住居致して居升。へいへい見玉様に居りました時分には折々お使にも参りましてへい貴君様にも大分お頭がへいへいお變りになりました。イヤ私も偶々とした心得違から國元で人の女房を盗出したり何かを致して今から考へ升と馬鹿氣た事で御座りました夫は爾うとお國の御様子は何で。見玉の旦那様の御機嫌宜しう御座り升かと尋ぬる辞を熱々聽て六郎兵衛は何か思案して六郎左様サ別に一体には變りないが變つたは貴様も知つて居る藤岡一家官軍を背いた罪にて主人左内は鼻首に掛られその弟の左一郎と云ふは當地へ来て潜居る由。處が貴様の主人三左衛門の娘彌生と申がその左一郎を慕ふて家を出られたので三左衛門殿の歎は一方ならき實は一家老津島氏の子息權之丞殿へ婚儀の約束もある中なれば此度上京したを幸ひに拙者が利害を説いて國許へ連歸り津島氏へ嫁づかせる積なるに此より一の邪魔があつて困却致し居るのだと聞くより清五郎進寄りて清五 夫はへい様々の事が出来ましたがそのお嬢さまは何處に居ら

れて又邪魔するどア何奴で御座り升私も此地では不動の清五郎と少しは人にも知られ子分の四五丁名もあり升ゆゑ左一郎とは如何な人か知りませんが充分適合つてエ、親御の御承知ない嬢さまを留て置くなど、は道理に叶とない事で御座り升。ナニその左一郎と云ふ人の方には居られるのでないと仰つしやるか夫なら猶の事仮令相手が武士であらうが公家であらうが此清五郎昔の不埒を詫旁 命に掛ても美事に取戻してお手渡を致し升。へいへい本當にお嬢様一生の浮沈にも係ることで御座り升。併し只今は何處にお出なされ升か 六郎 サアその彌生どののは祇園町で藝妓勤。名の小雛と云つて居なざるが定めて貴様も承知であらう熊鷹の角兵衛と云ふ奴が夫の左一郎に由縁でもある故か兎角に尻へ廻つて落籍の相談を邪魔仕をるのだ 清五 成程熊鷹で御座り升か彼奴なれを祇園町に羽振を利かして居り升から一寸親方の自由にもさせ升まいが其處は又如何とも致して 六郎 オ、貴様美事も取る算段があるかな 清五 イヤ立派に落籍の話をつけませうと云ふに津島山田の兩人は一方ならき打喜び尙委しい話も仕たければと清五郎を伴ふて茶店立出で近邊の料理屋さして赴きぬ

熊鷹の角兵衛我家の一室で不動の清五郎に打向ひ 角兵衛 成程此間の百兩は二三日と云ふて借たに違ひねへから疾くに戻す筈であれど貴様も知つて居る通り先度から何處の益でも摺つてばかり居て乃公が物は勿論媽アの着類より家財迄残らぬ打枉げて仕舞つた揚句だから誠に濟ねへが今と云つては困る此暫らく待て呉れ 清五 コウく角兵衛ッリヤ汝何を云ふのだ是が部屋ッ子とか尋常の者なら格別だが子分の三四十人もあつて熊鷹とか何とか言はれる男にア似合はない世高の知れた百兩位の金を待て呉れも何もあるものか 角兵衛 併し實に工面仕盡した上の事だから如何にも出来ねへから何とか此は少しの猶豫を仕て貰ひたい一生の頼だ 清五 夫では如何しても出来なにかフン出来ないとあれば待て遣らう併しその代り乃公の頼む事も聞いて貰ひたいオ、合點だと爾うなければならぬ筈。處で乃公も不動の清五郎が口へ出してから聴かぬと云はれちや男が立ないから是非聞入て貰ひたいが外でもない此祇園町で新顔ながら花走子の小雛の身受を乃公に譲つて呉れコレサ別に驚く程の事だねへ實は乃公が出入の旦那先にて運ての懸

とだ 此はふ云いと頼む



望める抱主の方へ渡て言込ん 見ると兼て貴様より話があつたとかを決して外へは遣れぬとの事サ、其處は貴様の昨一辭一つで如何ともならうぢやねへかのコレ角兵衛

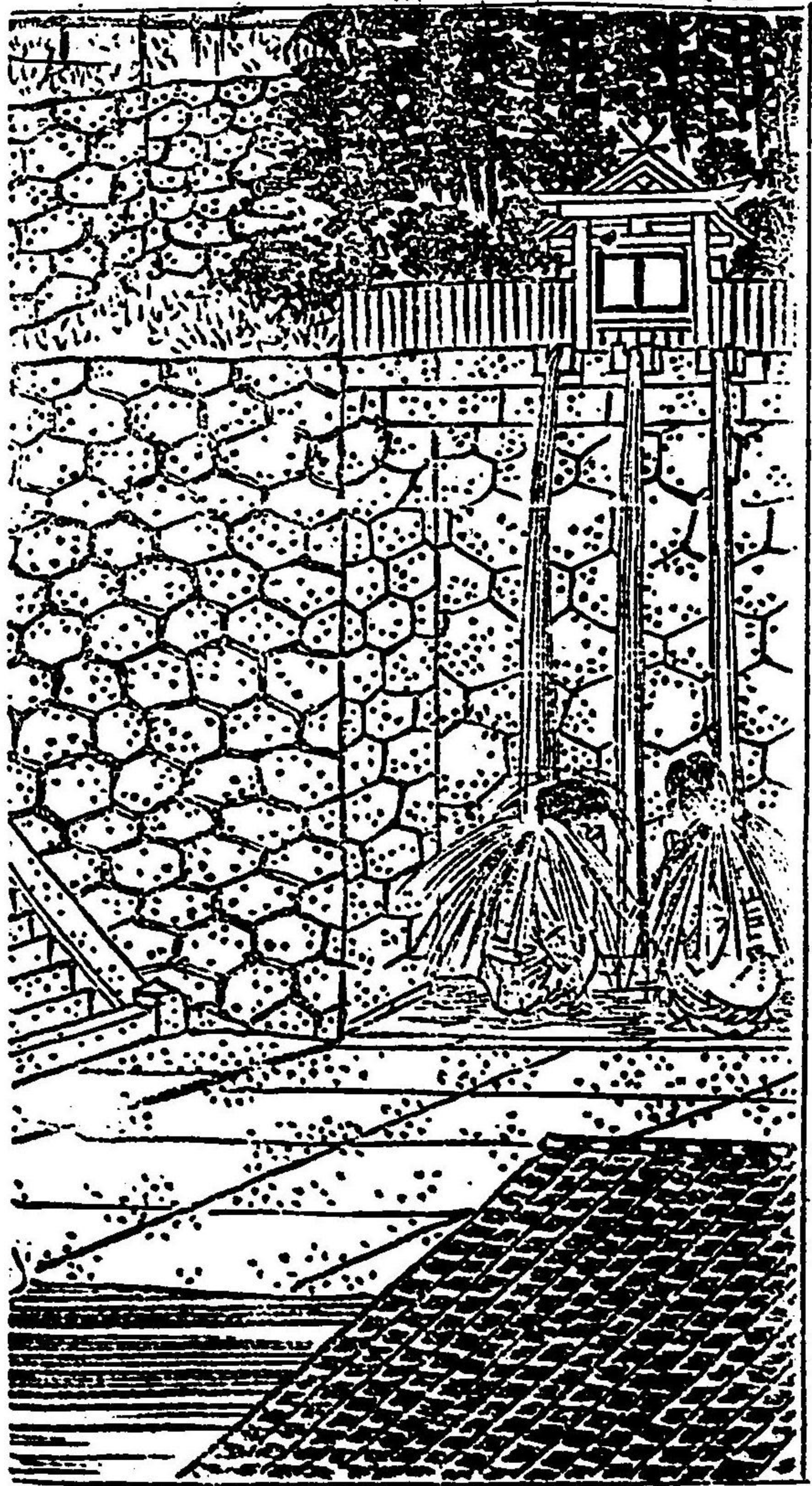
云はれて此方は胸を抱き夫はとばかりに奮闘の色見わたれば清五郎は膝摺寄せて少し
 聲高く清五郎。何だ不呑込な顔をして。今言つた所の承知出来ぬのか。角兵衛。イヤ不承
 知と云ふ譯ぢやア無いけれど。清五郎。夫ぢやア承知か。角兵衛。サア外の話でありや斯うな事ア
 言はぬへ筈だが今の話の如何も困つた事があつて。清五郎。何だどエ。角兵衛。清五郎マア斯うだ
 から聞て呉れ。アノ小離にや前方より藤岡左一郎と云ふ祝言迄濟んだ男の有る身で畢
 竟盜賊のために賣れて藝妓になつた事だから仮令外へ身受を仕た所が納りさうな筈も
 無へせ。其處で又乃公の方では其藤岡と云ふの大事の旦那で如何あらうが斯めらうが
 屹度添ひして上げ升と受合つた上前にも云つた通りの二人の中ゆゑ乃公が今更手を選
 た連他へ落籍される様な譯にや行ぬから。清五郎。コウく何を勝手な事ばかり並べるのだ
 コリヤ角兵衛成る話なら誰でもするがならぬ話を受合ふた此清五郎だ併し否と吐しや
 無理にもとは云はぬへがその代りに百兩の金今此で請取らうから奇麗に戻して呉れ。
 サアこの返答は如何ぞエ、尙グツくとして思案を極めぬへのか如何だくと追詰ら
 れて角兵衛は拳を握り齒を喰ひばりて胸も寸断る、ばかりの切ない思ひ熱き汗をば流

しながら詮方なければ頭を下げて。角兵衛。成程貴様の言ふのも尤だが乃公は又乃公で一人
 の胸にも極め兼ねる所があるゆゑ長うとは云はぬへ三日丈。清五郎。オ、日延をせいか。爾
 う云やア譯が分つてあるから遣も仕やうが其上はモ一幾等頼んでも待ぬぞよ。角兵衛。コリ
 ヤ有難い。念にも何も及ばぬへと俠客と俠客が番ふ辭を最前より隣家の小宮が我家の
 様立出で、鼻つく様な狭い庭にも時知顔に照る楓葉の散落る風情を眺めながら聞く
 とおなじしに洩聞て扱はアノ小離と云ふのは藤岡の旦那と祝言の盃さへも濟んだ中で親
 方が受合ふて夫婦にする積と見ゆるが今又日延をするとか云ふ様に関わだが一体如何
 な塩梅かコリヤ氣の揉た事オ、爾うぢや何は兎もあれ親方に委細を聞て見んと氣の上
 釣つて脚元とつかはシヤラ放解けたる帯引しめも取せして角兵衛が入口指して駈込ぬ

● 第卅五回

尙夜半八つと云ふにはあらぬとも冬の夜の時雨さへ折々降出したれば左しも都に名高
 き清水寺の邊も人の往來途絶果て幽かに光る佛前の燈明コウくと吹渡る樹々の風男
 さまへも後見らる、物凄さ折なるに若き女が一個の子供を引連れて稍暫らく本堂の前に

障踊り何事か頻りに祈願を籠め頓て舞臺の脇の阪を降りながら女コレ清吉や舞踊々々の参詣でお前は風邪を感たらしいから今夜は御灘に打れるのを止めてお呉れ 清吉 イエ
く何み風邪を感て居るのでいありませんから一緒に打れ升此間も熊鷹の親方がお前



は小宮
と云ふ
姉さん
もある
けれど
も女の
事なれ
ば散ら
つのは
お前の



役と思ふて確かりせにやならんを云ふてあつた因つて籠に打れるが寒い何のとは
思ひませんと聞くより小宮は涙催し 小宮 オ、好ら言やつた賢い子ぢや夫程の必持です

ければ佛も神も願を聞て下される事のない夫に就ても分らぬは藤岡の旦那初め大藏谷
 で助られた時から慈悲深い情しいお人と思詰めたが誤か何にしてもアノお方に限つて
 悪い心があると思ぬ故當地でお前に逢ふた時に母さんを殺したのけ内外とか淵外とか
 云て年頃なり土地なり又當地へお出た時候を聞て見ると恰ど旦那に似てあれど夫を爾
 ではあるまいと別に疑むせなんだが此頃になつてから俄に余の方は振向もせせ木屋町
 での恩を忘れ只小雛奴の事のみを思ふて居なさる素振りが見おてその上隣りの親方迄
 が小雛の身受をして旦那に添せるの何のと余を皮に仕た話を聞たので腹立紛にツイ言
 はいでも好い事を言ふたもの、何にも知らぬお前迄を余の方へ戻されたは何ぞ内証事
 でも告口するかと氣を廻して仕られたのであらうが彼と云ひ是と云ひ思廻せば廻す程
 疑はしいは藤岡の旦那併し難な證據のない事ゆゑ彌旦那を敵とも極められせ此の處は
 佛の方向卒敵が明白に分つて母さんの怨と返すことの出来る様サアお唱を仕て願ふが
 好いと云ひつ、帶引放解さ上着脱捨て音羽の籠の白絲掛て落くだるその中へ姉弟手を
 引合ふて立入れば颯と飛散る水烟立つ間もあらせき兩個の身体は寒氣に堪せわなく

戦慄へ齒の根も合ねど一心不乱に眼を鎖て普門品を唱へつ、南無大慈大悲の觀世音何
 卒母の敵を知らしめ玉へ南無觀世音大菩薩と祈願を籠めしに忽ち小富が耳元に響めつ
 て仇敵の正しく藤岡左一郎なりと云ふものあるに打驚き澄と思ふて眼を見開けば遠へ
 近づく怪しの者共暗を透して此方を伺ひ「オ、コリヤ思ふたよりも代呂物が好さうだ
 ど」着類剣取つた其上で觀音様の舟後光「オ、此に由縁の念佛誦」ドリヤ結縁に預ら
 うかと大勢一度に下ヤくと取掛り泣く清吉を蹴飛ばし小富が両手を引張つて無体に及
 んどなしたれば小富は哀しさ遣る方なく身を縮まして聲を限り二人を呼べば答ゆるも
 のは返響のみ已に斯うよと見ぬたる折しも何處より來りしか一人の男が立現れ物をも
 言はせと天狗磔手當り任せゑ惡者共を取つて抛げ手並に懲りせ武者振つくをば擊倒し
 勢鋭く挫げば流石大勢の惡者原もコリヤ堪らぬと敗亡して頭を抱へ腰を撫で雲を
 霞と逃散つて行方も知れそなりたれば彼方の男は長くも追はせ頼て打倒れたる小富の
 側に歩寄り手を兩脇に指入れてやをら其處へ引起して様々介抱なしたりける

介抱しられて小富は心漸々我に返りあらはになりし浴衣の帯を接合して地上に手を突
 き助し男に打向ひ小富 誰方様かは存せねど此場の難儀をお助下されましたは神佛とも
 思はれて御厚恩の程何時迄も忘れは致しません 男 何夫程禮云ふにも及ばないが幸ひに
 辱めも受けお恙もなかつたけ重盛であつた併し夜も段々深て来るからサア着物を衣
 かへて早う歸るが好いと云ひつ、傍に居て共に禮云ふ清吉を雲間漏る月影を透し見て
 小首傾け 余の眼違ひかは知らぬが確かね前は此間伏見の稻荷前で大勢の乞食共に取
 巻れて居た子ではないかと云はれて清吉も此方の面を見て 清吉 オ、貴君こそその時助で
 下された叔父さん 男 イヤ、助けたの外の人。實は那の時如何かして難儀々救ふて遣
 りたかつたが余も人の世話になつて居る身分であるのでツイ遠て助ける事も出来な
 つた譯である夫の爾うと其折聞けば姉を尋る様子で又播州には兄もある様に云ふて居
 たがその姉と云ふのは 小富 ハイ妾で御座り升。稻荷前で弟の難儀と云ひ又只今は妾の
 災難をお救下され升とはよく、因縁のある事で御座りませうが重ねぐの御恩何と
 お禮を申さうやら夫に就ては貴君のお名前は何と仰しやつてお住居は何處で御座り升

妾は祇園町で賤しい勤をする小富と申すもの何卒お名前をお聞せ下さりませ 男 ナニ名
 前など、實は住む家もない他人の處に食客 畢竟余も尋ねる人あつて早うその人達に
 逢へる様觀音様へ心願込で毎夜参詣するのであるが少し心に當る所あれば余の名前
 よりお前が産地素性大事なくば言ふて下され此夜中に寝さる暇はせぬと送うたれて
 掛を仕られるのは定て尋常ならぬ仔細がありさうなと問はれて小富の早涙ぐみ 小富
 深切にお尋下されまして有難う存じ升御恩のある貴君様何の包圍を致しませう何卒妾
 等姉弟が哀しい成行を聞なさつて下さりませと是より身の上荒増物話れば男は屢々
 點頭てシテ播州に母さんが産で置かれた兄さんの名何と云ふのだと 小富 夫は何か
 い縁故のある事と見ねて母さんから是迄委しい話もなく此春播州へ行く前に初めて聞
 たので名前も何といふやら未だ知らせで御座り升と云ふに男は力を入れた肩を萎しホ
 ヅと吐息を吐きながら 夫で又母さんを殺した仇敵と云ふのは 小富 ハイ今の今迄凡そ
 夫であらうとは思ひながら尙確とも分りませなんだが觀音様のお告にて仇敵は正しく
 藤岡左一郎と云ふ播州武士と聞て男は仰天し夫はとばかりに暫らく物も傳言はざりし



が頓て胸透下して打笑ひ男成程丹誠籠めた
 念願から佛のお告と云ふのも尤で余ヶ祈願
 を掛るも全く佛の力を頼む譯でいられどお
 前が云ふのは必らさ
 平常の疑から自分の
 心を自分が開た事
 むらう正法には不
 慮なし如何に佛に
 ありとも人に辭を傳



へ王ふ道理はない余も學問などを仕た事なけれど前使はれた御主人から聞て居る所
 は到底神を信じ佛を念ざるのは世の八夫が誠の心を一つにする標進となる譯にて神佛
 を信仰するは好けれども溺れてけ成らぬと仰しやつたサア強ちお前の言はれる所を
 だ迷だど云ふではなけれど熟う此は勘辨せねばなるまいせ小富イエくお辞に背くで

はありませんが最前藩にうたれて居り升時千手觀音様が有りくと男イヤ夫がお前の
 心から現はれた形である小富イエ如何あつても仇敵の藤岡左一郎翌日とも云はせ是か
 ら直ぐにコレ清吉も悦んでその覺悟をと云ひつ、身支度取急ぐ女の胸の附詰めて思ひ
 込んだる一念は解くに由なく見ぬければ此方の男も持餘し手を拱ぬいて居たりしが怒
 ち撲と膝打つて男女ながらも仇敵を討んと夫程迄に思を籠めた事なれば成程佛の告も
 ないとは云れせ余も此迄の掛り合せその助太刀を仕て上げやう小富ヤ、貴君が助太刀
 とナ男オ、屹度後橋になつて仇敵を討さうぬい小富夫はく有難い是はマア夢でハ本
 いかと打喜ぶ油断を見込んで以前の悪者最前の仕返し覺悟せよと撃つて掛るを執念深
 い盗人共邪魔するナと此方の男の憤然として怒を發し手脚動して取抛蹴倒し途を閉て
 姉弟を扶引き麓の方へと走行ぬ

● 第卅七回

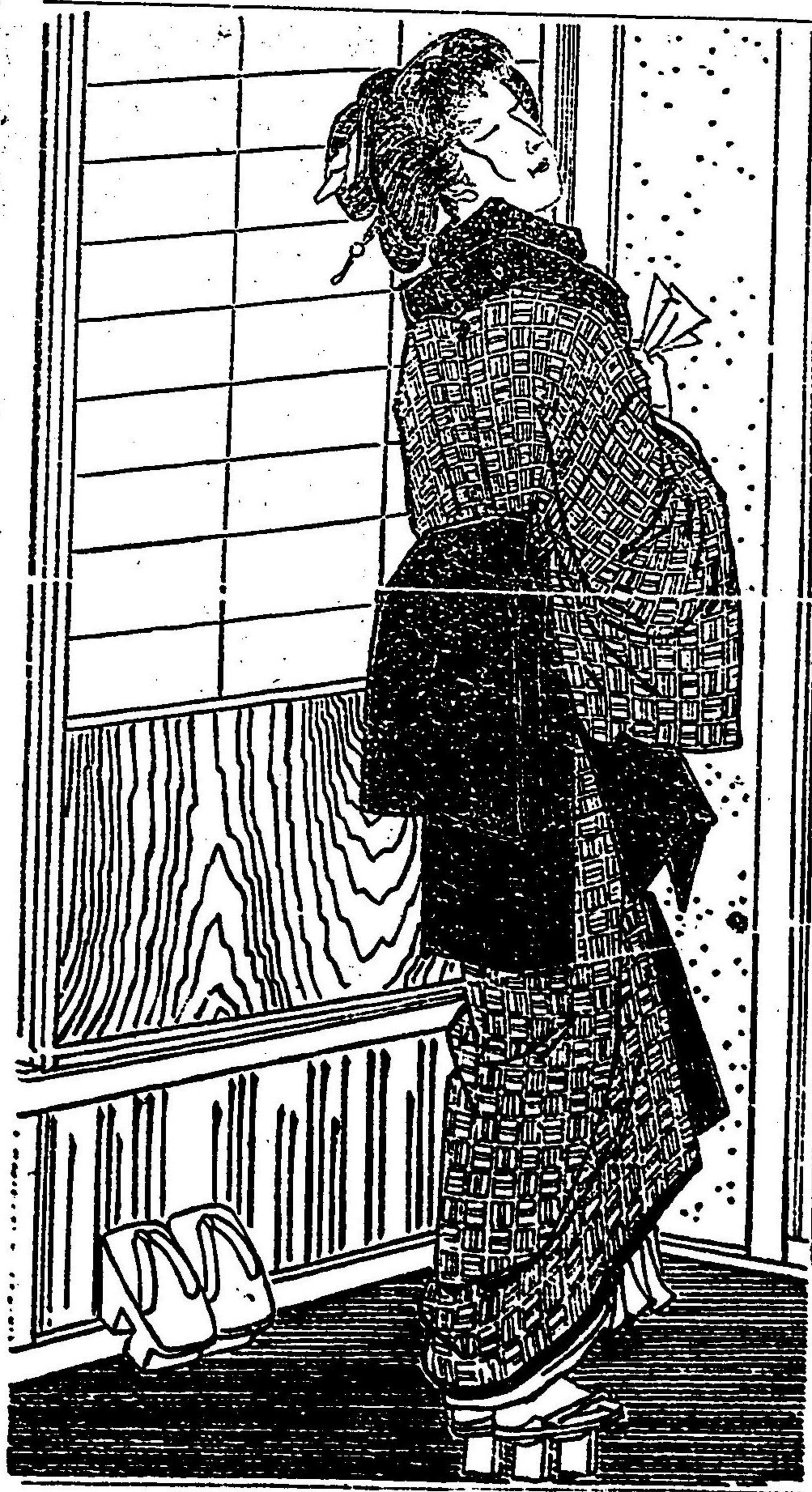
平常は何時も活潑く羽振を利かす熊鷹の角兵衛なれど今日は委れて火鉢の側腹組しつ
 、獨言。ア、何とかして工面の附標は無い事か金が出来せば男が立ぬ是も難小の事さ

へ無けりや貸借の方は相對づく又話の仕方もあれど今夜中に返さねば小雛の身受を清
 五郎へ譲らにやならぬ約束。イヤ夫ばかりか借りた金を返した所で清五郎から頼むと
 云つた身受の譲を謝るには大分骨の折れた仕事で詰る所が今直に身の代綱へ小雛を此
 方へ受出して仕舞にやならぬ爾うするには泣いても笑ふても貳百兩の金がなくてならぬ
 買は初めより難かしいとは思つたが大した金でもないから左程の心配にも及ぶまいと
 三日の日延を頼んだ處。何處も彼處も金詰り二ツ進も三ツ進も融通の附かぬとア困ッ
 たもんだ今朝も小雛から寄越した手紙で見ると若し津島の方へ行く様になつた日にや
 何れ生て居ぬ覺悟と見ぬるがハテ如何したものだやら藤岡の旦那には早計つた事の本
 い様に最前から小雛の方へ行つて貰ふたれど彌々此方で工面の附ぬ時にや話が如何倒
 けて来るやら知れないぬいと思案よ暮れし後より女房お玉が立出で、良人の前にチャ
 ンと坐りお玉コレ角兵衛どのお前の全休何をまどく仕て居るのぢやエ。モソツと母
 のある人かと思ふて居たに今度の所爲は何で御座んすアノ不動に僅かの金で雜言過言
 を言はれて。ハイ胸で聞て居ても思やしうてく腹が裏返る様ぢやにお前は只頼く



時刻過ては言牌なからうがナと云ひつゝ、立つて紙と硯を前に突附けサア早う暇状をと

に出来るからと不
動を離室へ通して
あるが一体その仕
舞ハ如何附る積り
か尙宵の中は今日
の日であるが段々



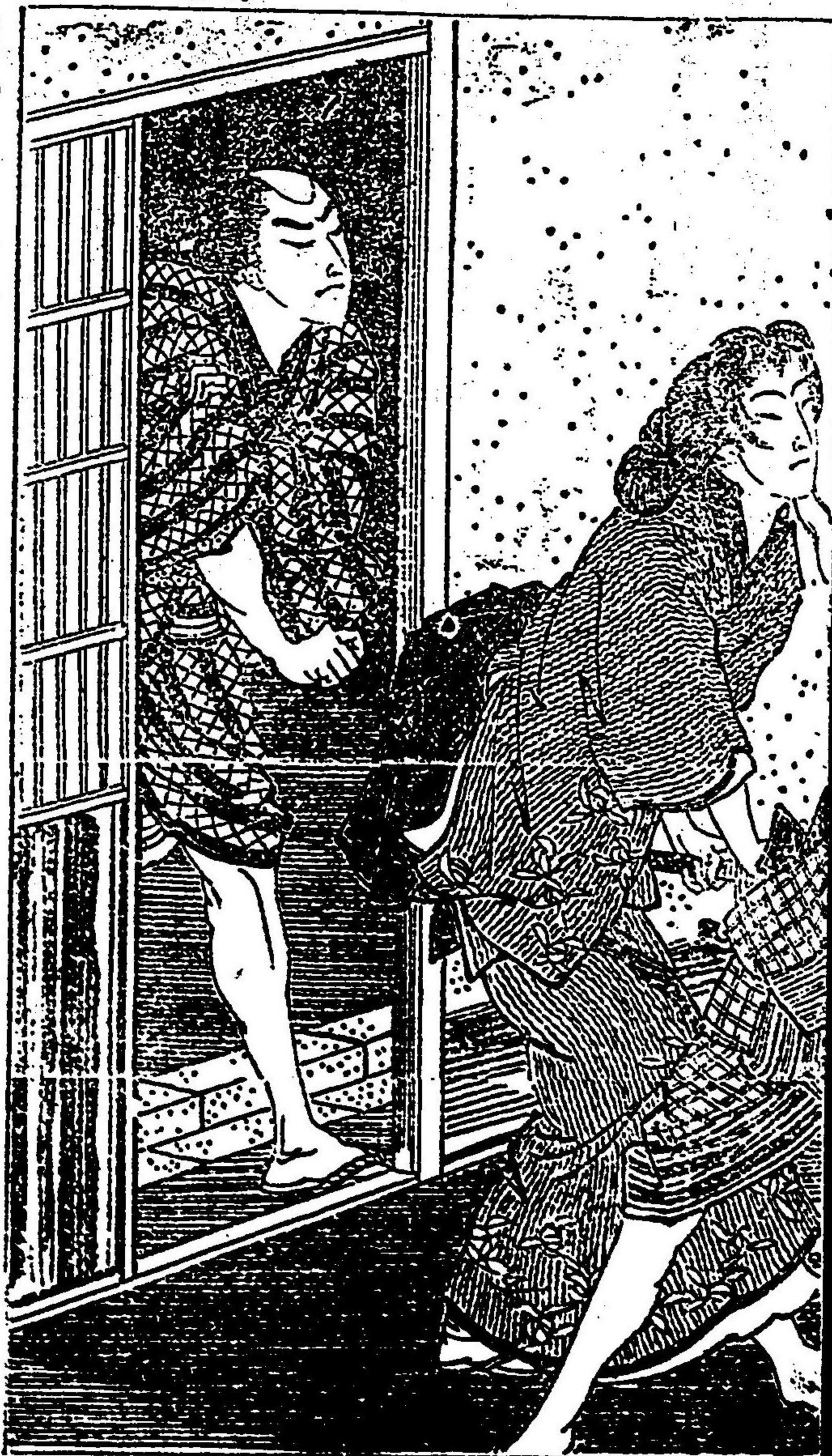
の一天張り彼でも親方の何の歎のと世間へ顔が出せるかエ。妾ヤ爾ンな甲斐性なしの

日頃に變つたお玉の辭に角兵衛の呆果て 角兵衛 コウお玉汝氣でも違つたか爾ンて馬鹿言
はぞに寐酒の持でもするが好いッお玉 コレくお前こそ心配を惚けたのであらうが妻
や氣も違はせッ、と心は實正なから身に難儀の掛らぬ先に陣を退く量見角兵衛 エ、夫ぢ
や旨實に暇取る積か お玉 煩重いわいナア。お前も今迄男と云はれたからには未練たら
しう言はぞにサツサと去狀書てお呉れ 角兵衛 ナ、好いッ餘計な事ア。モ一言ねへと怒の
顔色朱を漲ぎ奥齒に力を入れて墨摺流し禿筆陣碎てサラくど夫婦の縁の濃くも薄く
も濁文字三行半に走書讀返しもせぬま、に四ツつに折つて投出し 角兵衛 ソラ望の通りに
是持て行け。サアトットと早う出て失せうと白眼つけたる眞人の顔お玉はマツと見上
つ、手早く暇狀 懐に押込んで お玉 アイ斯ン所は何で長居をするものかナレく
で氣色が爽然りしたハイ左様ならと座を立つて表の簀戸を扯開て片脚外へ踏出しなが
ら小尻をして眞人の方をチヨツと振返り流石恩愛の絆遣る方なくやホロリと淫す一溜
溜ふ眼元を袖にて拭ひ再び表へ出る向ふへ歸り來れる藤岡左一郎夫と見るより聲を掛
けお玉どの何處へお出かど云ふにお玉の泣面隠し故と打笑ふてハイチヨツと其處迄と
手輕さ受答に身を摺抜け何處ともなく出て行く

● 第卅八回

表を道入て左一郎今歸つたぞエと聲掛るを主人角兵衛腹立紛れに聞達へエ、歸るなら
早う歸れ暇狀渡せば赤の他人何をクツく仕て居るのだ勝手にトットと出て行さみれ
と意外な辭に左一郎は合點行かねば側近く進寄り 左一 コレ角兵衛どの暇狀渡したとは
全体離に 角兵衛 オ、是は旦那で御座りましたか飛んでもない無禮を申ました。ハイく
別にお話致す程の次第でもない畢竟家内の私事。ナニ其様にお氣に掛られては却て恐
入升が實は女房の玉奴が暇呉れと申しましたので 左一 エーお玉どのが俄かに暇呉れと
は一体又如何したものの。夫と知つたなら今表で逢ふた時に引留る筈であつたに依し日
頃より那の通り眞實で爽快な氣性のお玉どのが急に爾ういふ事を言出すとは如何にも
分らぬ次第だナ。若しや我等が心なく長々厄介となつて居る杯から起つた苦情では御
坐らぬか 角兵衛 イヤ波相な決して其様な譯では御座りません全体別な事をお耳に入れ
るはお耻しく存じ升が元の起りは此頃の不都合續きで持物は洗ひ浚へ枉げた上尙足を

性が無いとか見限つたとか云つて敷から梯の縁沙汰女の方より言出された暇状なれば奇麗に只今書て遣つたと云ふ様も次第で御座り升と聞くより左一郎は嗟嘆して 左一



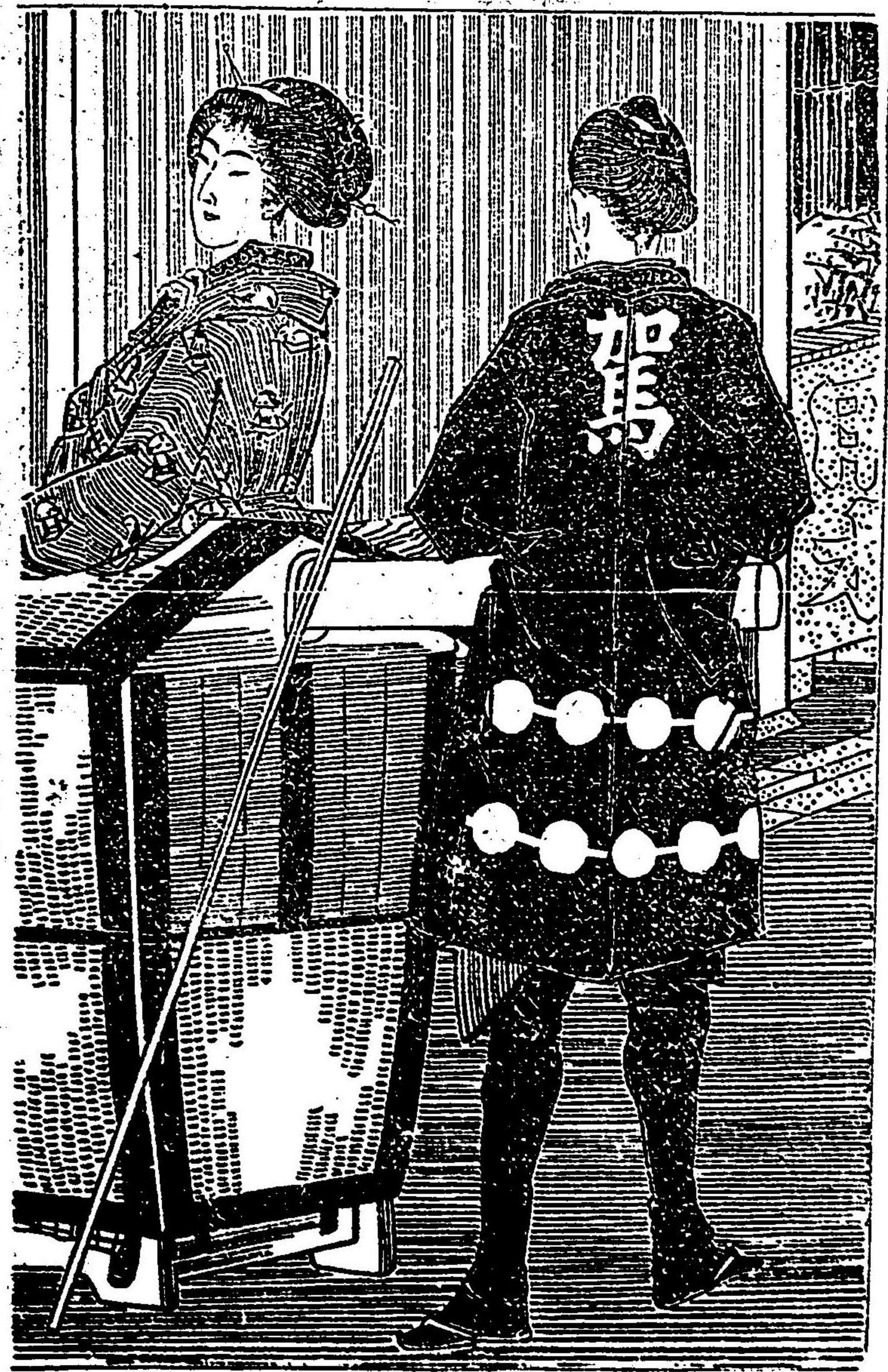
夫なれば尙更引留めなんだが残念なエ、今一步早く歸つて来れば爾ういふ事をさせなかつたを去りながら今となつては何とも致方がない只差當つたる今夜の返金此金子にて間に合せて下されお玉迄の、事は跡で亦如何とも話の仕様があらうと云ひつ、探つて百兩の金眼の前に差出せば角兵衛大いに打驚き角兵衛モシ旦那此金は如何なされたので御座り升失禮ながら貴君のお手に左一成程仔細を云はねば不審も尤だが實ハ此程より薄々聞けば卿の手元も不如意の様子であるよ尙其中から小雛の身受に種々の心配何分臆見を仕て居る場でないければ最前小雛の所へ行く折に指代の備前長光親重代持傳の名刀なれと實は身の指合せ鍔目貫から縁頭迄皆相應の作物なれば長い間兼理の掛つてある小富の方への借金済しをる一時にせんとの見込にて去る人へ質入の相談なしたるに何分取急での事なれば思ふ丈の金は出来を漸々是丈の工面が潤ふたので兎も角卿へ手渡しせんと立歸つた譯なれば外の事は暫く差置て此處の急場を是にて間に合はされよナニ遠慮も時と品に因ると強て言はれて角兵衛頭を下げ角兵衛此金私が借用致しては誠に濟ぬ事では御座り升が今夜に追つた手誥の催促旦那夫ぢやアお貸なされて

下さりませ其代り小雛さんの身受は此角兵衛が命に掛つても致し升と云ふ處へ贈金の方よりソソ／＼出来る清五郎モ一時刻も大分過たから約束の金受取らうサア御座りなくして呉れど角兵衛と左一郎とが向合ふたるその間へ堂つかと坐りながら前なる金に眼を注いでオ、如何やら金の出来方と見ゆるが今迄返辭を待つて置つた小雛の身受は金に眼を注いで呉れる氣か貴様云ふ通り金返辭の日延も快く聽た此清五郎にヨモヤ否とは云へねへだらうと角兵衛の顔を見詰めて問掛れば流石の角兵衛も答の辭に行歸り夫はどばかりに當惑なしたる折しるあれ表の賣戸口押開けて動搖々々と兩三人の脚音して先よ立つたる小富の弟清吉が藤岡の旦那母さんの敵ぢや覺悟なされと呼はる後に小富も涙々しき出立にて懐剣手に持ち怨の眉を引立て、込入れば之に續て藤岡の弟清吉が腰に一刀手挟み腕捲して勢鏡く走込んだり

● 第卅九回

是はと詠る左一郎覺悟々々と詰寄る姉弟を懸隔て、若葉蕨は小躍りして打喜ひ幾度尋ねくし若旦那オ、頂實の旦那コレ富清とモアア／＼待つた早まつてはならぬぞ

人違だ間違だ 小富 エ、此人は何を云ふのぢや 清吉 今も家の用事をする時 小富 アレ程



岡左一郎と云ふ名を知つて來なから今俄かに人達とは胡亂なぬいナ幾藏サア爾う思ふ
 のも無理ではないが小富ハ、ア爾ンならお前の仇敵の廻りの美等を返討にする積ぢ
 やなど云ひつ、懐劍抜て留める幾藏を斬拂ひ左一郎に取掛んと身をもがくを幾藏確わ
 とその手を押へマア氣を熱たせに余の言ふこと聞くが好い。コレサ余が尋ねる人と云
 ふのも外でない此旦那。アノ清水へ毎晩の参詣は此お方に逢ひたい計り。今宵の危
 急を救ふたのも辰の行掛りの腕立業別よ思とか功德とか云ふ程の事ならねと惠の高
 峯音陸陸料らぞ聞知る旦那のお名前仇敵と狙ふ卿が心に誤ありとは知りながら論して
 容易に聽れねば助太刀せんと言拵へ此處迄案内を頼みし一つの方便。サ、此旦那に
 取つて人を殺す杯の惡業あるべき筈はないと云ひながら左一郎の方を見返りて「ヤシ
 若旦那お話も澤山御座り升が差當つたる此場の仕義早う疑義解る様なされて下さりま
 せ此の兩人は一の谷にて母を殺されたを貴君と疑ひ仇敵呼はりするので御座り升と言
 はれて左一郎は事の不意に驚きながら打點頭さつと身を起し奥の室に走入つて手荷物
 附て一の小柄を取出し 左一郎忘れもせぬ本年の正月十八日の夜に圖許より急ぎ當處へ來

る途中一の谷を通りし折から人の誰とも白浪の族の女を斬殺し金を奪ふて立去らんと
 する者あれば已遣らじと引留め捕へて吳んと尋ふ中その曲者がコレ此小柄を余に打掛
 け随月夜に身を暗し逃去る後へ多くの漁師が來合せて余を盜賊と疑ひつ、押取へんと
 辨めくゆる名を告げ仔細を語つて言譯すれど彼方は少しも聞分せ向も疑ふて打掛り我
 身は又大事を抱へて由しない事に拘へるを憚れば取附く奴等を打散して其儘上京小
 柄は後日用立つ事必あらうかと斯の通り取置きたり全休余その盜賊でない證據は自か
 ら我名を名乗つた一事定めて其義の聞傳ても居るであらう。成程小富が兼てより一の
 谷にて母が云々して盜賊に殺されしとは聞て居れどその疑の余に掛りしとは實に思は
 れ迷惑なりと辭淀まぞ言述るに此時主人角兵衛も身を起し清吉小富を取支れば幾藏の
 手早く懐の胴巻より手紙取出し 是は兄に様より貴君へお届け申せと仰を受けた御
 手紙シテ又れ國の大變サア其次第は津島濠右衛門と之を助ける山田六郎兵衛が奸悪心
 その仔細は云々と辞短かに物語り、夫に就ては兒玉の旦那から頼さまをお預り申して
 當處へお供をする途中山崎の關所を通されぬ所から間道廻つて料らの賊難様さまのお

行方失ひと云ひさして偶と向ふを見て「ヤ、其處に居なさるは不動の親方如何して此處へと打驚き暫時辭め若切れたり」斯る折柄宵の闇には左しも華やかなりし祇園町の闇も吹荒む夜風に寂れて爪弾の遠音坐ろに人の膈を断ち一つ二つ残れる掛行燈の影微暗く往來稀れなる通り筋を横に曲つて弓張ならぬ小田原提灯棒鼻に吊し下げサケサケ昇來る駕籠の中主は誰とも白霜の置初めたる表口此處ぢや〜と愚杖カラリと突立て、熊鷹の親方送つて來やしたと駕丁の案内に連れてメツと立入る一個の藝妓家内に居合す人々が是はと思ふその中にも幾歳は姿を驚と打眺めてオ、貴女は續さまと仰天なして登いたり

● 第四十回

登下左一郎は小雛に向ひ左一最前も最前迎足らぬながら金の調達出來たれば何とか是にて急場の拒む出來やうから必ら早まつた事をせせ使の人も寄越すに及ばぬとアレ程言ふて置たに何事あつて不意に出て來たのだと云はれて小雛は左一郎の面を見て小雛サア其事は合點して貴郎からの音信を持つて居ました處今親方が妾を呼び此禮文渡

して早う角兵衛どの、方へ行くが好い逆送られて來たので御座り升と答へる辭の儀引ッ取つて駕丁の喜八が進出喜八へ〜その話は柳屋の親方から聞て参りやしたのを蠟燭の心が燼のも構はぞ扣へて居たのですがマア斯ういふ譯でと上り口に腰打掛け懸掛にした手拭片脇に抛捨て、「今し方の事でありやしたが此處のお玉さんが構屋へ戻込んで急に入用が出來たから二百兩貸て貰ひたいの抵當は是であると主人の前へ投出された一の書付熟々見れば熊鷹親方が自筆の暇状、處が最前藤岡さんは角兵衛どの、心配を見て居る計りでも濟まぬとて刀を質に金の算段今百兩を持って歸られたが是も定めて同じ口で義理ある思案と察せられその上角兵衛どのには去年田坂のあつた時一方ならぬ世話にもなり又那の通りのれ玉さんであればモ一度勤を仕て呉るなら二百兩は何時でも貸さうと直ぐに相談整ふて尙彼是照合ふて見ると凡そ察しの通りお玉さんが欲しいと言はれる二百兩の半分は小雛さんの身受のため残り百兩は角兵衛どのが今夜中には是非入る金と云ふ事ゆゑ夫なれば小雛さんは少も早う逆禮文卷て此通り連れて來やした又藤岡の旦那が角兵衛に心配さすまいとて質に入られた刀は角兵衛どのが贈出さ

まだ居らぬ義理なればお玉さんが跡の百兩にて翌日をも早々受戻すとの旨傳せあり



やすと委細を聞て左一郎を始め一座の人々大いに驚きしが取分け角兵衛は胸の中にて女房出かした好く違つたと喜ぶ色は怒ら面に出て思はせ笑を含みける斯る始末に小難



は獨り嬉し氣に今しも小宮清吉等の様子を訝りながら立歸らんとする駕丁を見返り、
 離オ、喜八さん大に御苦勞親方に宜しう言ふてお呉や。コレ幾歳去しやモー歸ら
 とも好い事になつたから卿も外へ行かせと旦那のお傍にと喜餘つていそぐするを
 に見て居る小宮は齒齧をなして忿怒の有様凄じく縁の髪も逆立つばかり眼尻の上
 振はせて支る角兵衛幾歳等の手を振切り、小宮エ、悔しや妬ましや景前から見て居れば
 樂しさうに藤岡さま何と言分けあさつても観音様のお告めれば母さんの敵に違ひな
 い覺悟や々と懐劍閃かして狂氣の如く斬か、れば左一郎は東西へ避かはしなから異の
 敵は此持主。三ッ柏が紋所の詮議の手掛り。夫程怨を返さん志なら飽迄行方探して
 快う討して遣ふから先氣を静めて事の次第を考へよと説けと諭せと小宮は少しも
 分けを忿狂ふて止まぬのみかは終には傍に居合す小雛をも怨の程を思ひ知れと懐劍
 て斬らんとするにぞ子供ながら清吉さへ余も姉さんに負はせぬと小雛指を打振りく
 斬掛らんと舞めて騒動大方ならざりしが此に又不動の清五郎は始めより頭を下
 組んで彼方此方の様子をば駕つくと観もし聽もせし何思ひけん此時俄かに身を起し

腰に帯びたる一刀抜手も見せせ小宮の肩口ハッシとばかりに斬込んだり

一 ● 第四十一回

不意に起つて清五郎が小宮を手に掛けたる有様に居合す人々は是ほど驚く間もあらせ
 清五郎は返す刀を逆手に取り我腹に突立んとするを見て一座再び打驚き中にも幾歳は
 逆早く身を進め幾歳親方コリヤ如何した事だマア〜待て仔細を。コレ親方血迷ふて
 の切腹かと刀取る手を離かど押おれば清五郎は面を上げ清五血迷ふたとの情ない高の
 知れた女の一人位を斬た逆血迷ふ様な不動ぢやねへ今乃公が腹切んとするの深
 のある事だ其處に居らる、藤岡さんもお聞なさつて下さい。全体此清五郎の播州生
 年の行かぬ頃から松ヶ枝家の御家中兒玉三左衛門様の方に御奉公致しその頃十名を忠
 藏と申しましたのが偶とした迷より屋敷へ出入の豆腐屋七平と云ふ男の女房にてその頃
 はさぬと云ふものと道ならぬ契を結び濟ぬ事とけ知りながら子迄あるその女房を誘出
 して諸處方々を徘徊して終に伏見へ足を止め故郷の稱を家号につけて播磨屋と呼び名
 をも清五郎と改め屋敷方へ出入して人足などの受負を渡世にする中七平男は病死と聞

ね私は又
 女と男と
 阿個の子
 を擧げ先
 兎も角も
 月日を過
 して居り
 やしたが
 此春の戦
 争に商賈
 柄逆家の事をも捨置て兵
 粮人足の頭となり戰場に
 出て働く折不意に起つた



敵の焼討烟に巻れて此通
 り面も頭も大火傷不思議
 に命は助りたれど家に戻
 れば是も亦兵火に焼失せ
 て女房子供は行方知れぞ
 ア、死になつたか何處ぞ
 へ逃て居るかと彼は捜し
 て見ても皆くれ手掛があ
 りやせんから互に命さへ
 めるならば又逢ふ事も出
 来やうと諦めて夫から當
 地の大佛前に住居を變た



處が此四五日前北野の境内で料子を見掛けたは見玉様の御同役山川六郎兵衛様向

ふは見忘れて御座れども此方より名乗掛けて一つには舊主の御安否二つには若女房子の行方が知れる事もやと色々お話聞て見ると御家老藤岡さまの罪に因つての退轉話夫に就ては舊主の嬢さまが脱走しられた藤岡の弟を懇慕ひ京都に上つて藝者稼如何も見るに忍びぬとの深切らしい話をば眞實なりと思ひ誤り責めて嬢さまの身を扱て悪い虫を拂除け國元へお返し申さば昔の罪を少しは亡す便にもならうかと遠慮な考から角兵衛へ無理應對今夜中に嬢さまを手に入れんと宵から此へ押掛けたその處へ母の敵討とて入来るは娘の言に悴清吉是はと驚く胸を静め面相變つて此に居るをば父なりと知らぬを幸ひ様子如何にと見聽て居れば津島山田の姦惡邪心言はふ様なき人非人之に就ては舊主の嬢さまも悪人共の毒氣を避けて父御三左衛門様よりお申付で當地へお越なさつた譯と初めて分つた事の黒白。コレ清吉ママ静かにして乃公の言ふことを聞くが好い。其處で前にも言つた通り斯した事と氣がつかき只一圖意に山田の辞を眞として舊主へ盡す志が却て舊主の嬢さまを苦しめて舊主の家に縁を引く藤岡家の仇敵筋へ嬢さまを手渡せんと骨折つたる愚さよ夫に就ては捨置難い娘の舉動左一郎様を仇敵呼は

り細な縁故を聞く間はなけれど取留た證據あつての事ならぬは言葉の端にも現はれて狂ふの畢竟嫉妬心その上知らぬ事とハ言ひながらお主筋なる嬢さまハ刃を向けし危ふい場合さへへる隙もないのみか生て置ては如何なる仇をなさうも知れねば斯の仕合せ去りながら久々逢ふた我娘を名乗りも取へ手に掛て斬殺した親心察して下されよと眼をしばた、く清五郎の辭を聞いて一座何れも打萎れて思ひを形を改むれば清吉は又父と聞くより清五郎に絶りつさオ、貴君が父さんでありましたかと言ふに續て深傷と見ぬて倒れ居し小富も俄か身を起こし最前斬られた時には氣を失ふた様になりましたがその後段々のお話を夢うつ、又聞いてから今迄の迷が覺めて我身おがらも愚痴な心であつたのがお恥しいと後悔面に現はれしを見るより幾造は打喜び幾造オ、流石は乃公の妹だコレ不動の親方嵐は遠へと此お富は余の妹前にお前が話しなかつた豆腐屋七平の子と云ふのは外でもない此幾造だせと聞て驚く清五郎小富清吉も諸共に仰天するを眺見て幾造は點頭ながら清五郎に打向ひ幾造シテ山田六郎兵衛津島様之丞の居處は清五 祇園町の河系にト云より早く幾造が留めて居たる手を釋放し以前の刀を取直し

腹へツサツと突立たり

● 第四十二回

又も降出す時雨の天夜も甚く深けたれば人通りなき鴨東を祇園町の河糸より二挺の駕籠を急がして北の方へと歸行く兩個の客ありしがその跡つけ來たる主従兩個頓て傍近く追着てコリヤ待つたと聲掛けを彼方は大に驚けるか兩人何れも駕籠の中より轉び出でその儘脚に任して逃んとするをば彼方は已遣らじと宙を飛び一人は早くも逃課せられた後れし一人を引留めたるに彼叶はじとや思ひけん有無の間答にも及ばず腰刀引抜て斬拂へば主従も亦刃を合せ暫らく戦ふその中に彼方が打込む刃尖を彼受損じたかアツと叫んで倒ふる、にぞ主従は獨言てア、手が廻つたかと云ひながら引起さんと立接る折柄晴る、天の雲西に傾く月影にその面見れば知らぬ人も主従齊しく打驚き「コレ幾造今川糸にて聞いた處では必らず違はぬ筈であつたに」若旦那左一郎横迷たは權之丞引留たは六郎兵衛と思ひの外是の如何ぢやと驚きしが左一郎は尙好く倒れし武士の面打眺めて 左一 ヤア汝は金澤藩と唱へて居た 武士 オ、藤岡か思ひる寄らぬと云ふ折

柄後れて走着く熊鷹角兵衛差出す提灯にて照見れば武士が羽織の紋所以前出會ふた時は左もなかりしに三ツ柏にて五つ所黒地に白の染抜にて判然り分れば左一郎は折る折逆心奮りオ、爾うぢやと手早く懐より小柄取出し手負に向ふて聲高く己盜賊木屋町と云ひ小富が家と云ひ度々無禮を働く上本年正月十八日一の谷にて女を殺し金を奪ふた覺があらうその時打附た此小柄羽織の紋と割符の合ふた上からはと目前へ出抜にさし付れば彼のハツと吃驚し夫知られてはと周章て、逃んと跳躍けども深手に眼眩んで立つこと出來ねば最早叶はじと觀念せしか大地に片手を突て 武士 ア、斯うなつたからにや仕方がねへから何も歎も言つて仕舞はうが何を隠さう乃公ハ元越後の産れ金澤藩の田中賢造とは眞赤な偽り誠は高田の城主 榎原家の足輕横山吉右衛門の二男賢造幼少い時より家を飛出し江戸で長らく屋敷奉公彼地此地と渡る中色と酒とよ狂ひ廻り揚句の果ハ身を沈めたる白浪仲間一度より二度三度と仕事があがつて近頃は可なり指折の大盜賊人を殺したる十人足らぬ其中にや察しの通り一の谷で女を殺したのも交つて居るのだ。所ぞ不思議なは去年播州でその小柄と同じ處で盜取つた此羽織平常は荷物の

○ 聞より幾歳
 は思はせ左一
 郎の面を見て
 若旦那不思議
 な事と云と比
 しく繁造は手
 傷に段を病り



底に入置たに今夜に限つて着て居たか
 ら盗賊なりと眼附れた一事であるが是
 る畢竟運の盡き責めては殺した女に縁
 由の有らさうな前達又斬られて死ぬ
 のは罪亡しサア立派に首を落して貰ふ
 かいと云ふに左一郎は打點頭さ左一夫
 に就ては前に逃出したる定めて盗賊繁
 造イヤ那奴は和田新九郎と云ふ悪者な
 がら未だ盗賊とは云れの新米野郎。此
 春山崎の谷合で料ら毛山から斬んだ一
 人の女を拾上げて祇園町へ賣却したが
 此上もない大仕事何もお前さん等に掛
 りがなければ免して遣つて下さいと。

が来て苦しい
 息を吐きなが
 らア、切ない
 早ラスツバリ
 殺つて下さい
 實は今方兼て
 官から手が廻
 った様子を見
 き高飛をする
 途中だから早
 かれ喉かれ無い命何も遠慮にや及ばな
 いと首指延た覺悟の体に左一郎は幾歳
 に夫と眼交なしたれば幾歳は刀振上げ



小宮清吉の名代兼ね今こそ返す母の仇敵と腹の中にて思ひながらアハヤ首打落さんと
 なしたる手元を傍に立つたる角兵衛が暫らくと押留めつ、兼造に打向ひ、角兵衛今更に乗
 るも要なければ覺悟の好いのに免じて言つて聞かすが乃公の責の七つの時に家出仕
 て今は角兵衛と名を變へたが全く汝の兄の角造だぞと聞くより兼造は面を上げニツコ
 と笑ふたが此世の別れ倒るゝ所を角兵衛が夫と促す腹と共に兼造の閃かしたる刃の
 下に首は前へと轉びたり斯る折しも繩手の方に提灯多く閃くは逃げたる瀬屋が知ら
 せにて人の睡來る事と覺しければ角兵衛は手早く兼造の首を抱へ左一郎兼造等と共に
 に迂路して此を立退き我家を指て走歸かねは左一郎は角兵衛の心を察し私かに兼
 造の首を葬らしめ之に就ては差當りて兼造が艱苦の中にも使無さき持居たる二百圓の
 金にてお玉の身を受戻し又清五郎は昔の罪を自ら悔て腹を切つたる積重くその體
 終に鮮切れたれど小宮の思ひのはかに深手ならで父と共に死せんとするを留めて兼
 造を加へしに日ならむ癒ゆへき氣色なれば小雛の彌生が執持して後々は左一郎の側室
 にもと勤めたれど小宮は以前に變つて愛着心を縁の髪と共に觀察て、傷全快の上薬

の衣を纏ひ北山の去る村に行、澄せる尼法師の弟子となり専ら亡父母の菩提を弔ひ弟
 清吉は角兵衛に請受られてその養子となり名を角太郎と改め終には正當なる商人とな
 りけるとぞ是等は皆通か後の話なれど筆の序に配し置くのみ切ると角兵衛が案にては
 清五郎の切腹に就き官より檢死をもありたれど只だ些細の間違より此に及べると云
 ふ事にて都合好く落着し兼造が上は元盜賊にて召捕方の手當にもなり居たる者故か別
 に嚴敷陰味もなかりしが兎角する中夫の津島山田の兩人も薄々斯る始末を聞及べるか
 俄かに國元へ引取れる様子にて幸ひ角兵衛が骨折にて若干の路用も調ひたればイザ是
 より我等も國元へ立歸らんと左一郎の彌生兼造の兩側を伴ひ播磨路さして旗立ちぬ
 此後如何なる物語あるか今二三回にてその團圓を見るに至らん

● 第四十三回

此に松ヶ枝家の城下を二里許隔てし妙壽山の麓なる田中村に瀬やかなる一軒の庵あり
 山の坊寶珠院の別荘とも云ふべき處なるは此庵に住す智月江月と云ふ兩個の尼、智
 月は年早六十に餘り江月は未だ二十四五歳に過ぎを明兼只念佛三昧の外に他事もなき

は何れ世を憂なみての業なるべけれと去迎一念尙俗を去り難き處あるにや西の軒端に
真如の月を眺めながらも折々は又物繁じに眉を蹙する事ありて初は如何なる人の成
果とも知れざりしかと終に離云ふとなく是ぞ此春身を君家のために殺して忠義一掃
に比類なき松ヶ枝家の二家老藤岡左内が母岸野と妻浪江の兩人なりと仄かに知るもの



出来にける去れども津島山田等の奸臣尙國の政を執つて威權を専らにすればその謀
りを恐れてか尋問ふ人もなく只日々に親しく出入して庭の掃除浴の湯焚と手の届く

だけに世話をやき畑で作れる瓜茄子を始めとして芋頭より粟大根などを持来り、
 は同じ村の七助男のみ最開かなる柴の戸は常に鎖してありながら月日の過るには
 守なく今歳も早霜月末つ方讀殘す曆書も端短かうなりしが或る夕江月は智月尼の必懸
 めんどて江月今朝より霏々と降出した初雪最前から止んでは居升が山家丈に消ぬるも
 遅うて其處等に積つた景色月の照さへ宜しければチト障子でも明けませうか 智月イヤ
 モー見よまい〜風に就け雨につれて兎角に昔が思出される雪と云へば此春左一が出
 立した時餘寒強うて雪催しの空であつたに夫から以來花は咲けども夏は去ぬるも何
 の音信もなく月は十度餘り圓うなり定めて彌生無職とも逢ふたであらうに只の一度も
 安否を告げぬは不孝者何せ一通の手紙も來ぬであらうと又もやふさぐ心の中實に尤と
 も言葉ねて江月は愁な事言出して却て物を思はしたりと頭を垂れて居る折柄柴の戸が
 ト〜と叩く音するにぞ江月は身を起し夜に入つてから障子であらうと不審ながら未
 だ失遣らぬ武家口上障子方縁かと表に出で、聞けば何處やら聲のある聲訪來し人も夫と
 察し「オ、奥様で御座り升か。ヤレ纏しや養女奴でと云ひつ、後を向て手招けば左一

郎彌生も共に木蔭より走出で各々江月に挨拶して兼て聞來れる事なれど養果たる濱江
 の姿サア此地等へどひかゝる後に月の洩る。胸いた彫。立入りて母に逢んと奥の一室
 へ近くに母は内より障子ヒツシヤリ 智月不孝不忠の痴者には逢ひたうない兄の死んだ
 る家斷絶も心に掛らぬ事と見ゆ手紙一通寄越もせせ兄はお家のため國のために命を捨
 て、忠臣の誠を盡すにその身は京に居たを幸ひに女房家來を引連れて悠々と月日を送
 るとは何事を腰拔とも白痴とも言はふ様なき卿なれば。イヤろの言譯ハ聞ぬ〜。サア
 何處へなと勝手にトットと出て行きやれ。ア、思へば忠義な兄を子に持つたの此上も
 ない果報ながら卿の様な情弱者にも母と云はる、お情ないぞ此方が言譯する辭をば耳
 にも留めぬ一徹心江月は中に立たる柱の際次の間よりして 江月そのお腹立は御尤では
 御座り升れど是には何ぞ仔細がありそうなコレ左一迄の早う母御のお腹に入る様にと
 執持てと障子の内には尙も聲を聞して 智月イヤ聞かぬ〜と云ふと比しくアツと一應
 怪しき物音聞くより此方は打驚き何事なるかと障子グワツリと引明れば無難なるかな
 智月の岸野鐵劍咽に突立て、紅に染んで居たりける

智月尼の傍に皆々馳寄りて「コリヤ何故の御自害で御座り升如何した譯で何の仔細で
 と周章て惑へど智月の岸野は何にも言はせ左一郎の顔怨し氣に打眺め頼て眼を塞ぎ指
 俯向ば左一郎は氣も堪らせハッタと其處に平伏して 左一サ、そのお腹立ハ御尤では御
 座り升れど其上京致した後は専ら薩長其他藩々の諸士に交りて夫どなく御當家のため
 に悪評を辨解し君公の過を取繕ひ及ぶ限りの力を盡して一ツ廉忠義は立た積、然るに
 思ひも掛ぬ兄上が御身の果。夫も斯々した次第にてと彼の地の模様を細やかに語るを
 助けて彌生幾造も共に今日迄の成行委しく言述て自ら手を下したるにあらざれど仇敵
 と狙ふ津島樞右衛門之を助ける山田六郎兵衛争でその儘に置くべきか乾度兄上の御體
 憤且那の御無念を晴し奉る覺悟にてと聞くより解る怒の色母の岸野ハ始めて口を開き智
 月オ、左一郎夫でこそ我子なれ必らせその辭の違はぬ様と念をおしたる母の心を大方
 推して左一郎はいと胸を痛めて眼を屢た、さ 左一前にも申した次第にて據ないとは
 云ひながら久しく看信もせざりしより某をば不甲斐ない者と思召して心願すための御

生害と云ふを打消し智月は頭を振り 智月イヤ〜余が自害は夫ばかりの事ではない
 る兼て知つて居やる通り恐多い事なれど主君には元御發明に渡らせ玉へと津島山田等
 その他佞臣共に欺かれて只遊興にのみ耽り今日の時勢、在つて尙一度の参朝をも仕玉
 はせして政事も段々過多く百姓町人は何れも怨を含めばいつ何時如何なる變の起ら
 うやも知れぬ我身は固より女ながら昔の人にも例しあれば命を棄て、歸める此世面汚
 れし血潮ハ憚あれど赤き心を我君の御眼に觸れて今日迄の非とお覺り遊ばす様三左衛
 門どのより執次を頼むは只此一件と男も及ばぬ義烈の心に左一郎義藏等は一陣氣を隔
 まされて躍上り壁逆立て己津島山田の輩一家に取つては仇敵公にては國の賊佞令身
 体を粉に砕くとも擧取らせして止むべきかと勇み立つたる折をもめれ怒ら表に案内の
 聲幾歳早く耳に留め立出現れば一個の若黨兒玉三左衛門よりの使と云へば江月が涙拭
 ふて來意を問ふに急ぎの用とて差出す文箱如何なる事かと中の書状を開見れば津島の
 様子を知らせの文意江月は坐ろに笑を含んで左一郎幾歳にも之を示せば兩個は大いに
 打喜び「斯迄事急よなるべし」と思はざりし何にもせよ此時を失ふてハならじ早くそ

の支度を整へて直に
 是より發足と立上り
 ながらる左一郎は助



かり難き母の身命
 責ては最期を見届
 けるし永さ訣をり
 惜んと両手を突さ
 て母上と呼掛るに
 彼方は細目に眼を
 開き最嬉し氣に我
 兒の顔を見つ、流
 石丈夫魂の智月
 尼も蒲手に弱る老
 の身の終にその儘



浮世の夢を見殘して此に果敢なくなりたれば江月彌生は直と屍骸に取付て流す涙は雨
 頭堪への怒に左一郎幾歳も雨の袂を濡らし、か折しも耳元に鳴響く妙香山の鐘の響取

へて見るに夜中なれば兩個は乾度心を取直し後れては一大事と暫時の別を告るさへ匆卒に澄渡つたる月打仰ぎ雪踏藉いて心指す方へと出行ぬ

● 第四十五回

此に又津島權右衛門は這回去り難き公用ありて主公の命を受けて東京へ赴かん連東雲に
圍敷を出立しその昔ならば供廻杯も器々しく籠籠と鎗と拵箱よと外観に係る事多かれ
と今ハ維新の御代となりて万事無益の粧飾を省くべしとの御趣意なれば僅かに若黨一
人仲元二人主従四人の二列にて播州稻荷崎の湊より船に取乗り神戸に立寄り夫より横
濱行の外國船に乗込む手筈にて今日は天快く晴て宛ながら春の如くなれども冬の日な
れば船出の時に後れてはと好智に長けし權右衛門も神ならぬ身の我から進み居所の歩
み脚急がして行く程にその日の正午頃には稻荷崎も間近になりて浜打寄する海邊の道
に差掛り松生茂る明神の社の前を何心なく通過んとする折柄忽ち立現れる藤岡主従身
輕に出立つて行手を塞ぎ左一郎は聲振絞左一如何に津島權右衛門汝が卑性奸悪なる執
計より兄左内が一命果すその上に打首の義首のと腰刀を加へた刺さへ責を蒙る

として事成らざるを憤り終には藤岡の家名を斷絶させ尙某にも罪名負せて郷里の通路
を絶ち冤恨を訴へんにもその道塞ぎ上を眩惑し下を虐ぐ大罪人今こそ返す兄の仇敵一
つには又國のため。觀念なして刃を受けよと罵りながら刀引抜き斬か、れば權右衛門
は今更逃る逆逃さじと思ひてか故と高々と打笑ひ權右衛門と呼ばる、覺はないが無禮
を働く青二才覺悟しをれと抜合せ上段下段と斬結び砂を蹴立て、取ら傍に權右衛門の
供人等も流石見兼て刀脇差抜連れて主を助けんと斬掛るを幾幾ハ妨すなど遮り止め三
人相手に渡り合ふ此方は左一郎と權右衛門尙も劇しく挑み合ひ撃てば受け拂へば沈み
互に秘術を盡せしむ權右衛門の終に誠疑つたる左一郎が鋭き刃を受損じ肩先深く斬下
られ失敗つたりといふ問もあらせ左一郎は勢込んで懸掛け矢庭に墜落せり斯
くと見るより供人等は左なきだに二の脚踏める事なれば我先にと逃走るを幾幾免さじ
と追掛しも逃るに掛ては彼の脚や勝りけん何地行けるか暫くの間にその影さへも見ぬ
まなりぬ此に又左一郎は難なく權右衛門を墜倒したれを乗しか、つて絶命の刀を刺し
首墜落て幾幾共に松林の中に進入り木の根を床よ首を供へ兼て用意の兄左内母岸野と

の名前記せる位牌を祭り頓て首を木の梢高く吊置て左一郎は俄かに腹寛げて短刀拔出し切腹せんとしたるを幾藏早くも夫と見て取つて速しう引留め幾藏モシ若旦那ユリヤ何事如何した譯で御座り升左一悪人ながらも國の老職怨われども某その官にあらざれば罪人なり逆之を殺すの當らぬ道理畢竟藩の法律が頼むに足らぬから斯る仕合藏夫ぢやと申して左一所詮死なで叶はぬ我命エ其處放せよと争ふ折から今來し路の彼方より砂烟擧つゝも驛地に馳來る早馬上なる主の兒玉三左衛門騎く中に近づいて夫と見るより先聲掛け早まるまい左一郎との引留置さひらりと馬より飛で下り此度其許年來主君を度るにして政事を亂し私慾を働さ備主君を害せんと謀りたる津島權右衛門を撃果せる功に因り藤岡の家再興の上相續申付るとの御意なり有難くも受われ即ちその御書付は是なりと懷より取出して手に渡せば左一郎は夢かとばかりに打喜び形を正して受意くに幾藏も小躍りして君恩の厚さと三左衛門の厚慮に感じたるは三左衛門は辭を改め左一郎に宿志を遂げたるを喜び聞ぬ就ては此場の始末は他領ながら藩主は務々枝家とはお續合の中なれば事六かしからを計らふべしとて此折後れ走せに走付け

たる掛り役人をして領主の許へ赴かし自分は左一郎幾藏を引連れて此を引上げその脚にて登城をなせば主君は早速面謁許され丕賜つて津島權右衛門が好意は蒙て左内存牛中より聞く所もありしが予暗うして當時用ゆる能は左内死後に至りてハ三左衛門より度々の申立にて漸やく彼が奸を察しながらその折向藩中の動搖に懸念あれば時を見て誅戮加へんと思ひ居たるに今その時及んで汝が歸國萬事三左衛門と謀合せ故と東京へ旅立たせて終に首尾好う今日の仕宜に及べるなり夫に就て惜ひべきは摩野が自殺昨夜汝より三左衛門の手に届けし彼が遺書一言一句予が訓誨ならぬはなし斯る賢女を無難々々と死なしたる畢竟言へば予が過ちなりと言はるゝ處へ目甲符腰飾御返が切腹申付られし山田大郎兵衛は今その檢屍を果し權右衛門の男權之丞は捕手に刃向ひ斬死致せりとの届をぞなしたりたる恚て左一郎は彌々左内の跡目を繼ぎ三左衛門も此度の忠勤に因り共に家老職を申付られ彌生は更に左一郎の妻たる披露をなし浪江の江月は一兩人の下女を附られて長く寶珠院の尼君が弟子となり若黨幾藏は吉田と云ふ姓を賜はり士分に取立られその後世の縁續つて番士の名はなくなりしる今に藤岡の

家と共に繁昌なすどど又夫の舊土の恩を忘れず甲斐々々しく智月江月の世話を爲したる七助には當時左一郎より厚く報酬を爲し初の程は邪正清濁の別も何時明るくなるべきか八重の潮路の邊かにして事入組める敬語も此に全く局を結ぶこと、はなりぬ

版權登錄

全 明治廿一年十月十九日印刷
年十月廿四日出版

定價金 下金

發行者

大阪府南區末吉橋通三丁目十五番地

大淵 濤

著作者

大阪府東成郡玉造岡山町三百七十九番地

佐伯 久作

印刷者

大阪平野町二丁目十一番地
自由堂

山上貞二郎

發賣所

大阪心齋橋北詰四番地

駸々堂本店

版權所有